

海外協力の 現場から

リベリア編

青年海外協力隊員の
記録

昭和57年3月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY



1064369[0]

国際協力事業団	
資本金 584,524,900	517,000,000
	36,524,900
登録No. 1073901	JVP

序にかえて

昭和57年3月

青年海外協力隊
事務局 長 野村 忠 策

青年海外協力隊が発足して17年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1次隊の隊員約48名がフィリピン、マレーシア、カンボディア、ラオスの4ヵ国へ派遣されて以来、今日まで約4,000名の隊員が31の開発途上諸国へ派遣された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして、今昔の感に耐えない。

同時に、このような協力隊の発展を見るにつけ私は、受入各国で高い評価を培ってきた隊員および、本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を傾注されてきた政界および都道府県の方がた、青少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて、協力隊事務局では昭和54年度から、隊員が事務局へ提出した業務報告書を国別にとりまとめ、『海外協力の現場から』と題して報告書集の刊行を始めた。幸い、各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので、本年度もペルー、リベリアの2ヵ国編を刊行することとした。

いうまでもなく、協力隊員の活動は、開発途上諸国の国づくり、人づくりに“草の根”で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。日本とは全く異なる文化社会で、そこに住む人びとと共に暮らし、共に働くことには種々の“壁”があり、時には挫折感にとらわれる。報告書は、その壁を乗り越えて新しい協力手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歓に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に、我が国、我が国民全体の財産でもある。

私は本事業は隊員受入国にとってはもちろん、我が国の将来にとっても素晴らしい事業であると確信している。今後の本事業の飛躍的な発展のためには国民各位の御理解、御支援が不可欠である。一層、御理解を深めていただくうえで、この報告書集が活用されれば幸甚である。末筆ながら、報告書集作成に御協力願った関係職種の技術専門委員の方がた、ならびに隊員(OB)諸君に謝意を表する次第である。

リベリア編

目 次

序にかえて……………野村 忠策…(1)

◎任国事情と配管技師としての活動……………星 英次…(5)

 回想・アフリカの大地……………星 英次…(25)

 星隊員の報告書を読んで……………阿部 森雄…(27)

◎Robertsport 事情と教育活動……………山内 務…(29)

 日本に帰って考えること……………山内 務…(45)

 山内隊員の報告書を読んで……………沢田 和佐…(46)

◎Bentol での農業土木協力活動 ……………猪之鼻謙志…(49)

 日本に帰って考えること……………猪之鼻謙志…(75)

 猪之鼻隊員の報告書を読んで……………安養寺久男…(77)

◎将来の職訓モデル校で活動して……………大場 清孝…(79)

 隊員活動を振り返って……………大場 清孝…(97)

 大場隊員の報告書を読んで……………高島 信也…(99)

◎自動車整備技術指導の2年間……………小野 芳裕…(101)

 日本に帰って考えること……………小野 芳裕…(112)

 小野隊員の報告書を読んで……………上川 修二…(114)

◎タブマン高校での活動……………竹内 俊博…(115)

 日本に帰って考えること……………竹内 俊博…(133)

 竹内隊員の報告書を読んで……………沢田 和佐…(141)

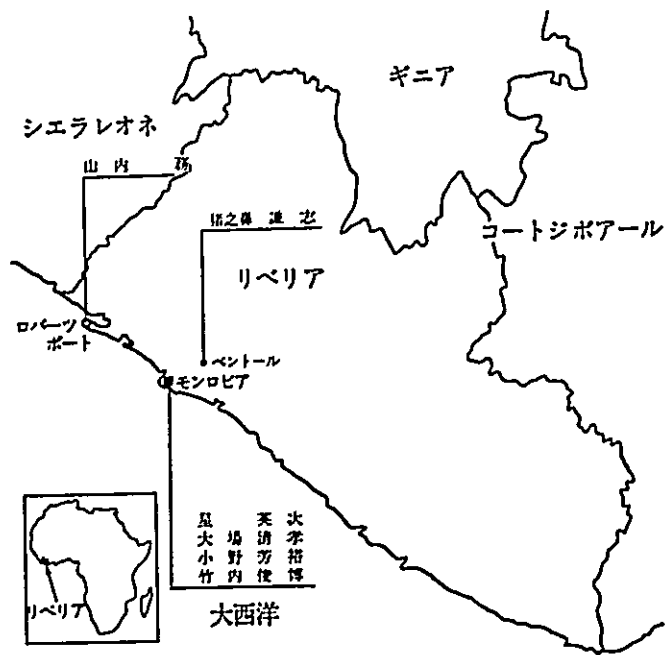
あとがき……………小野 睦一…(143)

(付) リベリアと協力隊……………(2)

 リベリアの略図と概要……………(3)

リベリアと協力隊 (昭和57年3月1日現在)

最初の隊員派遣：昭和54年4月								
職種部門	農林水産	加工	保守操作	土木建築	保健衛生	教育文化	スポーツ	合計
派遣中	2	0	0	0	0	2	0	4
累計	3	0	5	1	0	2	0	11



リベリア共和国概要

面積：111,370平方キロメートル

人口：174.2万人（人口密度15.6人/km²，1978年国連推計）

宗教：キリスト教

公用語：英語

1人当たりの国民所得：460ドル（1978年世銀）

通貨：リベリアドル（1米ドル=1リベリアドル）

首都：モンロビア（人口20万人）

政体：共和国

元首：サミュエル・K・ドエ

主な生産物：天然ゴム，木材，米，キャッサバ，鉄鉱石，ダイヤモンド，農産物加工
 （生産物ではないが「便宜置籍船制度」のため船舶保有高は世界一）



任国事情と配管技師としての活動

総合報告書	
派遣国	リベリア
職種	配管
氏名	星 英次
配属先	Sewer Division Liberia Water & Sewer Corporation

一星 隊員の略歴

氏名	星 英次
生年月日	昭和30年3月11日
出身県	宮城県
職種	配管
派遣期間	54年4月～56年4月

I 2年間のリベリア生活とリベリア人

1. 生活環境と健康状態

リベリアの気候は、いわゆる高温多湿の熱帯雨林気候だが、それでも海岸地帯と内陸部では多少気候は異なり、内陸に行くにしたがって高度が上がりそれにつれて気温、湿度も下がる。12月内陸 Lofa county を旅行した時など早朝、はく息が白く見える程、気温が下がった。

同期隊員より気象観測機をゆずりうけ、またモンロビア国内飛行場の気象観測部から過去10年間の雨量データを参考に、モンロビアの数少ない正確なデータとして、今後の活動の資料となるためにも80年7月から戦場で観測を始めた。詳しい事は仕事のレポートの項で説明する。

その昔、白人の基地と呼ばれたこの地は、やはり今でも多くの病気がはびこっているようだ。市内の病院に行けば、よくもこんなに病人がいると思う位、列をなして自分の順番を待っているし、戦場の同僚の中でもしょっちゅう病院に行っているようだ。

私の住居は市内からはずれた場所だが、アパートのすぐ後側が湿地帯となっていて、そのままメスラド川につながっている。だから湿度は1年を通じて97～98%位だし、雨期にもなると蚊の数が一段と増える。そんな場所柄だからだろうか、任期中にマラリアは軽いもので4回、本格的に2回かかった。仕事から帰ってきてよく近所の子供たちと遊んでいたから、ほとんどがその時にかかったものばかりだと思う。それに体力の落ちている時、疲れている時などは発熱や頭痛がしやすい様だ。

まずは予防のためにもよく食べ（できるだけ可能な範囲で）よく睡眠することだ。協力隊から支給されたMP錠は予防にはきくようでも、治療には効果ない。この土地で市販している NIVAQUIN が割合効果あるようだ。風邪薬のCMではないが「かかったかな?!」と思ったら NIVAQUIN を2錠!! こんな風にして軽い内に治療していた。それに解熱のバツフェリンはよく使用していた。それでも専門医に言わせれば、軽い熱や頭痛だけじゃマラリアじゃないと言うが、けっこうこの方法で治っていたようだ。しかしあまりひどい熱の時は、早急に病院に行く事をすすめる。市内に割合良い病院があり、すぐに血液検査を行ってくれる。

飲料水に関して、今年の3～4月頃だと思うが、細菌性の下痢にかかった

事がある。その時の原因は解らなかったが、やはり飲み水には気をつけた方がいいと思う。職業柄、時々、水道水の残留塩素をチェックするのだが、十分な時があれば、塩素反応がまったくない時もある。しかもこの水道は時々断水するし、それに市内配管では、接続部からの漏水が多く断水の時など負圧になって汚染されないともかぎらない。いや十分にその可能性はある。だから飲料水は水道水を一度沸騰させた後、冷やして飲んでいた。

2. 余暇の活用

職場の月曜から金曜までの勤務時間が朝8時から午後5時までなので、割合に時間に拘束されがちなのと、隊員2人での共同生活のため、1日交替に食当があり、なかなかきまった時間が得られない。それでも Week day の食当のない日は近所の子供たちと遊ぶのが常となったようで、そのためか近所の子供たちにはたいへん評判がよく、それこそ出勤と帰宅の時は、本道路までに出るあいだに何回となく「エイジー」「エイジー」と彼らから声をかけられる。まだ2～3歳の子供までが、その意味さえ解らずに僕の顔をみては「エイチー」とよんでくれる。服装や生活は貧しくても素直な、なかなかよい子供ばかりだ。彼らのために日本大使館から映写機をかりて、映画会を2～3回行なった。

昨年の乾期には家の前に簡単なバレーボールコートを作りアパートの住人みんなで、それこそ、ボールが見えなくなるまで遊んだことは、深くリベリア人を理解する意味でも、スポーツを通して友人を作る意味でも、たいへん良い体験をした。

同じく昨年の乾期にアメリカのソフトボールリーグに、日本チームを結成して加わり、3ヵ月以上、毎週末、ソフトボールに追われて忙しい日々を過ごしたが、シーズンが終わってみると、雨期の間は体重が減っていて決して調子が好いとは言えなかった体が、乾期の終りには逆に体重が増えるようになった。

半分任国外旅行のためを思って、それに日本と比べて授業料が安く、第一外国でフランス語を学ぶ教室の雰囲気はたいへん興味をもち、食当のない日を利用して、週3回夕方1時間半のフランス語講座に80年3月から通い始めた。Biginning 2から始まって現在は Biginning 3へ、ひとつ上のクラスに進級している。

3. クーデター後の状況

▶クーデター直後

クーデター直後、大半のリベリア人の心境は複雑だったにせよ、喜んだことにはまちがいないだろう。途上国の歴史の変遷に変わりなく、私利私欲のトルバート政権は倒れるべくして倒れた。

当時のラジオ放送ではクーデターを聞き民衆が歓声でもって街にくり出したと報道していたが、あながちうそではないように思う。しかしその後大臣以下閣僚の処刑があり、虫けらのように殺される光景をみて、確かに人々の心はすさんだようだった。今までリベリア人を観察してみると、ロげんかは激しくするが、たいていは手を上げて取っ組み合い事はしなかった。

好奇心が旺盛で自己主張が強く、しかしいたって小心な面があり、つき合ってみればなかなか人のいい人が多い。しかし反面、集団となると少し違ってくる。集団心理に動かされやすいと言えはいいのだろうか、個人の持つ顔と、クーデターの成功を祝い街ではねまわる顔とは確かに違っている。

しかしここであげられた人物像はあくまでも抽象的な表現で言えば一般大衆であり、それが直ぐに全てのリベリア人の標準的な性格とはならない。

▶能力ある人はアメリカへ

この国の歴史からしてアメリカとは切っても切れない関係だが、クーデター以後、リベリアの将来を懸念してか、ずい分多くのリベリア人がアメリカに渡った。もともと、それらの人々は能力も金もある上流社会の人々で、主に元政権に関係のある人や、ビジネスマンが多かったようだ。またそれとは別に、リベリアの商業活動を握っているレバノン人の中にも、かなりの数の店をやめて帰国する人があった。それにクーデター以後、多数のアメリカの婦女子が一斉に帰国し、一時アメリカンスクールが閉鎖された。それにつれて西ドイツ人、イギリス人の中でもリベリアを去る人の動きが大きくなり、実際多くの外国人が、リベリアを後にしたようだ。

しかし表面安定してきたようにみえる現在、アメリカ人もだんだんリベリアに帰ってきて、またアメリカンスクールも再開された。

▶物価上昇

Samuel. K. Doe の政権になって物価上昇が著しい。自分自身の食生活を例に出すのはちょっと恐縮だが、一番隊員の生活に密着していて、それだけ説得力があるので例にとると、以前は昼食に\$2.50していた Jollof rice (現地食)、日本流にいえばチャーハンみたいなものが今では同じ店で\$3.75に

なっている。それこそ\$2.50の時でも2週間に1度のぜい沢な思いで、それに少し疲れている時など栄養をつけるつもりで行ったものだが、しかし今ではその店も行く気にならない。それより隊員でも食べられる店を探すのが賢明な方法と言えよう。だから以前に比べて食生活の内容が一段か二段下がっているのが現状だ。食生活を例に出したが、その他ガソリン代にしてもここ1年間はかなり上昇している。

▶軍隊がはばをきかす

1979年4月14日の暴動では軍隊の一部が、みずから先頭に立って商店を破壊して商品を強奪するような事やっていたのが、いざクーデターで政権をとってみると、それこそ井の中の蛙が一夜明けるとお山の大将になったような、鼻高々でいぼりちらし、全くバカに刃物としか言えないような事があった。車を運転していると、ちょっとした事でいいがかりをつけては小金をせびろうとし、軍隊のトラックなどは、交通法を無視して、センターライン、赤信号なんのその、そのまま体制を背にして、思うままに動いている。

▶リベリア社会の特殊性

任国外旅行と同期隊員からの話を参考に、西アフリカの広い視野からリベリアをみた場合、隣国の IVORY COAST, GHANA それに SIERRA LEONE と比較して、社会の発展がきわめて遅れている。

独立はどの国よりも古く日本の維新よりも以前であるが、何故そのような状態になってしまったのだろうか。2年間の生活を通して知った事と、少ない資料で考えてみると、植民地にならなかった事が、逆に直接的な原因となって今に影響しているように思える。

イギリス、フランスの植民地となってそれぞれ遅く独立していった隣国は、その統治時代に、イギリスは間接統治政策によって、フランスは同化政策によって、それぞれ紆余曲折の歴史の変遷を通して社会の発展をなしてきた。またそれには教育制度も含まれ、イギリスの教育法にアフリカ人にも高度な教育を与えて、来るべき将来の独立にそなえさせようとする教育基本方針があり、官吏や政治的指導者、開発計画を担う専門技術者の養成を行なった。そしてそれは「give and keep」の植民地政策にゆえんしたものであった。

またフランスにしては、アフリカ人の非アフリカ化を意図するもので、初等教育からフランス語を使い、少数のエリートを育て、彼らをフランスの良き協力者としてアフリカ大衆との間の媒介とさせる方針をとった。

任国事情と配管技師としての活動

一方、一般大衆の教育は殆んどなおざりにされ、少数の選ばれたエリートと一般大衆との間に大きな溝が生まれた。しかし高等教育を受けたエリートの中からアフリカ人としての政治意識に目覚めナショナリズムの指導者として大衆の先頭に立つ可能性もできた。それが現在の象牙の奇跡と称される発展を送げた IVORY COAST のウエ・ボアニ (Felix Houphouët Boigny) であり、セネガルのサンゴール (Léopold Senghor) である。

一方視点をリベリアに移した場合、それはリベリアの歴史をみればある程度うなずける。100年間以上もアメリゴライベリアンに支配されたこの地は、アフリカの他の地域と異なり、白人が黒人を支配するのではなく、同じ肌の色をした黒人が黒人を支配する、きわめて特殊なケースであったことが解る。そして、そのアメリゴライベリアンの政治の性格をみると、常に背後にはアメリカ本国がひかえていたような気がする。

そのアメリカのリベリアに対するかかわり方は、ファイヤーストーン社の天然ゴムプランテーションで象徴されるような、きわめて実質的なものばかりで、リベリアに対してなんら基本方針を持たなかったばかりか、さらに言えば単に原料の供給地としてしか考えないような感があった。

そんなアメリカの政策によって政治を思うようにしていたアメリゴライベリアンは、意識的に教育水準を抑制していたようだ。その結果、現在能力を必要とするポストにはガーナ、シエラレオネ人などの外国人が数多く占め、リベリア人の就職難を助長するとともに、リベリア社会の複雑性をもし出している。

また商業活動がレバノン人、インド人の手に握られている他、国内の商業活動だけでなく輸出入貿易をも少数のヨーロッパ人を含め、彼らが一手に引受けている。このことは商業活動における現地の人の中産階級の発生を強く阻止している。

II 業務レポート

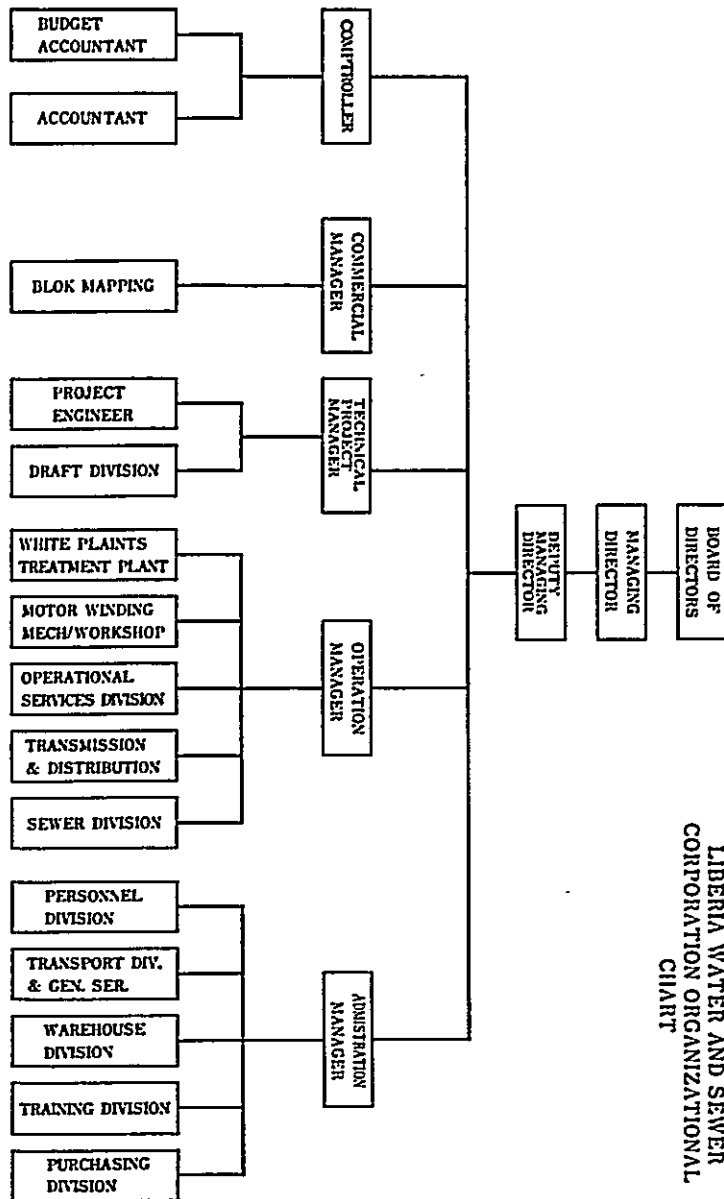
1979年9月から一時配属として、現在までの活動について報告する。

リベリア上下水道公社 (Liberia Water and Sewer Corporation)

1973年国内の給水、下水を担当する機関として、Ministry of public Works から独立。

次頁に組織図を示す。

LIBERIA WATER AND SEWER
CORPORATION ORGANIZATIONAL
CHART



任国事情と配管技師としての活動

1. モンロビアの給水

1953年に給水容量40万ガロン/日 (0.4MGD), 最大1MGDの給水設備が工費135万ドルで Bushrod Island に完成。しかし1957年に人口増加等によって給水量増加の必要に迫られ, アフリカ開発銀行 (African Development Bank), イギリス援助機関 (Commonwealth Development Corporation) と世界銀行 (International Bank for Reconstruction and Development) の資金によって総工費 180万ドルで, ホワイトプレーに浄水場と, 1960年マンバーポイントに1MGの貯水槽が設けられた。しかしその後の需要増大にともなって1969年にUSAID (United States Agency for International Development) の財政援助で経費800万ドルで, 第3次拡張を行ない現在にいたっている。また次期拡張計画が, 世界銀行と西ドイツの援助のもとですすめられている。

2. 地方の給水

地方都市の給水は西ドイツの援助によって始められた。それぞれ次頁の図に示す。

Gbarnga water supply	6,000人対象
Voinjama	9,000
Sanniquellie	9,000

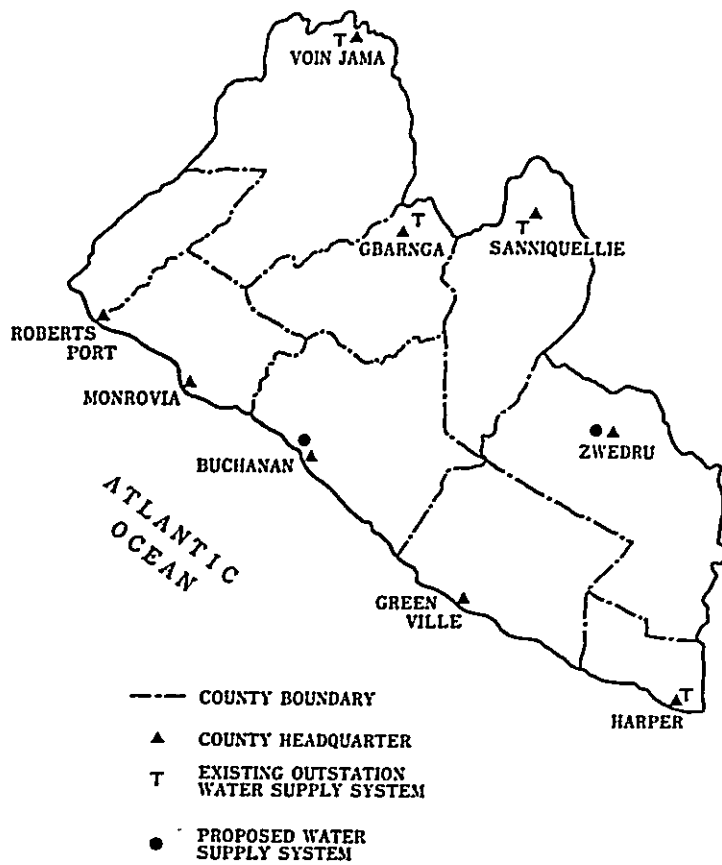
1981年完成予定

Buchanan water Supply	9,000人対象
Zwedru	9,500

3. 下水道

近代的な下水道の歴史はパリから始まった。12世紀後半フランス王フィリップ・オーギュストがセーヌ川の流れを楽しもうと王宮の窓辺に立った時, 前を通り過ぎる馬車のはねとばした通路の泥水を激しく受けた。その直後, たとえようのない臭いが彼の鼻をついた。たまりかねて王は親しい友人に相談した結果, 彼の発案により初めて道路舗装の概念が生まれ, こうしてパリの舗装の歴史が始まった。

しかし当時のパリは, まだ小さかった。無論, 舗装はしたものの道路には側溝さえなかった。その内に, 路上は家庭の汚水, ゴミ, 汚物の捨て場となっていた。それゆえに次の段階として, これらを他の場所に運ぶ下水溝の建設が始まる。しかしこの溝も成功しなかった。今度は, 溝に汚物がたまっ



任国事情と配管技師としての活動

て、臭いのひどさは減らなかった。それから2世紀後に溝は徐々に地下の下水道に変わっていった。

いわゆる下水道の歴史は人間の歴史であり、社会の発展と共に発展し、人々の認識や、それらを取り巻くあらゆる社会組織と折り重なって発展してきた。そして現在、下水道の役割は時代と共に拡大してきている。当初目的としたものは、都市内の雨水や汚水を速やかに生活環境外に排除することによって、浸水に対する安全性を高め、生活環境を快適なものとする事だった。

しかし現在では下水道は単に生活環境改善の施設にとどまらず、公共用水域の水質保全のために欠かすことのできない施設として、位置付けられるようになった。

その下水道が急にアフリカの地にやってきた。下水道に関して全く歴史を持たないアフリカは、そのためにそれを維持する基盤もなく、まして公共と言う意識のまだ発達していない社会で、下水道を運用して行くには考える以上に過大な努力が必要である。

書籍がない社会、認識が低いために下水道に廃油などを投棄する者、またそれを規制する法律のいっさいない社会。全く野放しの中で動き出したここモンロビアの下水道。10年余りの年月が過ぎ、多くの問題を抱えながら現在に至っている。

しかし、かと言って、この近代的下水道がこの地に順応しないという意味ではない。否、むしろ大いに必要なのだ。モンロビア市内でも処理区域外では、浄化槽や開溝を使用し、しかも所によっては汚物をそのまま路上や川に流していたり、途上国にありがちな衛生面で、危険な場所が市内のあちこちにある。まして人口の都市集中化が進み、モンロビアに多くの人々が居住するにつれて、地域ごとに人口密集地区ができ、衛生面できわめて重要な問題になってきた。

それらの意味からしても、下水道システムは非常に重要なものだ。しかし現実と近代的社会の産物を、そのまま設置したギャップは、いつの日に交差点を持つのやら……。

4. モンロビア下水道の概要

下水道の経緯

1951年、市内に管路約10kmにおよぶ下水道網完成。しかし下水は未処理のまま、メスラド川に放流された。後1971年アメリカの技術援助 (United

States Agency for International Development) の資金で、管路約21kmと途中4つのポンプ場を含む新下水道完成、それに標準散水濾床法をそなえた下水処理場も完成し、同年稼働開始している。

○下水道の区分

分流式 Sanitary Sewer (公共下水道)

○処理区域 Bushrod island area
Monrovia city 〃
Sinkor 〃
Old Road 〃

○処理面積 約1 sq・mile

○処理人口 約4万人

○下水道の流れ

New Kru Town 地区の下水は地域が低地のため、ポイント#974-1のポンプ場から、United Nations Drive の下水本管にポンプアップされ、Logan Town 地区は自然流下で本管と接続し、南側に下水は流れ、Bushrod Island Pumping Station に集まる。

また Clara Town 地区からは、北側に下水は流れ、これも同じ Bushrod Station に集まる。

Bushrod ポンプ場から2機のポンプにより、12インチ鑄鉄管で Mesurado River Bridge を越え、ポイント#568-1まで圧送される。その地点で下水管は36インチに拡大し、モンロビア市内の半分の下水を集めながら Mesurado River Pumping Station に接続される。

それからまた16インチ管で圧送され、Gurley Street を直進し、Randal Street を横断し、United Nations Drive に沿って管路は市内の下水を集めながら Ocean Pumping Station (B.T.C. Station) につながる。その地点で管径は42インチとなる。

ここから再び20インチ管で Tubman Bulvard のメインストリートを迂回しながら海岸線に沿って、ポイント#637まで圧送される。それから Sinkor 地区の下水をも含め処理場まで、自然流下で流れる。Old Road 地区は全て自然流下で処理場まで流れる。

5. 処理区域内の工場

本来主に家庭汚水を対象とした都市下水道であるが、一部工場、事業所か

任因事情と配管技師としての活動

らの排水も含まれる。勿論除害設備など持つはずがないから、排水は直接処理場まで送られる。主なものをあげると、

- L.E.C (Liberia Electric Corporation)

ディーゼル発電所等

- ペプシコーラ工場

- Mesurado fish (魚類加工)

各工場・事業所等。水質、水量については不明。

- 流入水質 BOD 210ppm

SS

6. 下水部門の人員構成

- 人員約70名

- Collection & Construction は市内下水管路の維持管理と管路接続、マンホールなどの建設業務。

- Operator は下水処理場の維持管理業務。

Maintenance はポンプ場、処理場の機器の整備や保守業務。

処理場管理は Operator 2人4組として3交代制としている。

8時—4時

4時—12時

12時—8時

- <モンロビア下水処理場>

施設概要 (24頁参照) と処理場全体図 (省略)

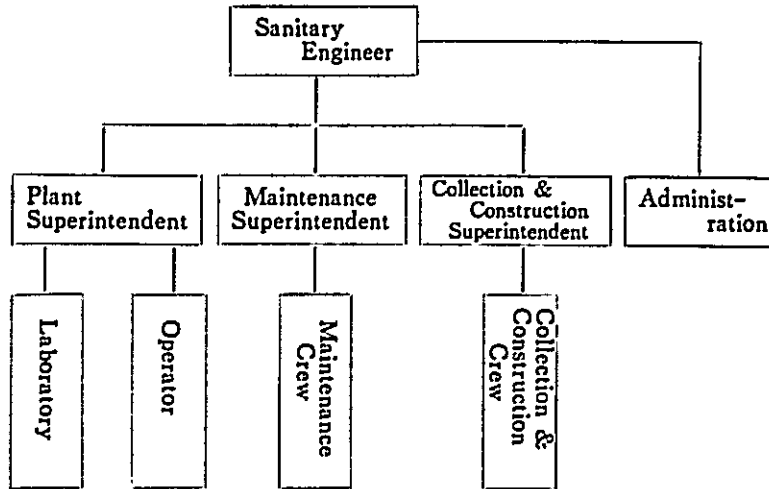
- <現在の状況>

現在のモンロビア下水道の状況について項目別に説明する。

[ポンプ場]

昨年までは各中継ポンプ場の状態は、全くひどい状況だった。下水道の流れの項から解るとおり、モンロビア下水道はポンプ圧送によって、Sinkor 地区まで送られ、そこからは自然流下で処理場に着水するが、いわば施設に比べて距離が長いこの下水道システムで、中継場の役割はきわめて重要なものにもかかわらず、その機能は全く低迷状態だった。New Kru Town ポンプ場にしては設備が老朽化して、数年稼動していなかったし、その他のポンプ場にしても、2台あるポンプの内1台は故障だったり、稼動しているとしてもバックシン部からのかなりの漏水でポンプ室が水をかぶり、かぶっても以前

<下水部門の人員構成>



あった排水ポンプはなく、ポンプは下水でもって没水のまま。そこを毎日 Maintenance Crew が移動用ポンプで排水し、それから本来のポンプアップを始める始末だった。しかし80年9月から世界銀行の援助で、それらのポンプ設備が徐々に整備されつつあり、それぞれ所定の能力を発揮するようになってきている。

〔廃油投棄〕

78年頃から下水道に廃油投棄の事故がひんばんになり、ポンプ場の機能を著しく低下させるとともに、処理場施設にも悪影響を及ぼしている。B.T.Cポンプ場では水面に10cm位の油層ができ、バケツでもって排除しているが、依然その状態は変わらない。そこで80年11～12月にかけて全管路のマンホールチェックをした結果、4～5ヵ所のガレージとガソリンスタンドから廃油投棄の現場を発見、ただちに通告し、それを停止させているはずであるが、依然どこからか廃油が下水道に入ってくる。

〔下水流入量〕

パーソナルフリュームを使用しての流量計が、ここ5年間以上故障していて、流入量が全く不明なと、建設当時のデータにしても記録の記入のしかたに不明確なところがあり、分析に必要とするデータにはならない。また他の方法で流入量概算を計算する方法も、たとえば主ポンプの積算稼動時間か

任国事情と配管技師としての活動

ら算出する手段も、積算動力メーターが故障のため不可能。結局、現在いくらの流入量があるのか、雨期と乾期でどの位の差があるのか、全く解らない。毎日の観察と設計値との推定からして、平均3～4MGD（ミリオンガロン Day）位ではないかと思われる。

また流量計は維持管理にとって絶対に必要な装置だけに、これを早急に整備する必要性にかられ、他のふたつの機器といっしょに、協力隊からの支援機材として設置されることになった。

〔標準散水濾床〕

2基ある散水濾床のうち1基は、中心の回転基礎部が破損しているため、数年稼動していない。残り1基にしても最終沈澱池からのリサイクリングシステムが不整備のため、24時間連続運転はしていない。それに設計以上の負荷で運転している時もあり、処理効率も低くなっているし、時々濾床ばえの発生も多い。破損1基については81年に、これも世界銀行の援助で整備される。またリサイクリング装置も協力隊機材で整備される。

〔最終沈澱池〕

最終沈澱池は駆動用伝達部分（チェーン、ボールベアリング）が故障のため数年来稼動していない。

また返送汚泥を制御するテレスコープバルブが破損しているため、ある程度汚泥ポンプで返送しているが、その効果はあまりなく、全く最終沈澱池としての意味をなしていない。これも同じく世銀の援助で整備される予定にある。

〔消化槽〕

消化槽の維持管理も全く悪い状態だ。消化汚泥引き抜きも半年以上行われていないのが現状で、1次タンクから2次タンクへの汚泥の移送も、長年確実な操作を欠いていたため管が詰ってしまい、移送がうまく行なわれない。そのためガスの発生量も少なく、うまく消化が行なわれていないのが現状。

水質検査もあまり行なわれておらず、消化の不調な原因は、最初沈澱池汚泥の含水率が高いことと、攪拌の不良などに原因すると思うが、これを裏付けるデータが全くない。

4基の攪拌機は、これも世銀の援助で81年に整備される。

〔水質検査〕

まずは現在までの水質の資料を次のページに示す。データからも解るように、あまりに試験の回数が少ない。これでは処理場の維持管理どころではな

い。

最低、基本的に次の項目の試験が必要とされる。何故、水質検査がこの状態なのかは次の項で説明する。

	管 水	最初沈殿池		標準散水濾床		最終沈殿池	消 化 槽		最初汚泥
		inlet	outlet	inlet	outlet		汚 泥	脱離液	
下水の温度	○	○	○	○	○	○			
PH	○	○	○	○	○	○	○		○
Total Solids	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Volatile Solids	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Suspended Solids	○	○	○	○	○	○			
BOD	○	○	○	○	○	○	○	○	
Volatile Acids							○	○	

〔気象観測〕

気象観測装置を同期隊員よりゆずり受け、職場に設置して80年、7月から観測を始めた。現在、下水流量計がないが、将来そのデータと雨量のデータを比較して、季節別の管路の接続部分からの浸水と降雨量の関係など、多くの分野で貴重な資料となるだろう。

〔考察〕

気温……雨期と乾期を比べると、乾期になるにつれて最高気温と最低気温の差が大きくなる。しかし雨期の場合、気温が全体的に低くなっている。

1980年7月から12月 AM. 9:00

	最高温度	最低温度	平均温度	平均湿度
7 月	29.8℃	21.0℃	25.1℃	98%
8 月	30.0	21.0	25.4	98
9 月	29.4	20.9	24.6	98
10 月	30.3	20.8	25.9	98
11 月	30.1	21.1	26.6	98
12 月	31.1	21.0	26.3	98

任国事情と配管技師としての活動

湿度……年間を通して90%以上。

雨量……ある資料では約4,000ミリと書いてあるが、確かに平均は4,000ミリ近くとも、10年の内2年、約倍の8,000ミリ降っている事は、特筆しなければならぬ。年間の降り方をみると、途中1ヵ月（7～8月）雨量が下がる傾向にある。何故でしょう？

次期隊員に、これからの基礎資料となるために、気象観測は続けて欲しい。

	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Amo	
1969								365.25	516.64	715.01	172.72	72.64	3696.21	
70	11.64	22.35	30.48	329.44	572.01	903.22	285.75	374.40	544.58	415.04	145.03	62.23	4006.89	3696
71	52.07	89.41	24.13	30.48	206.28	580.39	834.45	650.49	546.10	753.61	173.99	61.47	4598.68	4009
72	69.60	44.45	67.81	117.86	618.74	517.40	592.84	752.35	830.91	606.82	112.27	87.63	4310.83	4599
73	46.22	64.83	82.04	122.17	320.29	541.53	1172.31	773.94	427.95	533.65	117.35	104.65	3673.34	4311
74	29.21	39.37	101.60	150.11	294.39	477.52	566.93	838.45	468.12	262.38	168.15	277.11	7820.92	3673
75	0.00	1.27	212.85	272.29	799.59	1308.61	1154.68	1347.22	1181.87	940.82	352.84	249.68	3945.39	7821
76	61.98	49.53	92.46	112.78	656.84	855.47	328.68	400.05	673.86	497.08	201.93	14.73	7864.35	3945
77	55.88	44.45	24.89	118.62	849.88	1369.31	1234.44	1378.46	1194.82	967.49	373.13	252.98	3388.89	7864
78	28.96	23.37	35.56	103.12	243.59	476.25	626.87	682.87	555.00	402.34	152.66	58.67	3844.6	3389
79	48.01	38.35	82.80	229.87	207.52	606.04	722.38	728.73	579.88	427.23	104.90	69.09		3845
80	22.35	24.89	31.75	173.99	601.98	807.07	763.27		1151.9	533.8	259.2	86.10		

Ⅲ 業務内容

1年半の間に行なった業務内容の一部と、その成果をあげる。

○工具の見積り

79年9月に仮配属された時点で、一番基本的ながらも重要な問題が工具の事だった。機械が故障して修理したくとも、それを修理する工具が全然そろっていなかった。見積りはバイクで市内の店を片っぴしからチェックして、一番品質が良く、安価な物を購入するようにしたが、結果においては特定の店

から購入するようになったようだ。同じくモンロビアで入手出来ない品は、海外と連絡をとった。

○ポンプの見積り

ポンプ場の排水ポンプを整備する計画で、機能、価格の面でも適格な製品を選択する意味で、アメリカと日本の製品の比較検討を行なった。その際もモンロビア市内のアメリカ企業のエイジェントとの交渉と、文書で日本のエバラ製作所との交渉を行なった。

○協力隊機材の設計

処理場の現状の項で解かるように、モンロビア下水処理場はかなりの部分で機能がまひしており、維持管理する際に、どうしても必要な機材を協力隊本部から、支援機材として設置されるよう、それに関する一連の業務を行なった
(ランニングコストの計算)

White Plains 浄水場で電力会社からくる電力使用料と実際の推定される使用量とがかなり違っているため、それを確認するために浄水場のランニングコストの計算を行なった。

(水質検査の指導)

水質データの項から解るとおり、水質係もかなり問題があり、80年の後半から水質検査の指導を行なってきた。

(廃油投棄現場のチェック)

下水道への廃油投棄現場の検索を、モンロビア市内全マンホール、ガレージ、ガソリンスタンドをチェックしながら、水質係といっしょに行なった。

業務の壁

79年9月、リベリア上下水道公社に一時配属として勤務して以来、2～3回にわたって労働省との関係で勤務の期間が区切られ、そしてその都度、職訓の工事の遅れで、公社での勤務ものびのびにされてきた。それゆえ決った仕事をするにも期間との関係があって、計画性のある、確実な仕事のラインに乗ることが出来なかったのが事実である。それでも労働省に対して公式に配属の交渉を行なって、それでもだめだったので、いまさら何も言う事はないが、結果として任期終了まで公社で働けることは感謝している。しかし出来ることなら、中途半端な所属でなく、正式に公社の人間として働きたかった。

勤務の中で一番障害になったものは、言葉の問題、英語力であった。スタッフミーティングに出席しても聞いてるだけで、話すことができず、どうも

任国事情と配管技師としての活動

公的な場に出ると萎縮してしまう自分だった。`

それにいつも業務の壁となったものは、仕事に対する意識の問題だった。それはリベリアの社会性の一面にも通じ、仕事のポストが資格、コネ、学歴で極端に異なり、つまるところ給料がちがってくる。それはこの社会において、職業分野はあまり関係なく、要はその職を通じて、どれだけ金を稼げるかが問題になってくる。少し自分の偏見かもしれないが、確かにそんな傾向がある。

またそれは何を意味するかは、その分野での専門家が育たないばかりでなく、知識の面でも有機的なつながりが生じ難く、それは各省庁間のばらばらな業務や、OAUでの組織力の悪さの批評がいい例だ。こんな社会風潮の中で、一般人の意識がそうなるのは当たり前で、それと教育程度の低さの問題と絡み合って二重の壁となっている。

下水道の仕事にしても、職員が勉強したくとも資料や本もなければ、それを教える人もいないのが現状で、いくら管理が悪いといっても、機材を修理したくとも資金がなく、まして正しいメンテナンスの知識さえもないのが現状だ。

次期隊員へ

下水道の維持管理もさることながら、職員の教育の分野にも努力して欲しい。また、汚泥の肥料化の可能性についても動めて欲しい。

※現在、世界銀行と西ドイツがプロジェクトとして、新しい下水道の計画作業を行なっている。

IV 協力隊活動の示唆

人口が150万たらずのこの国が、まだ食糧を自給することができず米を輸入していることを考えると、緑の土地と水に恵まれ作物には適しているはずのこの地は、農業技術や土地開発の分野に大きな可能性があるように思う。

またモンロビア一カ所だけの人口集中化に伴う、地方の過疎を防ぐ意味でも地方開発が重要だと思うし、その第一の教育の分野での活動の可能性はきわめて大である。またこれらの地方での水資源開発や衛生面での協力も必要だと思える。

確かにリベリアで協力活動をする際に、困難さを増す材料は数多くある。それは今までの事例をみても解るはずだが、しかし今ここで協力活動をやめ

てしまえば、この国はいつまでたっても発展はしないだろう。別に協力隊を自負しているつもりはなく、誰かが先頭に立ってやらなければこの国の発展はない。その理由はただひとつ、リベリア人だけでは出来ないからだ。

熱帯雨林気候で地理的に悪条件だったこの地には、独自の文化があまり発達しなかった面があるが、地下資源に恵まれ、まして人口が少ない国で、本当に優秀な政治家と行政機構を整えば、きっと豊かな国になる。



私の小さな友人たち (写真上) タイピストの家でのパーティー (写真下)



施設概要

設備の名称	仕 様	数 量
中継ポンプ場	New Kru Town 450gpm 水中ポンプ型	1
	Bushrod 2000gpm 立軸ポンプ型	
	Mesurado 2500gpm "	
	B. T. C 5200gpm "	
バースクリーン	目 幅 3インチ	1
コミニューター	縦型ローター式	1
グリッドチェンバー	Detritus Tank	1
	Collecting Tank 直径 28ft.	
スクリュウコンベア	沈砂掻き機 3/4HP 1725r.p.m	1
	1 HP 1145r.p.m 230V	
主ポンプ	立軸渦巻ポンプ 3MGD	1
	" 5MGD	
	" 8MGD	
殺初沈殿池	平行流式長方形池 42284w.ft.	2
	幅31ft.×深さ11ft.×長さ124ft.	
	チェーンフライント式汚泥掻き機 (縦横2連)	4
	沈殿時間 2時間 水面積負荷 1000gpd/sq-ft.	
標準散水床	直径 155ft. 深さ 約6ft.	2
	散水負荷 約4.5MG/acre/D	
	BOD負荷 約600 lb/acre-ft./D	
殺終沈殿池	直径 90ft. 鋼深 10.5ft.	1
	沈殿時間 3時間	
	水面積負荷 約600gpd/sq-ft.	
	汚泥掻き機 3/4HP 1725r.p.m	
消化設備	消化タンク 直径 100ft.	1
	鋼深 21ft.	
	機械攪拌 10HPモーター	4
	ガスホルダー型消化タンク	
	直径 100ft. 鋼深 20ft.	1

回想・アフリカの大地

星 英 次

西の空を真赤に染めて、すでに陽は大西洋に沈み、街を走る黄色いボンゴツタクシーにもスモールランプが灯りはじめる。1日中ヤシの木々を照らし続けたエネルギーは、まだ大地に残り、日もすっかり暮れたと言うのに、その暑さは変わらない。

ディスコのリズムに合わせて、大きな、オシリが右へ左へ、それを見守るみんなの目が暖かい。もうどの位の年齢なのだろうか、ござっぱりしたラバ(現地服)を着て、腰が曲ってダンスする姿が多少ごちない。60歳はゆうに過ぎているだろうか……。

リベリアを去る2～3日前に職場のスタッフが開いてくれた小さなパーティー。小さな窓しかないその部屋では、乾杯で飲んだばかりのビールも、すぐに汗になってしまいそうに蒸し暑い。ディスコに興じる輪から抜け出して、涼をとりに戸外へ出た。熱帯の夜空に星が輝く。疲れたのだろうか、その戸口に彼女も腰掛けていた。職場で親しくしていたタイピストのお母さん。もう、おばあちゃんと言うのに、ひょうきんで、明るく、それでも深く目の回りを縁どるシワと、憂いをおびた目。彼女は、幾多の苦痛と苦悩を乗り越えてきた落ち着いた表情をしていた。僕の手を両手で握りながら、Do you come back? Oh, I miss you! と目を潤ませて、握る手に力がこもる。それ程、何回となく会ったはずはないのに心からそう思ってくれる。嬉しい。そして、こんなおばあちゃんを悲しませる事が悲しい。次第に胸の内から熱いものが込み上げてきた。

後に残った隊員が遠く手を振る中を、僕はタラップの最上段に立って、うっすらと夜空が霞むアフリカの夜空に握りこぶしをつき上げた。自分の任務を全うした充実感か、帰国できる嬉しさか、とかく、ある種の開放感が僕にそうさせた。しかし、どうだろう、エンジンの音が大きくなり、加速を増すにつれて、全身にかかる重みはそのまま僕の心をも重くしていった。

2年間の生活が小窓に見える風景とともに、ものすごい速さで通り過ぎて行く。否、つい数時間前までの日常生活と僕の家と友人たちが、一瞬のうち

に離れさせられてしまう。あわただしく出国しただけに、今の今までこの状態を考える時間すら持てなかった。住み慣れた自分の家から無理矢理、何かの力で離れさせられるような、はたして、僕にとって、帰るべき家は日本か、リベリアか解らなかった。傾いた機体からはるかに続く深緑のジャングルがガラスに映る数々の友人の顔、僕を慰めてくれた子供たちの顔が、胸の奥底から湧いてくる涙の中で浮んでいた。

リベリアの協力隊活動を思う時、それは、順調とは言えない。それこそ、つきはぎだらけの出発だった。その要因は、数々ある。クーデター、戦場、生活と厳しいものだった。しかし、帰国して思えることは、そんな厳しいはずの生活が、全てに安定し、完成した日本社会に生きる時にとても懐しく思える。毎日、毎日、雑多な問題に追いまわされ、それこそ何回となく落胆し、街に出る時は常に周囲に気を配りながら歩いた時、僕は本当に生き生きとして生きていた。日本社会で息苦しさを感ずる半面、実際の生活は貧しくとも、彼らの表情は生き生きとしていた。もう啞然とし、投げ出してしまいそうになるアフリカ社会と同時に半面、アフリカ人の持つ明るさは、印象的と言うより、逞ましい生命力を感じさせた。

活動を通して援助協力の必要性を肌で感じながらも、型としては、自己満足でしか終らなかったかもしれない2年間。それでも人種、民族よりも同じ人間、友人として知り合えた時間は、僕に多くのものを教えてくれた。リベリアで活動した事は今でも良かったと思っている。

これからは、これまでの経験を発展させて、日本社会からのアプローチを考えてみたい。

星隊員の報告書を読んで

阿部 森 雄

リベリアに派遣された、星英次隊員の業務レポートは、モノロビア給水装置の新、増設から始って、地方都市給水の現状、下水道については、モノロビア下水道の概要と終末処理場施設の設備状態、管理体制など、詳しく説明がなされている。緑の土地と水に恵まれ、作物の栽培にも適していると思われるこの国でも、食物を自給することができず、米は輸入ということである。

湿度は年間を通じ90%以上、雨量は年平均4,000mm、そして10年のうち2年位はその2倍の8,000mmにも達するということである。日本では夏の湿度は70%（空調設備では夏期室内条件として温度27℃、相対湿度50~60%として設計されている）位であるから、隊員の皆さんの健康管理の苦しさが想像できます。

日本の主な都市、一時間当たりの最大雨量は理科年表（1970）によると神戸88mm/h、大阪64mm/h、東京89mm/hであるから、恵まれた条件にあると言える。

下水処理場に入ってくる排水のBODは210ppmということであるが、日本では昨今河川や湖沼の汚染について厳しい環境基準が設けられ、上水道の水源として使用されている河川については、一般にBOD20ppm以下でなければならないと規制されている。水源取入れのBODは3ppmが必要である。因に綾瀬川は昭和54年19ppm、多摩川は6.8ppmである。星隊員はさらに、この国は地下資源に恵まれており、人口も少なく、独自の文化が余り発達していないので、外国の援助が必要ということであると述べている。次期隊員を送るに当たって、考えさせられることは、英語ができて、建築設備については、ひとつの事柄について掘り下げた専門知識よりも、幅広い一般的な知識を持った人を選ぶことが大切だということであろう。又、技術者の少ない国のことであるから、仕事によっては、自分でパイプを切り、配管や器具類の取り付けができる人が望ましいと思う。若い有能な技術者が大切な理由としては、私は東京大学施設部勤務40年、安田学園の教員歴も今年で40年になるが、東大現職の頃、配管の修理などをして、私に代って汚い、いやな仕

事をまとめてくれる人は職工さんであり、新営建物でいい仕事をしてほめられたことは、私の力ではなく企業のせいであることからして、職工さんと、企業の方は大切にしたい。そして企業に対して何時も言うことは、いい仕事をまとめた人はあの職人であるから、大切にしたい、いつまでも面倒を見てやりなさいよ、と言っている。派遣隊員を選ぶに当たって大切なことは、幅広い建築設備の知識と、人間としても円満な人が望ましいということだ。人として円満な人になるためには時間が必要であるが、そのためには、何歳になっても一日一度は必ず今日の出来事をふり返って反省し、生涯この努力を続けることが大切である。

おしまいにリベリア国の教育の問題であるが、各省庁もあることであり、英語は通じるのでそれぞれの分野での専門書により国民の教育ができないものかと思う。

(協力隊技術専門委員)

Robertsport事情と教育活動

総合報告書
派遣国 リベリア
職 種 理数科教師
氏 名 山 内 務
配 属 先 St. John's Academic and Technical
High school Robertsport, Grand Cape
Mount County

山内隊員の略歴

氏 名	山 内 務
生年月日	昭和28年5月7日
出身県	佐賀県
職 種	理数科教師
派遣期間	54年8月～56年8月

I Robertsport 概要

〔人口〕

人口約2万人と言われていますが、これは近隣の村落の人口をも含めたもので、市内と言えらる範囲では数千人しか住んでいません。

〔気候〕

乾期は日本の盛夏とあまり変わりなく、雨期は梅雨のようなものと感じています。しかし雨量は比較できない程多く、季節の変わる頃の雨は、夜間に集中して雷を伴いすさまじい時があります。

通常、長袖の服を必要とはしませんでした。式典、行事等を考え、長袖シャツ数枚持参すれば事足りるでしょう。寝る時、夏用のパジャマ、薄いタオルケットを利用しました。Monroviaでの購入で十分と考えています。

雨期になると蚊が増え、蚊帳なしでは眠れなかったことがあり、蚊帳の持参は役立つでしょう。又、雨に悩まされることのないように、ゴム長靴、ビニールのポケットレインコート、120V用のアイロンも有益でしょう。

〔社会事情〕

Monrovia 市内の盛り場では、ひったくり、スリが多く、隊員を含む多数の邦人が被害を受けました。腕時計のひったくりにはケガが多く、治安の悪い場所ではポケットに入れて歩くようにしていました。

革命後、兵隊、警官の横暴が増し、彼らから金をせびられることもあり、Monrovia 市内では気を使いました。

Robertsport では暴力的犯罪はなく、こそ泥の類が多いようです。私自身、教室内で教科書、ペンシル、尺を盗まれ、家ではシャツ、ナイフを盗まれました。強盗でないだけましだと考えるようにしています。

〔対日感情〕

日本に対して、自動車、電気製品を通じ、先進国としての認識はあるものの、日本についての知識は皆無に等しく、日本と中国の区別ができないものが多く、数ヶ月共にした生徒、職員ですら時々「中国人の山内が言った」ということになります。

Robertsport 着任後、日本紹介の映画会を二日間行い、延べ200人以上の観客を集め日本紹介に役立てたと思っています。リベリア着任後、日本人としての自覚に目覚めた私が着任の際忘れたものは、英文の日本紹介の本です。

譲り受けた本、大使館でいただいた本をリビングルームに備え、生徒、訪問客に日本紹介を行っています。任期終了後は、学校の図書館に寄付することになっています。

〔交通〕

Monrovia, Robertsport 間は、約50kmが舗装道路、約60kmが未舗装で合計110kmあります。乗用車で約2時間、乗合のタクシー、バスで約3時間必要とします。バス、タクシーには時刻表の類は無く、通常1時間、時には数時間、満員になるまで待たされます。

1200ccクラスのタクシーに乗客10名前後、バス（マイクロバス）に約20数名、1500ccクラスの小型トラックに屋根をつけた通称“Pick up”の荷台に10名前後ニワトリや魚、荷物と一緒に乗り\$4.00～\$4.50を支払います。無理な姿勢を要求され苦痛でありましたが、最近では車中の人の動き、服装、会話を楽しむようになりました。

長距離バス、タクシーはスピードを出し、運転は粗暴で、途中事故現場に遭遇したり、事故車の残骸を見ることがあります。途中州境にある Check point では外国人、リベリア人を問わず、多くの人々が過剰なチェックを受け、金銭を要求されることが悩みとなります。

Robertsport でのバイク使用は11月から5月の乾期には行動的活動ができるものの、ガソリン供給が安定していないこと、雨期の乗車が難しいこと、町が小さく、歩いて用足しできることなどの理由で、2ヵ月使用しただけで事務所に返却しました。

事故の多いリベリアにあって、現在、隊員は連絡先の電話番号、血液型、名前のはいった腕輪をしています。不便なので将来の隊員には、兵隊の認識番号のような小さなペンダント形のものを検討していただきたいと思っています。

〔通信〕

郵便物は Monrovia から日本まで1～2週間で届いていますが、抜きとり、紛失の被害は私を含め多くの人が経験しているので、貴重品の郵送は避けるべきでしょう。Robertsport から Monrovia までの国内便に3週間費したことからしても信頼できません。これから地方で活動される隊員の方々は、受取りに相当時間がかかるものと思われれます。

ラジオ通信は国内放送、E. L. B. C (650KHz), E. L. W. A (720KHz),

Robertsport 事情と教育活動

E. L. B. C—FM(89.9MHz) を Monrovia では感度よく受信できますが、Robertsport では中波の E. L. B. C, E. L. W. A を受信できるだけで、受信状態はよくありません。

Monrovia 日本間の国際電話は3分間 \$21.50 で2秒程度の音声のズレがあります。リベリア電々公社の不手際で、時間前に切れたり、接続に60分程度待たされることがあります。

〔娯楽〕

娯楽の中心は、ディスコダンスと映画で、主な映画は香港製の空手映画です。空手映画の人気の一つには、英語を理解できない人でさえも、アクションを楽しめることでしょう。しかし、その空手映画が中国そしてアジアへの偏見をもたせ、中国人蔑視の一因をなしているのでしょう。今日の中国の状況を示す情報が少なく、また時代設定が遠い過去のもが多く、それを現在の中国と考えているようです。路上で Chinese とか Chin と呼ばれ、空手の構えを目の前でやられ不愉快になることがあります。

Robertsport では倉庫を利用して月に1週間程度、空手映画が上映され、一等席 \$1.50, 二等席 \$1.25 の料金を支払います。映画は常に“雨”が降っており、音声は不明瞭で時々フィルムが切れ中断しますが皆楽しんでいきます。

Robertsport では空手映画の影響は少なく、人々は温和で不愉快になることはあまりありませんでした。又、小学生、中学生、高校生それぞれの主催でディスコパーティーがあり、大人も子供も入り乱れて午前0時過ぎまで楽しんでいきます。それらの会費(入場料)は1ドル前後で生徒会の収入となり、クラブ活動費にあてられ、比較的健全なムードで行われています。

〔衛生〕

まわりのアフリカ人を含む多くの人が、マラリア症状を訴えるなかで、私自身今日まで、自覚症状が無いことはMP錠服用によるものでしょう。MP錠の長期服用に疑問をもつので乾期の間に二ヵ月程、服用をやめていました。

生水の飲料は避け、煮沸後飲むようにしています。時々、生水を飲むことがあります。今日まで重病になったことはありません。

新隊員の方々には、着任の際、水フィルターの購入をお勧めします。特に地方では川の水の飲料が多く、沈澱物をコップの中に見ることになります。私も水フィルター (\$85.00) を使用しています。

〔外国人〕

リベリア沿岸に多くのガーナ人が漁村を形成し、この地も例外でなく、人口の約20%はガーナ人で、主に漁業を営んでいます。他に4人のインド人が住み、そのうちの2人はSt. John's高校に勤務し、他の2人は商売を営んでいます。レバノン人商人が数名、平和部隊が3名、St. John's高校、教育委員会、病院で活躍しています。その他外国アフリカ人、ギニア人、シエラレオーネ人、ナイジェリア人も住んでいます。

〔英語〕

Liberian English は米語の流れを汲んでいます。彼らの英語の特徴は、単語の後半の発音をあまりしないことと、命令形を用いることで、何か物を頼む時、命令形を用い、不愉快になることがあります。多くの外国人がリベリア人に対して命令形を用いたことが、彼らの英語に影響を与えたものと考えられています。

教育を受けていない者の英語は、特に聞きとりにくく、当初現地の人の店では苦勞しました。中卒程度の英語では不十分で、全日制の高校で学ぶ者、卒業した者の英語は、比較的理解しやすいようです。

彼らの英語を理解できないと「英語をしゃべれない」と軽視され、腹立ちを感じていましたが、彼らの英語力を知るにつけ腹立ちも少なくなってきました。

〔住居〕

任期中に二度転居したことによって、リベリアの異なった生活環境に接する機会を得ました。

最初の住居はOAU会場跡にあるプレハブ住宅で、もう一人の隊員と15ヵ月共同生活を続けました。家は町から約17km離れた所にあり、寝室、応接室にエアコン、その他電気温水器、電気コンロ、オーブン、冷蔵庫、洗濯機、応接セット、ベッド、食器等まで備え付けられ、到着したその日から生活できるすばらしい家でした。電気代、水代もリベリア政府負担で申し分ない条件でありましたが、途中のCheck pointで兵隊、Security (一種の警官)に金銭や物をせびられることがあって、通勤以外の外出には気おくれしたものでした。

革命前は住人もほとんどなく、同期の4隊員で住む日本人村のようなもので、着任当初に現地の生活にはいっていきチャンスを失い、後に尾をひいています。近くに店も無く、町へ買物に行くことになり、大きな店での買物が

多く、現地の人経営の店への出入りが少なく、現地の人との間に壁ができたようなもので、振返ってみると、隊員である私にはふさわしくない住居でした。

次に住んだ家は、町から10km離れたところにあるアパートで、先発隊員2人と、共同生活を3ヵ月続けました。リビングルームにエアコン、その他電気温水器、冷蔵庫、電気オーブン、コンロ、応接セット、ベッド等が労働省より準備されていましたが、前住居の設備に比べ、落ちた生活になりました。電気代、水代は隊員負担で、狂ったメーターの請求に悩まされましたが、近所に住む子供達、大人との会話に人間味を感じ、現地の店に出入りして、家まで誰にも気兼ねせず歩けることが幸せでした。

最後に住んだ家は Robertsport にある校長の“大邸宅”の一部で、完全に仕切られ、居間、寝室、浴室、台所がありました。地方官庁との交渉で新品の冷蔵庫、ベッド、リビングセット、ダイニングセット、扇風機、電気コンロが支給される約束で二月に着任しましたが、役人に会うたびに「来週は必ず準備する」という言葉を信じ、今日まで待ち続け、今ではもうあきらめました。

校長宅にあった中古の冷蔵庫、ベッド、リビングセットを借りて生活を続けています。任期が残りに少ないことを理由に五月より、インド人教師と同居させられていますが、金銭問題や衛生観念が問題となり、共同生活は苦痛となっています。

Robertsport には電気の供給のみで、水道施設は無く、井戸水や川の水を利用して使っています。しかし校長及び一部の住居はポンプにて川の水を供給されています。

停電は日常茶飯事で1週間、2週間単位であることがわかります。ポンプの故障が多いことと、停電にて断水ということがあり、生活のリズムは狂い続けています。ポンプの修理費が無く、4週間水の供給が無かった時は、川に水汲みに行き、バケツ4杯の水で1日を過す日が続きました。

家が校内にあり、寮生が居ることもあって、訪問客は多く、彼らとの会話は楽しいものでした。

徐々に生活条件が落ちてきた私には苦しい日々でしたが、最初からここに住んでいたらもっと楽しく感じていたことでしょう。

〔物価〕

リベリア国内で購入する物はほとんどが輸入品で、商人の不当利益の被害

を消費者は受け、多くの出費を重ねています。日本の電気製品、時計、カメラ等、国内価格の3～4倍の値で売られています。

Robertsport での輸入品の価格は、Monrovia の価格の20～30%割増で売られており、Monrovia に行く都度、購入するようにしています。

オープンマーケットでは、さつまいも、ペッパー、キャッサバ、バナナ、パイナップル、オレンジ、トマト、干し魚、生魚等が売られていますが、安定した供給はなされず、雨期に入ると現地産の食料品の購入が難しくなります。漁村があり、新鮮な魚の購入が可能ですが、雨期になると出漁する舟が少なくなり、タンパク源の摂取が難しく、缶詰類で栄養補給をしています。

Robertsport 食料品の価格

玉子	17.5セント/1ケ	最近2ヵ月、店頭から姿を消している。
タバコ	\$1.25～\$1.50/20本	タバコの種類に関係なく同価格である。
コーラ類	35～50セント/本	時々、品切れがある。
ビール(中)	\$1.30～\$1.40/本	
缶ジュース	40～80セント	
パン	5～10セント	市内で焼かれているが小麦粉の不足で購入は難しい。
ビスケット	\$1.00～1.75/袋	
角砂糖	\$1.25/100ケ入	この地でリベリア産の砂糖をみたことがない。

(現地レストランのメニュー例)

Breakfast	Tea/coffee with bread & butter or jam	90セント
	Boiled egg	25セント, Fried egg 30セント
	Boiled Cassava with gravy	\$1.00
Lunch	Jollof Rice (Mon, Wed, Fri)	\$2.00
	Fufu & Soup (Mon, Wed, Sat)	\$1.00
	Rice Daily Sauce Varies	\$1.50

メニューはあっても品が無いことが多く、有無を確かめ、予約して行くようにしていました。

[その他]

○病院

公立病院が一つあるだけで、ナイジェリア人、ガーナ人医師2人が診療に

Robertsport 事情と教育活動

あたっていますが、専門は無く、重病人は Monrovia へ転送されます。50セントの初診料を支払えば診療を受け、医薬品をもらうことができます。しかし非常用電源が無く、薬品の管理には信頼がおけません。

○学校

3校の小学校があり、その内の1校はアラビア語で授業がなされています。全日制の中高等学校は St. John's AzT. 高校のみで、6年生から12年生までの夜間中高等学校があります。

○商店

日本における小売店クラスの雑貨店が3軒あります。品数は少なく、保管が悪く、有効期限切れのものが多いようです。

○ホテル

部屋数約30部屋のホテルがあります。シングルルーム15～25ドルの宿泊料金でリベリア在住の外国人が主な客で皆乾期のみ訪れ、海水浴、釣り、ポート遊びを楽しんでいます。

その他郵便局、電信電話局があります。

II 教育活動概要 (St. John's AzT. High School)

	7年生	8年生	9年生	10年生	11年生	12年生	合計	寮生
男子	32名	34名	28名	40名	35名	36名	205名	約70名
女子	33名	22名	24名	18名	26名	10名	133名	約80名
合計	65名	56名	52名	58名	61名	46名	338名	約150名

本校の特色はミッション・スクールが財政難になり、公立の中等、高等学校になったもので、ミッション・スクールの伝統が残っていて、寮生には特別の課外活動が義務づけられています。

〔スタッフ構成〕

リベリア人校長以下インド人の Vice Principal, 教師12名, 職員6名となっています。特徴は外国人教師によって主要教科を教えられていることです。

ガーナ人教師 (1) 9年生から12年生までの英語。

ガーナ人教師 (2) 10年生の数学。

インド人教師：7年生の理科，11，12年生の数学，12年生の物理
平和部隊教師：8，9年生の理科，10年生の生物，11年生の化学
J.O.C.V(山内)：7，8，9年生の数学

理数科はおろか英語すら外国人にたよっている異常な事態と言えるでしょう。これはリベリアに人材が無いことを意味していると言えます。フランス語教師にフランスの Volunteer を依頼していることを考えると，リベリアの経済情勢が悪化し，Volunteer 活動を利用しているとも言えるでしょう。将来，本校は外国人によって教育なされるのではないかと心配しています。

リベリア人教師に比べ外国人教師の授業時間が多く，平和部隊の女性，ガーナ人，インド人は夜間の中高等学校でも教えています。

インド人の場合，リベリア政府より約500ドルの“高給”（他の教師は，250～350ドル）が支払われ，酷使されることも考えられますが，平和部隊の女性は1日6クラスを受けもたされ，これは協力活動を悪用しているのではないかと疑ったりします。私の場合，数学3クラス，7年生の理科，職業訓練としての基礎の電気を受けもたされましたが，授業の準備ができず，3週間後に断り，現在，数学及び電気を教え，週21時間の授業を受けもっています。

（付録の英文時間割表を参照して下さい）

教師は7：45AMまでに出動し，1：15PMまで校内に居ることが義務づけられています，実行する人は少なく，アフリカ人教師の遅刻，休みが多く，教師としての自覚，情熱に欠けています。

〔授業〕

7年生は2人机に2，3人，8年生以上は1人机に1人が座ります。クラスの人数が多く，私語が多く悩まされました。英語力をカバーするために黒板を多く利用することが原因の一つですが，一般に向学心は低く，学校に来ることにだけ満足しているような生徒をみかけます。

教室の設備には，黒板が正面，横壁，後，それぞれの壁にありきすが，黒板消しがなかったり，チョークが無かったりします。天井扇，照明がありますが，こわれたままのものが多く，雨の日には室内は暗くなります。

ほとんどの生徒は教科書をもたず1冊のノート，1本のエンピツですべての教科を受けている者が多いのです。

理科関係の実験室，教材はあるのですが，ほとんどこわれたままで使用で

きるものは少ないのです。たとえば8台ある顕微鏡のすべてのレンズが割れサビついています。基礎の電気の為に購入した5台のテスターの内1台はこわされ、他の3台はヒューズがとび、現在、スペアヒューズを使用しています。

リベリアでは多くの外国製品が出回っていますが、交換部品の無いものが多く、修理できずに放置されています。又、学校当局に購入財源が無いことも原因となっています。

生徒はストレートに進級してきたものと、寄道をしてきた者がいて、年齢のパラツキがあります。たとえば7年生は12歳から18歳までの子供が学んでいます。他の学年も同様で、それに関係して能力差も著しいものです。7, 8, 9年生にあっても、かけ算の九九を完全にできるものが半数程度しかなく、分数や、小数の計算においては、クラスの中で10名前後ができるくらいです。

テストを実施する場合、学校当局に試験用紙さえなく、教師は黑板に問題を書き、生徒はノートをやぶり、問題用紙をつくるか、持参するようになっています。カンニングが多く、又、採点后、修正する者も多く、彼らの不正行為には頭を悩ませられます。

リベリアは West African Examination Council に加わり、9年生、12年生を対象に10月試験があり、合格すれば進級できるようになっています。他の西アフリカ諸国が7月に行うのに、ここでは遅れて行われ、合格ラインが低く、解答率15%で合格になるなど、他の西アフリカ諸国に比べ、レベルが低いことが言われています。私の友人であるリベリア人が彼の子息をガーナの小学校に“留学”させています。生徒の中にもできることなら、ガーナ、ナイジェリアで勉強したいと言う者がいるくらい、教育後進国と言えるでしょう。

〔教育上の問題点〕

各教科とも初等教育が満足になされていなく、中高等教育に影響しています。数学では4ケタ以上の除法ができる者が少なく、生徒に問えば、小学校では2ケタまでの除法しか教えなかったと答えられ驚いていました。その背景には、小学校教師の中にも3ケタ以上の計算に自信が無いものがあることが考えられ、教師の能力に問題があるように思えます。それでありながら中等高等学校では先進国、特に英国、米国の同学年に使用する教科書での授業が指定されれば、彼らの理解力では及ばないことが多いはずで

私自身はこの問題の解決策として、学校へ提出する“Lesson Plan”と授業内容とは別に、できるだけ生徒のレベルに合わせるようにしていました。生徒の能力に合った教科書がリベリア政府によって作られねば、この問題は解決できないでしょう。

教育省自体にも問題があり、教育省配付のカリキュラムにある推薦の教科書と教育省配付の教育方針にある教科書とがちがっていたり、教師すら教科書が支給されず、政府直営の本屋で購入できなかつたり、常識は通用しませんでした。

学校の管理事務にも問題があり、生徒の名簿は教師自身で作るようになっており、始業式から2週間後も生徒数がわからず、毎日毎日、1人2人と新しい生徒が加わり、約1ヵ月後にクラスの人数がわかつたり、教師の知らない内に夜間中学に転校していたり、管理事務は散漫です。

【余暇の活用】

学校で基礎の電気を教えていることと、滞在期間が6ヵ月ということで電気製品の修理依頼が多く、テープレコーダー、アイロン、冷蔵庫、電動ミシン、電気ヒーター等の修理を手掛けました。日本ではこれらの機器の修理など、1度もやったことがなかつたのですが、運よく修理できほつとしています。残り少ない日々ということで持ち込まれるものが多く、現在、ステレオ、アイロン、冷蔵庫の依頼を受け、実際げんなりしていますが、充実した日々を送っています。

【寮生の一曰】

寮生はきびしい規則が定められ、規則を破り、校内の重労働に耐えている姿をよくみかけます。

地元住民が校内にある教会へ日曜日のお祈りに来る時や、教会の行事には正装して参列し、教会で重要な役割を果しています。

多くの子供たちが自立生活を支えるため、放課後働いているのに比べ、寮生は一般に恵まれた家庭の者が多く、Monrovia はもとより、遠方からも来ています。

<寮生の一曰>

5:30 起床、朝の祈り、清掃
7:30~7:45 朝食 (Corn-bread & Tea)
7:50 登校

Robertsport 事情と教育活動

- 8 : 05 ~ 1 : 15 授業
- 1 : 30 ~ 2 : 00 昼食 (Cassava, Gravy & Rice)
- 2 : 00 ~ 3 : 00 自由 (洗濯, 昼寝等)
- 3 : 00 ~ 5 : 00 作業
- 6 : 30 夕べの折り
- 7 : 00 ~ 9 : 30 勉強 (7 : 15 ~ 8 : 00 夕食 Corn-bread & Tea のみ)
- 10 : 30 消灯

Ⅲ リベリアと協力隊事業

リベリアにおいて協力隊事業を進めるならば、主軸は教育と農業がこの国に最も必要でしょう。教育を受けず、モラルの無い若者を多くみうけ、教育を通じ、人格教育がなされるなら喜ばしいものでしょう。

教育協力上の問題として、インド人教師が考えられます。本校を含め多くのインド人がリベリア政府と契約し、教育に携っています。彼らは実力があり、理数科教育で競合することになり、英語力のハンディキャップは大きく、理数科教師になる隊員には英語力が大事な条件になるでしょう。

リベリアの主食が米ということで農業協力が行われるなら、日本の3分の1の面積を持ち、人口が200万に満たないこの国の自給はおろか、輸出さえも可能でしょう。また玉ねぎ、人参さえも輸入しているこの国に多種の野菜栽培が行われるなら、産業の一つとして成立ち、リベリア人独特の“肥満体形”に栄養改善が加えられることになるでしょう。

J. O. C. V 活動の現場と本部とのズレを感じています。本部の対応には途上国並の業務が時折あり、不信感を抱いています。言わば最前線で戦う兵士の心理状態、状況を理解できないならば、指揮官として失格であり、兵力は低下するでしょう。本部の現場に対する臨機応変な対応を期待します。

Ⅳ 将来への展望

協力隊参加によって多くの事を学び、これをいかに生かすかが生涯の間になりました。2年間の協力隊活動を通じ意識変化があり、現在は国内における青少年育成業務に携ることを考えています。目標を見失った若者に、何かヒントになることを知らせるような働きを期待しています。

私のライフワークは、これからの10年間、国内の青少年育成業務を通じ、

その方面の知識を習得し、次の10年、20年というものを、アジアの青少年業務に携ることを考えています。

帰国後、目標にどこまで到達できるかは、現実社会との戦いで、最善を尽くすとは書けません。最後の6ヵ月間に協力隊参加の甲斐がありました。

- 1. 学校教育年間予定表 (英文)
- 2. St. John's AzT 高校時間割表 (英文)
- 3. 学校への報告書 (英文)

Robertsport 事情と教育活動

これは 1961 年のスケジュールであり、その後の変更は、この表に追記されたスケジュールに反映されています。

Ministry of Education	1961 School Year Calendar
I. Vacation Period and Activities	
A. Summer school (Five weeks)	Jan. 5, 1961 - Feb. 6, 1961
B. Vacation school Registration	Dec. 21-22, 1960
C. Vacation school Examination	Feb. 4-5, 1961
II. Conferences/Workshops & Seminars	
Jan. 29-30, 1960 Consultative conference for all chief and district Education officers as well as selected principals will be held by the Department of Instruction during 1961.	
III. First Semester - Instructional Time	
A. First marking period	Feb. 16 - March 21, 1961 (31 days)
B. Second marking period	April 1 - May 22, 1961 (31 days)
C. Easter Vacation	April 13 - April 21, 1961
D. Third marking period	May 6 - July 3, 1961 (29 days)
E. Mid-Year Examination	July 6 - July 10, 1961
F. Mid-Year Vacation	July 13 - July 27, 1961
IV. Second Semester - Instructional Time	
A. Fourth marking period	July 29 - Sep. 4, 1961
B. Fifth marking period	Sep. 7 - Oct. 16, 1961
C. Sixth marking period	Oct. 19 - Nov. 27, 1961
D. Final Examination	Nov. 30 - Dec. 4, 1961
E. Closing Exercises	Dec. 6 - Dec. 12, 1961
V.	
1. Date of the National Examination will be determined by the Board of the West African Council in Mid. October, 1961.	
2. The school grades must be submitted to the West African Examinations Council by the end of Oct. 1961.	
3. The results of the National Examination to be released by the end of Nov. 1961.	
4. All mid-year exercises to be held only for one day.	

(16 of 1)

000

22.3 100-1 000 FORM

ST. JOHN'S ACADEMIC & TECHNICAL HIGH SCHOOL
ROBERTSPORT, GRAND CAPE MOUNT COUNTY, N. L.

JUNIOR & SENIOR HIGH SCHEDULE FOR ACADEMIC YEAR-1961

	MONDAY	TUESDAY	WED.	THURSDAY	FRIDAY	TEACHERS
155						
153	HOISTING OF THE FLAG					
37.	7 - SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	G. M. JOHN
105	8 - SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	D. BANWA
9	9 - ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	P. M. OBERG
150	10- MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	M. RAIDOO
	11- S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	M. M. PAUL
	12- FRENCH	FRENCH	FRENCH	ECO.	FRENCH	PEWEE/M.E.J.
ED.	7 - MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	T. YAMAUCHI
55	8 - S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	A.K. CAINE
9	9 - SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	SCIENCE	D. BANWA
40	10- S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	M. M. PAUL
	11- MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	G. M. JOHN
	12- L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	P. M. OBERG
9.	7 - ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	M.E. JAMES
45	8 - MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	T. YAMAUCHI
9	9 - BIBLE	FRENCH	FRENCH	FRENCH	FRENCH	WILSON/A.M.K.
150	10- BIOLOGY	BIOLOGY	BIOLOGY	BIOLOGY	BIOLOGY	D. BANWA
	11- L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	P. M. OBERG
	12- MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	G. M. JOHN
150	RECESS RECESS RECESS					
H	7 - S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	A. K. CAINE
150	8 - ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	ENGLISH	M. E. JAMES
135	9 - MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	MATHS	T. YAMAUCHI
	10- FRENCH	FRENCH	FRENCH	FRENCH	BIBLE	PEWEE/WILSON
	11- FRENCH	BIBLE	FRENCH	FRENCH	FRENCH	A.M.K./WILSON
	12- PHYSICS	PHYSICS	PHYSICS	PHYSICS	PHYSICS	G. M. JOHN
125	7 - FRENCH	FRENCH	FRENCH	FRENCH	BIBLE	A.M.K./WILSON
140	8- FRENCH	FRENCH	BIBLE	FRENCH	FRENCH	PEWEE/WILSON
125	9- S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	S. S.	M. M. PAUL
	10- L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	L. ARTS.	P. M. OBERG
	11- CHEM.	CHEM.	CHEM.	CHEM.	CHEM.	D. BANWA
	12- ECO.	ECO.	ECO.	BIBLE	ECO.	M.E.J./WILSON
125	7 & 8- P. ED.	9&10-P. ED.		11 & 12-P. ED.		M.K. SHANNON
135						
15	12 - S. S.	S. S.	S. S.		ASSEMBLY	M.M. PAUL

APPROVED: *[Signature]* D. SOYLA KING, SR. SIGNED: *[Signature]* DEEPEENDRA KUMAR, V. PRINCIPAL

Robertsport 事情と教育活動

ST. JOHN'S ACADEMIC & TECHNICAL HIGH SCHOOL
ROBERTSPORT, GRAND CAFE MOUNT COUNTY, R. L.

TRADE-PHYSICAL EDUCATION & VOCATIONAL CLASSES-AFTERNOON
JUNIOR & SENIOR HIGH SCHEDULE FOR ACADEMIC YEAR
1961.

DAY	MONDAY	TUESDAY	WED.	THUR.	FRIDAY
	H. ECO. KALOKOH				H. ECO. -
	PRINTING-YAHEBULLER	<u>SPORTS</u>	<u>LABS.</u>	H. ECO. -	(KALOKOH)
P.M.	AGR. - M. BAIDOO	(ALL STUDENTS)	PHY.-G.M.J.	(KALOKOH)	PRINTING -
	MUSIC - MRS. KING	DAUDA KROMAH	BIO.- HANNA	PRINTING -	(YAHEBULLER)
	ELECTRICITY-YAMAUCHI		CHEM.- HANNA	AGR.-BAIDOO	AGR.-BAIDOO
				MUSIC-MRS. KING	MUSIC-MRS. KING
				ELECT.YAMAUCHI	ELECT.-YAMAUCHI

CLUBS - 7:P.M.-9:P.M.

APPROVED: *[Signature]*
D. SONNIE KING, SR.
PRINCIPAL/ADMINISTRATOR

SIGNED: *[Signature]*
A. KEENE CAINE
ACTING VICE-PRINCIPAL

日本に帰って考えること

山内 努

初めての途上国生活で、1年以上首都に住み、数多くのトラブルを受け、警戒心が強くなってから地方に住むようになった事は、警戒心を取り去るまでには至らず、今振り返れば、心の窓をもう少し開いていたら楽しく、より親しくなれたことだったでしょう。

アルバムの中で微笑む友人、生徒を見ると、あの時点では、ベストを尽したと思えたのに、今はもう一歩先へ行けたような気がしてならない。

脳裏に焼き付く最後の半年間、徐々に生活環境が落ち肉体的にも精神的にも参って、毎日、明日こそは日本に逃げ帰ろうと思いつけ、調整員や遊びに来た隊員に励まされ、カレンダーに書いた残り日数を睨みながら暮らした日々が2年間で一番充実していたような気がする。友人である隊員と日本大使館に勤める日本人学生の協力を得て、日本紹介の映画をやり百人以上の観客と一匹の犬を集め成功したことは忘れられない。紹介フィルムには娯楽性に乏しく映画に飽きられていた時、突如現われた一匹の野良犬がスクリーンの前を何度も往復し立ち止って、人間と一緒に映画を楽しみ皆大笑いでした。

途上国の2年間は、日本を誇りに思うようになり、今日の日本社会に生まれ育った事に感謝せずにはおられません。人間の一生が国や時代によって大きく左右されることを痛感しました。革命、局地戦争、飢饉などの今日の途上国で繰り広げられている問題の幾つかの面を、報道と違った角度から見る事ができましたが、問題を知りながら無力であることが残念です。

帰国して残念に思うのは、豊かな社会であることに気付かず、異次元の世界のような扱いがなされ、援助の手が十分ではないことです。多くの先進国が物質文明の恩恵を受け、精神的豊かな社会を求めている時期に、途上国でも小さな物質文明の恩恵を求めている。ラジカセやテレビではなく、教科書、ニンピツそして空腹を癒してくれる一切れのパン、それらは決して無理な要求とは思えない。

今は、プロフェッショナルとして途上国の発展に加わりたいと思っている。

山内隊員の報告書を読んで

沢田和佐

山内隊員は、リベリアの首都モンロビア職業訓練校での冷凍空調関係の仕事に従事するため、勇躍故国を後にしたが、配属先の受け入れ不備、モンロビア職訓建設工事の遅れからくる開校予定変更を信じ、1年半を待ちつづけ、満足できる仕事の無いまま、精神的苦悩にさいなまれつづけた。駐在員の現地事情把握に伴い、理数科教師の極端な不足から、テストケースとして、本人の力量とやる気を確認した上での配置換えを正式に行った後の6ヵ月を St. John's AzT. High School で中学1, 2, 3年の数学及び職業訓練教育としての基礎電気を教えることで、今までのたまったエネルギーを完全燃焼させた素晴らしいレポートである。

最後の6ヵ月を最初の職種とは異なる仕事に従事しながら、多忙と苦しみと、その中にある充実感を知ったことで、無駄なようであった最初の1年半を含めて、2年間に意味を感じるようになった人間としての成長振りがうかがわれる。

2年間の活動内容、モンロビア職業訓練校の予定経過を月を追うて、表にまとめたものを読めば、2年間の山内隊員の現地での生活が臨場感をもって追ってくるし、Robertsport 概要によると、[人口]、[気候]、[社会事情]、[対日感情]、[交通]、[通信]、[娯楽]、[衛生]、[外国人]、[英語]、[住居]、[物価]、[その他]等に詳細に分類された上に、実際に経験したことを土台に、時には、ユーモアとも思える程余裕を持って正確に書かれている。

例えば、雨期には蚊帳なしでは眠れないから蚊帳の持参が役立つとか、ゴム長靴、ビニールのポケットレインコート、120V用アイロンも有益だと言うような、後に続く者への細かい気遣いにも似た注意もあれば、革命後兵隊、警官の横暴が増え金をせびられたなどという世相批判も顔をのぞかせ、日本と中国の区別ができない者が多いと言う開発途上国の人々の日本に対する知識が皆無であることに触れ、日本紹介の映画会が役立ったことを述べている。

以下興味を惹いた点をあげれば、際限ない程、優れたドキュメント風旅行案内を読むような感じを持つと同時に、山内努隊員のさわやかな人間性と物を見る眼の確かさに敬意を表したい。

〔教育活動〕についても、概要と同じく、詳細であり、教育後進国としての問題点は捉えられたが、少しでもその解決に役立つ方策とでも言える山内隊員の提言がほしい。

“Lesson Plan”と授業内容とは別にして、出来るだけ生徒のレベルに合わせるようにしたとあるのは、教育の本質に合う生徒の側に立った指導ではあるが、“Lesson Plan”をそれに近づけ建て前と本音を一致させた方がよいことは言うまでもなからう。

九九の十分でない生徒、4桁の除法の教えられていない生徒達に、どう言う教材を用意し、何を教えようとするのかについては大いに関心をそそられるので、カリキュラムを是非拝見したいものである。

人に物を教えることは人間の営みの中でも最高のものであるし、それだけに忍耐力を要する息の長いものでもある。

よく学ぶ者のみが、よく人を教える事が出来ると言う言葉を贈って、2年間の御苦勞に対する感謝の辞としたい。 (協力隊技術専門委員)



Bentolでの農業土木協力活動

総合・中間報告書

派遣国 リベリア

職種 農業土木

氏名 猪之鼻 謙志

配属先 National Youth Training Center,
Bensonville, Ministry of Youth &
Sports

猪之鼻隊員の略歴

氏名 猪之鼻 謙志

生年月日 昭和28年11月4日

出身県 鹿児島県

職種 農業土木

派遣期間 54年4月～56年4月

はじめに

ふりかえれば、はやいものだと思ったりもするが、2年間の出来事を、じっくりと思い起こすと、いろんなことが目いっぱいつまっており、やはり十分に長い2年間であったという気持ちにおちついてくる。4年も5年も、リベリアにいたような錯覚さえ感じる。

とにかく、この2年間で心情的にリベリアを好きになった。要するに彼らは純粹、素朴で人がよく、親切であった。

モンロビアでは、まず全てを疑ってかかることが、日常生活の基本であるが、その点田舎の方は全く違う。名もなく貧しく、それでいて美しい(形の美しさではなく心の美しさ)生の営みがなされているのである。

こうして2年間の活動を終えて、日本に帰ろうとしている今、職業訓練所(National Youth Training Center)の連中に対する愛着の情は、ますますつのる一方である。

この2年間、もしそのまま日本で生活していたとしたら、どんな2年間を過ごしたことだろうか?、と考えてみても何の感慨もわいてこない。リベリア以外での生活はあり得ないと自然に思えるからである。その点においても私は直接、間接にかかわりあってきた現地の人々に心から感謝している。

1981年に入ってから活動報告を、簡単にまとめながら、2年間の活動を通して感じたことも交えて、最終報告書の形をとりたいと思う。

昨年(1980年)の末、国連機関のひとつである、A. D. P (Action for Development and Progress) のマネージャー(イギリス人)と話を付け、手押しポンプ1台をBentol (Bensonville) の職訓に回してもらうことになっていたのだが、どたん場になってダメになってしまった。理由は「このプロジェクトは飲料水用のプロジェクトであるために、カンガイ用ポンプとしては提供出来ない」と言うことであった。そういうことは最初からわかっていた事であり、その上で話しをすすめていたのである。それを今頃になって断わるとは何ということだ、と腹が立ってしょうがなかった。手押しポンプ1台約1,000ドルと決して安くないことも理由のひとつであるようだった。結局、A. D. P にポンプの提供を断われたことで、手作りのポンプを作ることになったのであるが、結果的には逆にそれでよかった。

当時は腹立ちまぎれに「そっちがくれないのなら、安上りのポンプを作っ

てやるわい」と聞き直っていたのだが、かといってこれと言ったアイデアがある訳ではなかった。

リフト式のポンプなどあれこれ考えあぐねている矢先、自動車整備の小野隊員に「自動車のピストンとピストンシリンダを使ったらどうだろうかね」と言われ「それだッ！」と飛びついたのであった。モンロビアには車はあふれるほど走っているし、中古車にはこと欠かない。きっと安く手に入るに違いないと、さっそくガレージを訪ねると直径12cm、高さ25cmのピストンシリンダとピストンをこころよくタダで提供してくれた。

本体がタダで手に入ったのだから、こっちとしてはバンザイであった。しかしだいたいの設計はしたものの私自身ポンプを作るのは、はじめてのことなので試行錯誤をくり返すことになる。

Metal work shop を仕事場に、生徒、教師達の手伝いを得てポンプは少しずつ出来上がっていった。生徒はもちろんのことであるが、教師達がこの“手造りポンプ”に大きな関心を示し、夜中まで付きあってくれたのは何とも嬉しかった。それぞれが意見を出しあい、工夫をこらしながら作りあげていったのである。昼間は田んぼ作り、貯水池作りの仕事、夜は授業をもっていたので、まとまった仕事は夜中にやることになった。それでも彼らは率先して、手伝いに来てくれたのである。

3月一杯で職訓での活動に区切りをつけなければならないということで、少々気が張っており、内心はあせりぎみでもあった。何度か血尿が出、いつものまにか体重も5キロ減っていた。そして、3月27日。職訓で活動最後の日に設置を終え、念願の水が出てきたのである。どたん場で失敗は許されなかった。水が出てくることは確信はしていたのであるが、実際に自分の目で確かめるまでは気が気でならなかった。水が出てきた瞬間、嬉しさと、ホッとした気持ちのゆるみからか、涙のやつが流れてきた。

出来上がったポンプは、産業革命時代のシロモノといった外観ではあるが、既製のポンプに負けないだけの機能は果たしている。

私は、ただ一つの見本を示しただけにすぎないのである。これによって、今後、第2、第3のポンプが彼らの手によって、改良されながら作られていくことを望んでいる。

このポンプを作ったことは、私自身にとっても大きな喜びであったが、それよりも彼らが第2、第3のポンプを作ろうという意欲に燃えていることの

方がもっと嬉しいことである。

金が無ければ無いなりに、自分達でやっていこうという姿勢が、みんなの意識の中に根付いてくれることがどれほど大きな力となるかはかりしれない。

全てを外国資本に頼ってしまう“習慣”をなくさないかぎり、リベリアの体質は良くなりほしくない。現実離れした“夢”ばかり見ないでもっと自分の足元をしっかりと見つめて一段一段、階段を登っていく姿勢をもつことが大事であると考えた。「なぜ、俺達はポンプを買わず、わざわざ自分達で作ったのか？」を生徒には考えて欲しかった。

2年間、大きな仕事は何一つしなかったけれど、私は私なりに、現地にそくした活動、精神でこの2年間を貫いたつもりである。

教えるというよりも、むしろ教えられることの方がはるかに多かった2年間でもあった。

特に職訓のプロジェクト・マネージャーであった、西ドイツ人 Mr. Fischer との出会いは何といても大きかった。彼からは実に多くのことを学んだ。彼の存在が私の職訓における活動に活力を与えてくれたと言っている。こういうのを“邂逅”というのだろう。おそらく彼は私にとって生涯の師であり友達であり続けるだろうと確信している。ただ、この2年間の生活を通じて所謂、白人よりも我々日本人の方が、現地の人の中により自然にとけ込める要素を持っていることも実感した。

2年間の生活を通じて「南北問題」の北と南の格差、矛盾を知った。

訓練期間中、粕谷所長が言われた「相手のいたみをわかる人間になれ」という言葉の意味を、ほんの少しではあるが、実感として自分の中に消化出来たような気がする。

自分の微力をたなにあげて相手を批評する勇気は私にはないが、援助する側、される側を問わず、責任転嫁の何と多いことか。きれいごとを言いたててもしょうがない。美辞麗句を並べて何になる。「現場」を知らずして、知ろうとせずして、また行動せずして何を語る事が出来よう。

私の「南北問題」はむしろ今、出発点に立ったような気がする。そして、私自身も人生の新たな出発点に立っている。

リベリアは今、「In the cause of the people, the struggle continues!」というスローガンをかかげて新しい国造りに励んでいるが、私もリベリアでの貴重な2年間を感謝しつつ、「My struggle also continues!」でしめく

くることにしたい。

(注：以上は総合報告書)

I 赴任から、最初の8ヵ月(1979年4月～12月)

1979年4月25日午前9時、私は Monrovia (モンロビア)空港に到着した。上空から見たアフリカの第一印象は、緑の多さであった。しかし、平坦地で緑が多いのに耕地らしきものはどこにも見あたらない。アメリカの上空(五大湖周辺)を飛んだ時に見た光景とはまるで違う。「緑に囲まれた未開地アフリカ」を直感した。それと、緑とは対照的に川の赤茶けた色がひとときわ浮き出て目についたのも印象に残っている。思わず「まるで血が流れているみたいだな」と、つぶやいた。

「緑の面と赤の線」で印象づけられた熱帯雨林気候。「ここがいよいよこれからの俺の730日の青春をきざむ土地になるのだ」という現実感に、身のひきしまる思いがして、着陸と同時に「ヨッ！」と腹の底から活を入れた。

地上に降り立った時の印象は、湿気のあるぶ厚く重々しい空気と、日本では全くなじみのない独特の匂いであった。これは、セネガルのダカールのそれと同じだった。「アフリカの匂い」と言っているのかもしれない。はじめの頃は少々きつかったが、それも時がたつにつれてしだいに何とも感じなくなってきた。人間の自然環境に対する適応力は大了なものだと、われながら思う。いつの間にか「アフリカの空気と匂い」の中にすっかりと染まっていた。

4月30日に、着任時の手続きとその他を終えた上で、日本大使館の船越参事官、林調整員に同行し、配属先となっている農業省に挨拶に行った。

当時の大臣は、チェノウィスという30歳をちょっとすぎた女性であった。こういう若い女性が大臣を務めるなど、日本ではとうてい考えられないことである。驚きであった。もっとも、日本にいる時にこのことは知ってはいたが、どうもピンとこず、実見して改めて驚いたのである。

この若き女性大臣に着任の挨拶をすまし、それから今後仕事の面でお世話になるであろう、同じ農業省派遣の日本人専門家の方々にも正式に挨拶に行った。

ところが、この日大臣に挨拶はしたものの、どうも話がおかしなことにな

Bentol での農業土木協力活動

っていることが判明してきたのである。後日、「農業省への協力隊員派遣に関し、リベリア政府外務省との間でレターの交換及び事前協議のいずれもなされていない」こと、さらに「諸理由により農業省への受け入れの用意はない」という知らせを受けた。

これが私にとり、着任早々に直面した出来事であった。あっけにとられて、きつねにでもだまされているような感じだった。しかし「まあ、こういうことも途上国では日常茶飯事のひとつなのだろう」と、気持ちを転換する。

日本での派遣前訓練中は、「わずかな情報をもとにあれこれ詮索してみてもはじまらない。どうせ実際に自分の目と肌で接することになるのだし、先発隊員としての俺にとってはむしろ白紙の状態で行く方が、先発隊員らしくもあり(?)おもしろい」といった気持ちでいた訳で、それが実際現地に着任して、文字通り白紙の状態におかれることになったのである。

あわてたところでどうなるものでもない。ただ、このまま「帰国」という事態だけは避けなければいけないと、腹を決めていた。「何でもいい。この国にとどまり、活動すること」というのが、私が主張し得る最低かつ絶対条件であった。

林調整員も、私の「意」を十分にくみとって下さり、私に対する配属先の調整に奔走して下さることになった。そして、労働省への配属先転換に明るい見通しがあるということなので、私としても農業省の方は完全にあきらめ、そちらの方に望みを託し、正式な連絡を待つことにした。

同時期に着任した星、佐藤の両隊員は、5月1日より労働省 Anex1 (New Monrovia Vocational Training Center=MVTC の仮事務所) への通勤を開始したが、M.V.T.C の開校の見通しは全く暗く、3人ともども落胆の色はかくせない。

「まあ、気長にのんびりかまえていこうや」と努めて明るく振る舞い合うことにした。

一方、私の当面の待機場所は大使館事務所となり、ホテルから大使館の往復の毎日であった。

「これも俺に与えられた時間。今のうちに少しでも英語力を身につけておこう」と、専門書や、農業省に農業土木の専門家に来ておられる山脇さん(隊員OB)に紹介していただいた現場プロジェクトの開発調査、実施報告書の文献を読み始めた。

そして、日本大使館は午後2時で閉館となるので、午後の時間を利用して Monrovia の街中をあちこち散歩して回る。

ホテル生活が続くうちは、外食を余儀なくされた。普通のレストランはどれも高く、これではとてもじゃないが続かない。現地の人が利用する場末の食堂を探し、昼食はほとんど毎日ここに通って食った（現地食一品と、コーラ1本で\$1.60）。夜は、スーパーマーケットでパンと缶づめと水を買って込み、ホテルの一室で3人シヨボシヨボと夕食をした。

「仕事のことより、ともかく1日も早くアパートに移って落ちつきたいな」というのが当時の最も切実な気持ちであった。実際、ここは悪質な盗難事件が多く、荷物を置いたままホテルを留守にするのも気がかりであった。

この間、専門家の方々（特にOBでもある阿久津さん、佐々木さん、山脇さん）がいろいろと気づかって下さり、夕食などに招待してもらったのは、感謝してもしきれない。そうして、市内の散歩、専門家の方々との話などを通じて、少しずつリベリア国のおかれた立場と現状を理解していった。

6月13日、林調整員に同行し、労働省に挨拶に行く。

そして、最終的な配属先はまだ決定していないが、Bentol の職業訓練所が有力であるとの連絡を受ける。一步前進であった。これまでの宙ぶらりんな状態から、仕事場が得られるという連絡を受けたことにより、気分的にはずいぶん楽になった。最悪の事態を免れたことで、実際ホッとした。

6月14日から16日まで、黒河内事務局長(当時)がリベリアを訪問された。その折に、現地側受け入れ体制の不備、我々隊員の現状、モンロビアの物価高騰についての報告をした。局長自らが現地視察に来られたことは、大きな意義を持つと一同喜んだものである。また、日本での訓練期間中に局長とじかに話した話をするなど、思いもよらぬことであり、少なくとも私にとり遠い存在であった局長にこうした形で、現地で話す機会が出来たことは嬉しいことであった。局長には、現地の状況をしっかり認識して帰っていただき我々はここで微力を尽くす旨を伝える。

局長を空港で見送る時、2ヵ月弱にして自分も一緒に飛びたい気持ちが頭の中をかすめたが、「活動はこれからじゃないか」と頭の奥深くに押し込めたのを思い出す。

ホテルと大使館の往復を続けるかたわら、モンロビア市内にある Training

Bentolでの農業土木協力活動

Center(Caterpillar 社所属), 工業高校(Tubman High School), Monrovia 郊外にあるW.A.R.D.A (West Africa Rice Development Association) の Training Center(OBの阿久津さんが専門家として勤務)などを視察して回った。その他, Fire Stone 社の約20,000haに及ぶというゴム園のドライブは壮観であった。

こうした市内を中心とする現地視察は, 実際に活動を始める上で大いに役立つものであったが, それにしても相変わらずのホテル住まいというのは, 何ともおちつかず, 気持ちのイラ立ちは隠せない。

農業土木隊員である私にとって興味があるのは田舎であって, せっかくの機会だから田舎巡りをしようと思っても, いつ労働省の方から引っ越しの連絡がくるかわからず, ホテルを留守中にするわけにはいかなかった。

林調整員が持ってくる情報は「今週中には引っ越せるとのことだ」「来週中には……」「今月末には……」「来月始めには……」といったくり返して, いつも決まって期待はずれた。

「いいかげんにしてくれ」と, さじを投げたくもなるが, かといってそれを無視する訳にもいかず, おまけにホテルのマネージャーからはフロントで顔を合わせるたびに「いつホテルを出ていくのだ。金はちゃんと払うのだろうか」と言われるしまつ。仕事に明るい見通しがついたものの, このホテル滞在は踏んだりけったりであった。

1979年の7月, 一応アパートに落ち着いてからと考えてい現地語学研修をたまたま知り合った平和部隊のボランティアに依頼して, 同期の3人が一緒にホテルで開始した。

個人的には2泊3日の田舎視察旅行を実行した。これほどいいかげんで, 全くあてにならない連絡に翻弄されるのは, もううんざりもいいところであった。

私がホテルを留守にする間にも, 労働省から本当の連絡があるかもしれない。星, 佐藤の両隊員にホテルのカギを預け, 荷物等の管理を依頼する。わずか3日間の留守で, 結果的には移動はなかったものの, 彼等には大きな精神的負担をかけることになった。

そして, この視察では奥地(Nimba Country)を見て, モンロビアがいかに特異な存在であるかを痛感する。純朴で明るく人なつっこい人々。身边を

気づかう心要もない。緊張していた心が、パッと解き放たれていくのがはっきり自覚できた。「これが本当のリベリアの姿なのだ。モンロビアはリベリアにあってリベリアじゃない」と思った。本来なら、農業省派遣でこうした奥地で活動するはずであったのだが、と残念な気持ちであった。しかし、「活動の場を与えられればどこでもいい」と開き直っていた手前、労働省のさしずみに従わざるを得ない。「まあ、与えられた現場で何とかやっていこう」と、これまた開き直ることにした。

見通しが全くたないホテル生活も、これだけのびのびにされると、精神状態も少しは変わってくる。これが現地の実態だとわかっている、愚痴のひとつも出てくるようになる。労働省と、我々隊員の間にある調整員としても苦しい立場にあったと思われる。

7月末日、「明日アパートへ移動」の知らせを受ける。「どうせ今回も期待はずれだろうよ」という気持ちと、「今度という今度こそ本当であってほしい」という本音との両方を持った。しかし、今度こそ本当に本当であった。翌日（8月1日）、待望のアパートへ移った時も、しばらくは実感がともなわなかった。この日、リベリアに来てはじめて簡単な手料理を作って食う。食事を終えて一服してから「これでやっとリベリアでの生活が始まるんだなあ」と、しみじみ思ったものである。

結果的に、我々のホテル滞在は98日間に及んで終ることになった。

8月1日、待望のアパートに移ったことにより気分も改った。さらに、配属予定になっていた Bentol 職業訓練所への配属が正式決定し、3日より出勤を開始。通勤には、当職訓の調整員であるデービット氏の出勤時間に合わせてピックアップしてもらい、Bentol へ通うという方法をとった。しかし、彼は毎朝 Bentol に出勤する訳ではなく、週3日が限度であった。しかも前もって申し合わせてあるにもかかわらず、出勤時間はまちまちで雨などが降ると勝手に休む始末であった。

ちょうど雨期の最中でもあり、週に1回も Bentol に顔を出さないこともたびたびであった。他に交通手段もなく、彼に全てを頼らざるを得ない現状では文句を言う訳にもいかず、当日の朝は準備をして待ち、たとえ彼にすっぱかされてもがまんすることにした（この状態は、10月いっぱいオートバイが来るまで続く）。

Bentolでの農業土木協力活動

Bentolの職訓に一応、活動の場を得たとはいえ、ここに灌漑コースが設けてある訳でもなく、私の場合は全くのフリーであった。もっともたとえ用意されてあったとしても、モンロビアからの不規則な出勤状態では不可能なことである。

当面は職訓の様子を観察し、スタッフや一部生徒達との交流に努め「現場」に慣れることにする。そして、案内人を見つけました時には1人であちこちと歩き回った。

9月3日～9日の1週間、2回目の奥地視察旅行に出かける機会を持った。この時は稲作専門家の森田さんと同行した。この視察旅行を終えたのち、職訓での活動方針の照準を、新入生が入学してくる80年1月に合わせ、計画案の作成にとりかかる。

National Youth Training Center, Bentolにおける教師としての私の位置づけという意味でも、この計画案の作成は重要な仕事であった。しかし始めから出しゃばったことは避けようと思っていたので、計画案は計画案として提出し、実際の位置づけは徐々に開拓していく方針をとる。この計画案作成にあたっては、OBでもある専門家の山脇さんから、貴重な助言、指導をいただいた。

10月の主な仕事は、計画案の作成だった。英文で書くのは骨のおれる仕事であったが、これは私にとっていい勉強になった。リベリア農業開発の現状に対する考察と、それを基準とした活動方針を20ページにまとめ、労働省本省と職訓に提出した。また、この職訓への援助国である西ドイツ、The Friedrich Naumann FoundationのProject Manager, Mr. Fischerにも提出した。

11月から12月にかけて、状況は少しずつ変わりつつあった。それまでモンロビアからベントールへの出勤は相変わらずの不定期便であった。しかし、たとえバイクが手に入ったとしても、毎日通勤(26マイル)となると少々きつい。できれば職訓、もしくはその近くにでも住めたらと考え、職訓側に前から連絡していた。その時点では職訓内にある教師用宿舎は満杯であり、一軒の家に2人の教師(2家族)が同居している状況であったので、無理を

言う訳にもいかなかったのだが、「倉庫の隅にある小さな一部屋があくので、もしそこでよければ使ってほしい」と言われ、喜んで移ることにした。10月末日に待望のバイクを入手出来たことにより、モンロビアからの不規則な出勤から解放され、さらに11月16日から職訓内に一部屋確保したことにより、ベントールでの生活に本腰を入れる体制が整った。

ここまでの状態になるのに、ざっと7ヵ月を要したことになる。「現地生活が軌道にのるまでには半年ぐらいはかかる」と言われていたが、自分の経緯を振り返ってみて確かにそれは言えると、納得したものである。

バイクが使えるようになったため行動範囲も一段と広がった。時間的にも余裕が出来て、バイクを利用してリベリア唯一のダム（電力用）、L.P.M.C (Liberia Product Marketing Company) の農場、集落などを見て回った。

職訓での生活が日を重ねるにつれ、教師達との交流も深まってきた。それまででつきり教師はほとんどがリベリア人であると思っていたが、いざ確かめてみるとシエラレオネ人であったり、ガーナ人であったりで結局、教師のほとんどは外国人によって占められていることがわかり驚いてしまった。あとでわかったことだが、こうした職訓の教師の多くは外国人で占められており、ベントールの職訓だけが特別な存在である訳ではなかった。リベリアがかかえる問題点はこうしたところにもよくあらわれている。一般的に、リベリアという彼等自身の国の中であって、彼等の地位は極めて低いと言える。エチオピアに次いで、アフリカでは二番目に古い独立国であるという輝かしい歴史も、実状は植民地と何ら変わらない状態であると言ってもいいような気がする。

このことを、さらに教育を例にとりて考えてみる。この国では、どんな奥地に行っても粗末ながら学校はある。モンロビアでは夜間部が、どこにでも開設されている。要するに「形」は立派に整っている訳である。しかし、授業が満足に行われている学校は意外と少ない状態である。リベリアで最も優秀な学校と言われている Tubman High School でさえもメチャクチャであると言う（当時、竹内隊員が余暇活動の一環として当高校で教えていた）。

総括的にみれば、組織力、運営管理能力の欠如、さらに学校教育の内容に十分に応えうるだけの人材がリベリア人の中に少ない（給与が低いということもある）ということである。従ってその一部の穴埋めとして、所謂専門の

技術、知識、経験をもった「外国人出かせぎ労働者」が、幅をきかすことになる。彼等の目的は、あくまでも「金をかせぐこと」であって、それ以上のものではないようだ（もちろんそうでない人もいる）。全ては金で決まる。実に、はっきりしたものである。

一番気になるのは、彼等のだれもがリベリア人をこきおろせるだけこきおろしてはばからないことである。確かに、そう言われるだけのことはある訳で、そこらのからみあいの中にリベリアの教育事情の悪循環があるように思われる。

長期的な展望に立った上での改善で、決して大きな事業としてではなく、小さくコツコツとなされていくことが望ましい。

話は転々とするが、私個人の意見としてはこの国での協力隊活動の一つの方向性として、基礎教育分野（小、中、高等学校の教師）と農業分野（特に稲作関係）の隊員が派遣されることになれば、実際の活動以前の問題も含めてさまざまな障害にぶつかるとしても、いつかは実を結ぶ日がくるのではないかと思われる。

1979年は、こんな中で暮れた。この年は、現地に来て現地活動をするためのお膳立てをする年となった。1980年の始まりとともに職訓での本格的な活動が出来るのは、区切りをつけるには格好の時期でもある。「あせらず、あわてず」をモットーにしてきた現地活動が少しずつ少しずつ自分の望む方向へと進行しつつあった。

過去への反省（後悔ではない）は明日への糧。1980年代の始まりを目前にしてアフリカ生活の中盤へ向かう心の中は、静かに確実にあつくなっていた。

Ⅱ 1980年の活動

1980年。生まれて始めて迎える異国での正月となった。暑い所で迎える正月は何となく妙な感じで、やはり正月は少しでも寒い中で迎える方が正月らしくていいと思った。

1月8日、新生が入学し、9日より活動を開始した。前もって調査しておいた2ha強のブッシュの開拓を、生徒、全教師一緒になって始めた。全員が一丸となってナタを片手にブッシュを切り開いていく。全国各地から集まってきた生徒達も、入学早々で張り切っている。一人でやると大変な仕事も多勢でやると能率もよくなりもある。みるみるうちに、ブッシュは切り開かれ

ていった。アリに食われ、虫にさされながらもなぜか気分は爽快であった。汗がとめどもなく流れ出てくる。仕事で汗をかく喜びを味わった。「俺は今、アフリカで生きている」という実感が湧いてきた。

ブッシュを切り開いたあと、区割りをしてやり生徒に割り当てる。その割り当てられた土地は、生徒一人ひとりの所有地となり、そこで生産した野菜は彼等個人個人の収入となる。彼等はまさにリベリアの開拓者であった。

1月下旬から2月にかけては、雨期の大雨による浸食防止対策を行った。生徒達の余暇活動のために作られたサッカー場の土砂が、水田に流れ込んで耕作不能の状態であったため、毎日10名の生徒をあずかってこの仕事を行った。

雨期に大雨をもたらすこの国において、浸食防止は最も大きな問題のひとつと言える。ガリ浸食は、この国のいたる所で見ることができる。

私の行った仕事では、裏山からサッカー場に流れ込んだ水が、そのまま4m下の水田（低湿地）へ勝手に流れ落ちていた。これに対するため、まず裏山からの流出水を遮断するための排水路を掘削。次に浸食が進んでいる水田側に小堤防（grass water way）を設け、その水を水田（低湿地）との落差工を階段状に設けてゆるやかに落とすことにした。これは「柴ぞき工」ならぬ「ヤシの葉ぞき工」であった。生徒にはいい見本になったようである。

この国でコンクリート水路や、コンクリートぞきなどを考えるのは、まだまだ先の話である。農業開発は、決して先を急ぎすぎはいけないと思った。国家単位の規模でとらえていくよりも、むしろ地域的な単位に的をしぼり、長期的展望のもとにたった地域農民（若者を対象）のための農業技術（近代技術に先走ってはいけない）、農業経営、農業経済、教育の普及に力を注いでいく必要があるように思われる。

経済力が無いにもかかわらず新しいものを欲しがり、ダダをこねてみせれば外国の援助で機械が手に入る。その時には大喜びしてありがたがるが、一度故障すればもうお手上げ。自分が汗水たらして働いた金で買った機械ではないから、愛着もわかない（恥ずかしいことだが、私にしてもそうである。自分が苦勞して得たものは大事にするが、そうでないものはたいてい取り扱いもついいかげんになってしまう）。そうして、こわれたらまた新しい機械を欲しがればいさといった考えにおちつく。悪循環へと走るのみである。

ツルハシとスコップをかついで仕事に出る。ギラギラと肌をさす陽ざしの

中での土方仕事はきつい。体中がたちまちのうちに塩分でベトベトになる。

「機械をもってくれば楽だし、仕事もうんとはかどるじゃないか」

「俺も全く同感だ。こんなムダな苦勞しなくてもすむもんな。しかしその機械はどうするんだ」

「日本から持ってくればいい。日本は工業国で金持ちだから、簡単にできるはずだ」

「ああ、やろうと思うなら簡単に出来るさ。しかし、お前達の考えは間違っているぞ。なぜお前達は自分達のおかれた状況をもっと考えようとしていないのか。第一お前達は何でも人に頼りすぎる。確かに仕事はきついし、能率も悪い。お前達の気持はよくわかる。しかし、だからといって人に頼ってばかりいたらいつまでたっても進歩しない。今でこそ日本は機械化されているが、ここまでになるにはそれなりの長い歴史があるのだ。リベリアの農業はこれからお前達自身の手で開拓されていかなければならない。そういう目的があるからこそ、この驛圃に入学してきたはずだ。1年、2年先のことでなく、20年、30年先のことを考えなくちゃいけない。農業開発は1日2日で出来るものじゃないのだから。最初から楽しんでうまくやろうなんて、とんでもない。今はとにかく自分の体に頼る時なのだ。それをしっかり自覚して頑張らしてほしい」

生徒を導びくのも楽じゃない。屁理屈のうまい彼等にかかっては、いいかげん嫌にもなる。

「なんで俺はこんな所になきゃいけないのだろうか」と思ったりもする。こういう時はだいたいにおいて疲れがたまっている時であったので、努めてたっぷり睡眠をとることにした。十分な睡眠はここでの生活の心要条件であると思うようになった。

3月から5月までの主な仕事の内容は次の3つであった。

- 1) 水田の整備（灌漑、排水兼用水路の掘削、コルゲートパイプの埋設等）。
- 2) 新水田予定地ブッシュ（約1.5エーカー）の伐採、焼き払い（初年度はUpland riceを栽培）と一部圃場整備。
- 3) テラス形式による畑地造成。

以下、それらについて詳述する。

1) について。

それまで約1エーカーの水田のうち、実際に耕作されていたのは下流部半

分だけで、上流側の水田はサッカー場からの土砂流出により耕作不能の状態であった。従ってその流出土砂の除去と、排水路掘削を行った。稲作コースの生徒をかり出してツルハシとスコップのみでやった。はじめの頃は生徒も積極的な反応を示すが、毎日穴掘りでは次第にあきてくる。生徒達は、理論的なことがわかればそれでいいと、開き直ってしまう。「いくら理論をわかったとしても、実際にやらなきゃ、いつまでたっても米作りは出来ないよ」と私は口をすっぱくして言い、「今日は足が痛い」「ちょっと水飲みにきてきたい」「小便だ」「だれだれに用事がある」「ちょっとそこの村まできてきたい」などと、いろいろ理屈をつけてさぼりたがる生徒を相手に、熱帯的スローテンポで仕事を進めていった。ちゃんとけじめをつけて休憩時間を与えているにもかかわらず、そのような調子であるから、こっちもいいかげん疲れてくる。そういう時は思い切って仕事を打ち切り、みんなを木陰に集めて日本のことや、食糧問題のことなどを話し、また逆に生徒達にそれぞれの将来への希望をきいたりする時間に回した。時間にすれば、だいたい30分程度のものである。しかしこの時間は仕事に嫌気がさしてくるから、タイミングが良かったということもあるが、こちらが驚くほどの興味を示した。私もへたな英語ながら、話にはそれだけ熱が入った。これは言わば私の「野外講義」であった。こちらが真剣になれば、彼等も真剣に対応してくれることも知った。日本でいう義理人情に相通ずるものがある。逆に、ついうっかりいいかげんなことを言って生徒を傷つけたこともある。

「Mr. Gaidea (ガーディエ。私のことである。リベリア人が私につけてくれた名前だ) みんなの前であんたがあんなことを言ったおかげで、俺の心は傷ついた」と悲しそうな顔をしてやってくる。どんな事であろうと、人前で「恥」をかかされることを極端に嫌う。そういう時は素直に心からあやまった。そして「明日からまた一緒に仲良くやろうな」と肩をポンとたたくと、満面の笑みに照れ臭そうな表情で「OK, ジャあまたあした」と帰っていく。その後ろ姿に思わず「ありがとう」と叫んだ。

毎日顔をつきあわせての生活であるから、感情的な浮き沈みも心然的なものである。それは必ずしも外的要因だけによるものではなく、内的要因によるものもある。しかし、何やかや言っても自分が現在生きている土地に程度の差はあれ愛着が湧いてくるものである。客観的にどのような判断をされたとしても、それは今後への課題。今の自分にとってここ以外の生活は考えら

れないと、自然に思えるようになった。

話をもう一度水田の整備にもどす。水田は、一般道路により上流側と下流側に二分されている。これまで一本のパイプにより上流側の水を排水していたのを、さらにもう一本埋設することにより雨期の排水能力を高めることにした。埋設したパイプは直径90cm長さ10mのコルゲートパイプで、この直径は大きすぎるのだが、これにはちょっとしたいきさつがある。実はこのパイプは駱訓の入口近くの道路脇に長い間ほったらかしにされていたものである。駱訓所有のものではないのだが、かと言って誰かがそれを使うような気配も全くない。Director と相談した結果「ほったらかしにしているのは目ざわりだし、もったいない。使っちゃえ！」と言うことになったのである。したがってタダであった。

それを、ブッシュからとって来た「カズラ」をロープとして使い、みんなで運び込んだ。この埋設作業では生徒が実によくやってくれた。作業が無事完了した時、どっと歓声が起こり、みんながだれかれとなく抱きあって喜んだ。はたから見れば「たかがパイプ一本埋めたぐらいで何と単純なやつらだ」と思えたことだろう。実際、生徒も単純だったし、私も単純だった。嬉しくてしようがなかった。そしてこの雰囲気を生徒達自身忘れないで持ち続けて欲しいと思った。

2) について。

まずブッシュの伐採作業だが、ヤシの木の伐採はオノの他に自動ノコギリ一台でやった。さらに、切り倒したヤシの木の除去にはトラクターを使った。伐採作業を終えたのち、一斉に火を入れた。日本のように、野焼きをするのにこまかく気を使う心要もない。どンドン火を入れていき、あとはほったらかしにしているも良かった。一部圃場整備をただけで、それ以外はそのまま Upland rice の種をばらまく。この国の伝統的焼畑農法である。Upland rice の収穫を終えたあとで水田の圃場整備に移ることにした。こういう国の状況にあっては、焼畑農業もまんざら捨てたものではないと思うようになった。伝統農法をひとと言で「遅れた農法」と簡単に片付けてしまうのは誤りである。伝統農法には、それなりに社会的自然的条件にかなった理由がある訳である。農業開発の出発は、こうした伝統的農法の社会的自然的条件の把握、理解から始まる。その土地の人々の「生活の知恵」を侮ることは決してできないし、してはならないことだと痛感した。

3) について。

傾斜が10%前後の土地、約1エーカーをテラス形式による畑地に造成した。表土はぎは、トラクターを使用した。あとはすべてショベルと一輪車のみで人力に頼る。

「わざわざテラス形式にしなくても」という意見もあったが、これはデモンストレーション・ファームとしての試みであった。傾斜地での畑作は、土の流亡が激しくすぐに侵食されて荒地となってしまう。山間地で、しかも雨の多い地方にあっては「テラス」の効果は大きい。しかし多大の労力を必要とするためにこれが現地の人の中に広まっていくかどうかは、なんとも言いがたい。

奥地をみて回っても、ほとんどが傾斜地をそのまま耕作地として利用していた。移動農業形態をとるならば当然そうあってしかるべきである。しかし定着農業を考えれば、このテラス形式による畑地造成の持つ意味も重要である。「地域の選定」という最も基本的かつ重要な点を十分に踏まえた上での「テラス造成地」の普及が望ましいと考える。土手には繁殖力が強く、しかもそれを煎じて飲めば、マラリアや熱病によくきくという薬草を植えた。これは野菜教師のアイデアであり「Nice idea」と賞賛したものである。

今では各テラスごとに野菜が生産されているが、この仕事は野菜コースの生徒を指導して行った。見た目には何でもないように思えても、実際には多大な労力を必要とした。そしてこれは、浸食防止、つまり土壌保全という考え方を理解させることが目的であった。

この「テラス畑造成」が将来にどのような意味を持つかは何とも言えないが、この畑を通るたびに「やってよかった」と自己満足している。

5月の中旬以降から雨期に入り、乾期にやるべき仕事にも一応のケリをつけたので、6月に入ってから稲作コースも苗作りから田植えを開始した。私はこの稲作コースの教師と共に指導にあたり、特に水田灌漑の指導に力を入れた。「水の供給」という点からすれば、雨期は問題はない。むしろ過剰水をいかに処理するかが重点となる。現在この国で行われている稲作灌漑は所謂「たれ流し方式」である。雨量が多いことを考慮すれば、これも妥当と言える。しかし稲の生育条件にあった水管理のあり方に対する認識は薄い。

まずは生徒とともに、私も田んぼに入っていった。

この1月以来の乾期は、リベリアに来て初めて大汗をかきながら活動にあ

たった時期であった。1日の仕事を終えると疲れがドッと出て夜は早めに床につく。夜はとにかく、ぐっすりたっぷりと眠った。日本に書く手紙の量も少なくなった。30度をかろく上まわり、35度にまでなる陽ざしの中での仕事はこたえる。だらけた仕事はしたくないし、またそうすればすきを見てはさぼりたがる生徒へのしめしが見つからない。「今はお前達自身の体に頼る時だ」と言い続けてきたために、いつも「監督と労働者」を兼ねていた。「ガーディエはいつも俺達にハードワークをさせる」と不満を言う生徒もいたが、そういう時は「勝手にしろ」と頓着せずにはいた。しかし、しばらくすれば必ず仕事についてくるであろうことを私は見抜いていた。案の定、いったん理屈を言った上で仕事をやり出した。そこで「仕事がついののはよくわかる。俺だってクタクタだ。しかし俺達はやらなくちゃいけないんだよ。一緒にやろうな」と肩をポンとたたいてやるとニコッと笑ってうなずいた。

こうした毎日の中で、それなりに充実感があったが、やはり何かまだもの足りない。それは自分が職訓の教師として来ているながら授業を持っていないことからくるもの足りなさであった。

「とにかく始めよう」と決心し、夜間クラスを開設することにした。西ドイツ人のマネージャーと相談の上、上位30名の生徒を選択して10人ずつの3クラスに編成し、月、火、木の夜7:30~8:30の時間帯をあてることにする。以後変則的ではあるが、昼はフィールドワーク、夜は授業という生活パターンになった。このことでまたそれだけ生活にはりが出て来た。これでなんとか職訓の教師としての形を整えることが出来たわけである。

授業の内容(項目)は次の通りである。

- 1) 灌漑排水の概論
- 2) 水田灌漑(水管理、水田用水量)
- 3) 気象観測
- 4) 数学の基礎計算

生徒を上位30名に限定し、しかも3クラスに編成したにもかかわらず、生徒間の程度の差は大きく、1時間で消化する予定がいつも1時間半になり2時間になった。同じことを時間をかけてくり返すように心がけた。従って必然的に授業の進行速度はスローテンポになる。

「これは正規の授業ではないし、自分の計画案通りに消化する必要はない。それは単なる自己満足に終わってしまうだけである。予定通りの消化がで

きなくともいい。生徒が確実に理解するまでじっくりと指導していこう」と腹を決めた。

8月になって、これまで住んでいた倉庫脇の小部屋から教師用の宿舎に移ることが出来た。新築された家には家族持ちの教師が移動した。私は単身で来ている教師と同居することになった。一軒家で2ベッドルームあるので、プライベートルームは確保できた訳である。何より自分で料理が出来るようになったのが一番嬉しかった。前の部屋は、ただ寝るだけのスペースしかなく、食事はいつも食堂で生徒達と同じ現地食を食べていた。同じ現地食でも野菜の教師が作ってくれる現地食と食堂のそれとでは極端に違う。実にうまいのである。ペントールでの生活9ヵ月にして「食事を楽しむ」ことが出来るようになった。

週末になると、栄養補給も兼ねてモンロビアで現地食でない手料理を食うのが待ち遠しいほどであったが、自炊するようになってからは、そういう気持ちもなくなり、逆にときどきモンロビアの隊員に手作りの現地食を食べてもらったりした。これで生活環境も何とか落ち着くことになった訳である。

この料理は、ほとんど全てにペッパーと油（ヤシ油）が使われる。私はこのジョロフライス（日本のチキンライスに似ている）が大好きである。これは日本人の口にもっともあう西アフリカの料理と言えよう。その他ポテトグリーン（サツマイモの葉をきざんだやつをヤシ油と一緒に煮込む。好みにより鳥肉、魚等を入れ、カレーライスと同じスタイルで食べる。料理方法は他のものもほぼ同じである）もある。

キャッサバリーフ、カラードグリーン、バラバソースといった独特の料理もある。ジョロフライスを除いていずれも見た目にはグロテスクであるが、味はどうしてどうしてなかなかのものである。今ではペッパーをふんだんに使った西アフリカの食生活に、すっかりのめりこんでしまった感じである。

9月4日、第一回目のテストを実施した。結果は100点満点で最高が79点最低が36点で平均は63.2点であった。

記述問題は全体的によくできたが、ほとんどが数学の計算問題でつまづいていた。「あれほど念を入れて指導したのに」と、ガッカリであった。私の指導方法に大きな問題があるのではないかと、頭をかかえ込んでしまった。せめて80点代の平均点はとってほしかったのである。とにかく落胆ばかりしていてもはじまらない。もう一度やり直そうと元気を出すことにした。早速

数学の総復習にとりかかる。分数、小数計算、一次方程式、面積計算、単位の使い分け、平方根の解法、ピタゴラスの定理、三角関数の基本形を基本測量計算と関連づけてくり返し説明したのち、生徒自身に黒板に出てやらせる方法をとった。私はクラスの後について、生徒が説明する中でその時どきのポイントをまとめていく役に回った。

10月に入ってから、思い切って生徒数を15名に縮小、クラスもひとつにまとめた（授業に遅れてくる生徒、ただ出席しているだけにすぎない生徒に対し、「俺のクラスは正規のコースではないし、俺は本当にやる気のある生徒だけがほしいのだ。『資格』をもらいたいがために出席しているだけの生徒はいらないし、第一どんな資格も与える気はない。だから出席するしないはお前達の自由だ。そのかわり出席する以上はまじめにやってもらわなければならない。いいかげんな理由で欠席したら、その時点でクビにする」ということで生徒に対処したのである）。そういったことで、生徒も積極的に取り組むようになってきた。教室にいくと、すでに生徒は集まっており、ひとりが代表して黒板に出て前回の復習をやっているのが常になった。「実にいい雰囲気だ。こうでなくちゃいけない。今後もこの雰囲気をもりあげて頑張ってもらいたい」と内心の嬉しさとともに励ましたものである。

教室での授業がある程度軌道にのってきたことにより、それにともなう野外実習を行う準備が整った。しかし平日（月～金）をその時間にあてることは出来ない。結局土曜日の午後の自由時間を使う以外になかった。リベリアは週休二日制をとっており、土曜、日曜は休日である。生徒と話し合った結果、意外と彼等の反応は強く、私も「そうか、よし。だいぶ準備もできてきたし、実習でその成果をためすとするか。始めよう」ということになり、Directorにはその旨の話をつけ、11月から毎週土曜日の午後の実習を開始した。

12月現在で、レベル測定の指導を行っているところである。

以上が大ざっぱではあるが、1980年12月までのだいたいの経緯である。

最後に付記として若干のことをつけ加えたい。

私の勤務する職訓は、西ドイツとリベリアの援助協定に基づき設立された農業者養成のための職業訓練所である。4月に起きたクーデター（独立以来初めての出来事）が示すように、この国の内状はガタガタであった。特に財政難ははなはだしく「これでよく国家が成り立っているものだ」とあきれ、

驚き、あげくに感心までしたものである。そして、多くのプロジェクトが空回り状態である中で（モノロピアV.T.Cはその典型的な例と言えよう）、西ドイツのがっちりしたマネージメントで、クーデター後も職員一同協力しあって確実に着実に運営されてきた。

もっとも、クーデターのおおりに受けてあちこちでストライキが続発し、学校関係のストライキも目立った中で、当職訓の生徒達が自分達への待遇改善を求めてストライキを起し、全く現状を理解しない筋違いのストライキに対し、西ドイツ側が援助の打ち切りを表明したこともある。西ドイツが援助を打ち切れば、実質的に職訓は閉鎖となる。私自身も生徒達に対し「お前達は何を勘違いしているのか」と食ってかかった。しかし勢いに乗じた連中には歯止めがきかない。実に情けなかった。結果的には6人の退学者を出し、職訓は継統ということに落ち着いたが、終始ドイツ側の独壇場であった。事のよし悪しは別として、この事態を収拾できるだけの力(財政力、指導力)は、リベリア側にはなかった。ドイツらしいやり方であったと言える。

しかし、考えてみればこれも西ドイツ(もてる国)のなせることである。もてる国の力強さと、もたざる国のうろたえた姿を同時に目のあたりにして、自分でも何と形容していいのかわからないのだが、確かに自分の気持ちが沈んでいくのがはっきりと自覚できた。これが、教育、政治、経済等、全てをひっくりかえした南北の差なのかと思う。政治、経済という一種の力関係からも、そしてもっとも注目すべきは同じ人間としての関係の中でさえも、お互いがお互いを半分は無意識の内に、上下という枠の中で「南北」をとらえているのではないかと思うようになった。

リベリアに来て、またベントールの職訓で生徒と接するようになって、教育開発の必要性を痛感したのであるが、その教育のあり方は所謂「北側」に迎合する形のものであってはならないと思うのである。では、そのために何が要求されるのかと考えると、一筋縄ではいかない訳であるが、そこらあたりに教育開発の根源となる問題があるのではないかと思う。土壌の粗末な家で、裏山でとれるキャッサバを食ってその日をなんとか生きている現地の人の上空を、ジェット機が飛びかう途上国にあっての、バランスのとれた教育開発は並み大抵のことではないことは、確かであるようだ。

話が横道にそれたが、とにかく職訓は一応「危機」を脱出し、現在も順調に運営されている。

Bentolでの農業土木協力活動

さらに、もうひとつ次のことを書き加えたい。ひとつの試みとして稲の生育過程を追ったスライド作りを行なった。今年、実習水田で行なわれた稲作の苗床作り、シロカキから収穫までの一連のポイントとなる過程を、50枚ほどのスライドにまとめてみた。まだ、不足な部分や、撮り直しをした方がいい部分等があり、今後つけ足し、修正していく必要があるが、現在稲作の一例として将来の生徒指導に役立ってくれば幸いである。

日本から持参したカメラも、こういう形で生かすことが出来たのはよかった。

Ⅲ National Youth Training Center, Bentol (N.Y.T.C)

前述したように、N. Y. T. Cは西ドイツとリベリアの援助協定に基づき、将来のリベリア農業の発展に最前線で貢献する若者を育てるための農業者養成の職訓として設立され、現在、2期生が訓練を受けている最中である。修業期間は1年半で、実習を主体とした所謂「Learning by doing」によるプログラムが組まれている。

○職員：—Director (1人), Project manager (西ドイツ人2人)
—Assistant director (1人), Accounting manager (1人)
—Instructor (13人, 私を含む)
—Assistant instructor (5人)

その他、秘書(1人)、寮管理指導(2人)、ドライバー(2人)、トラクタードライバー(2人)、倉庫管理(1人)、守衛(3人)、コック長(1人)。計35名の構成である。

生徒の定員は男子100、女子50になっているが、現在女子の第1期生はすでに卒業、2期生の募集はまだ行なわれていない。男子生徒については入学予定110名であったのが入学のとりやめ、自主退学、強制退学(落第者を含む)の過程を経て、現在87名となっている。1980年1月 training 開始。1981年6月末日卒業の予定。

私を除く教師12名のうち、8名はすでに前述してあるように専門知識・技術を持った所謂「外国人出かせぎ労働者」に属する。内訳はガーナ人5名にシエラレオネ人3名。彼らの給料はリベリア政府から出る形をとっている(実際は西ドイツが支給)。なお彼らの大半は将来リベリア人となって落ち着くケースが多い。今回、私がガーナ人を日本での技術研修生に推薦したのに

は、以上のような背景がある。

●ベントール職訓における私の立場、後統隊員派遣について

本稿のⅠに述べたように、私は農業省派遣の農業土木隊員として着任したが、結果的に農業着配属は不可能となり、全く予期していなかった労働省への配属が決定し、現在の職訓で活動することになった。

そうした状況の中で、私は私なりに活動の体制を整えて来たつもりである。たとえ条件が満たされないものであったとしても、その中で微力を尽くすことが私の務めであると考えていたし、何よりもその時点では「とにかく活動の場を得ること」が最優先であった。

ベントールにおける私の立場は、当初極めて窮屈なものであった。結局私がここでとりうる方針は「課外活動」としての位置づけで仕事をしていくことであった。

正規のコースとして灌漑コースを設置し、生徒を預ることができれば、ここでの活動体制は完全に整う訳であるが、この職訓の性格上、そこまで踏み切ることがはたして妥当といえるかどうかは問題である。もちろん私の側からすればきちんとした形をとりたいが、私にとっては少々窮屈でも、稲作と野菜コースを側面からサポートするのが、この職訓にあっては妥当であると考えた。従って活動していく上で不満足な点が、いろいろ生じてくるであろうことを十分承知しつつ「がまんしてあせらず気長にいこう」と腹を決めたのである。そう腹を決めてしまえば条件が限られているとしても、それなりにやるべきことはいくらかでも見い出せる。

しかし今後の協力隊活動を考える上において、実際問題としては、後統隊員の派遣をどうするかとなると、私1人の問題ではなくなる訳で、ましてや先発隊員として着任した私にとって、遠い将来の展望に沿った大局的な見方をしなければならぬことが要求される。

そこでまず、ベントール職訓における農業土木隊員の協力隊活動について、リベリア国全体の状況と関連づけて私なりにまとめてみたいと思う。

今後の活動をどのように持っていくかということについて、次の3項目をあげてみた。

①灌漑コースを正規のコースとして開設する。

②既設の稲作・野菜コースの中でローテーションを組み、各コースに順じた基礎的な灌漑指導を行なう。

③当職訓への農業土木隊員派遣を打ち切る。

①について。

農業関係の訓練の他に「Vocational Course」がある。この中に灌漑コースを設けるということである。形としては一番すっきりしており、活動もやりやすく、わりとまとまった活動ができるだろう。

しかし、それでも問題がある。それはこの職訓の設立のねらいは卒業後それぞれの田舎に帰り、所謂「百姓」として一本立ちし、地域の農業発展に貢献できる人材を育てることにあるということである。田舎に帰り農業をやるにあたっては、大抵の生徒の場合がゼロからの出発ということになる。ニワトリを飼うためには小屋作りが必要だし、テーブルを作ったり、ちょっとした農機具も作る必要が出てくる。はだか電球のひとつもとりつける必要がある。そうしたことのための技術指導を行なうのが、この「Vocational Course」なのである。

従って将来その方面の職業につくことをねらいとして、生徒の訓練指導にあたるものではない。たとえ電気や板金関係の隊員が派遣されたとしても、その隊員の技量を満身に活かすことは出来ないだろうし、隊員の十分な活動の場としてもふさわしいとは思われない。その程度のことは、現地の人で十分にカバーできることである。

農業に直接関係があるとは言え、農業土木についてもそれは言える。我々の目的は現地技術者の育成にある。だとすれば、こうした中途半端な所での活動よりは農業土木技術者養成のための職訓（リベリアにはそれに該当するものがない）で教師となるべきであろうし、農業省の若手専門技術者（もしくは志望者）をカウンターパートとして地域農業開発に協力・活動を行なうべきであろう。そうすれば隊員としても存分な活動が出来るし、それはリベリア国にとってもっとも有効な協力隊活動になるはずである。

残念ながら私の場合、着任した時、そうした受け入れ体制が全くできていなかった。リベリアの協力隊活動に関して言えば、こうした活動以前の調査確認不足が最大の問題点であった。しかし今さら過去のことをとやかく言ってもどうなるものでもない。後続隊員がその技量を十二分に発揮し得る活動の場を準備することは、先発隊員としての義務でもあると考えている。

話がいつの間にか③に及んでしまったが、①についての結論を言えば、コース開設の必要性はないということになる。なお職訓側としてもその意志が

ないことを確認している。

②について。

私の当職訓における活動がこの②に順じている。客観的に判断して、職訓の生徒の指導方針から考えれば、②が一番妥当であろう。稲作、野菜の教師としてローテーションを組みながら水田灌溉、畑地灌溉等を指導していく方法であり、職訓側としてもこれを望んでいる。しかし、私のようなこうした活動が好ましいかどうかは疑問である。フィールドワークは担当するが授業はもたない。生徒を単なる労働者として考えるならばそれでもいい。それでもなくてもフィールドワークを通じての指導方法は、いくらでもあるだろう。しかし教師でありながら授業をもたないというのは、隊員にとり実に窮屈なものであり、また生徒にとっても片手おちで好ましくない。

必然的に夜間授業を行なうことになる。それで一応の体制は整ったとしても、これらは全て「課外活動」でしかない。

一度や二度は耐えて乗り切らねばならないことである。技術的な問題よりもむしろそれ以前の問題で苦勞が多いであろうことは想像にかたくない。それでも、そこに協力隊ならではの活動の意義を見出すことは十分可能であると思う。

Bentol 職訓での実質的な活動を打ち切ったとしても、出来れば協力隊と当職訓との間接的なつながりは継続される方が望ましい。それは卒業して田舎に帰り農業に従事する職訓OB達との接触をもつということである。そうすれば彼らの農業開発を実際的な側面から援助・協力することも出来る。農業土木とは本来そうした形のものである。

何も無理して大きなプロジェクトを手がける必要はない。むしろカウンターパートをひっぱり回しながら、ミニプロジェクトを着実に成功させていく形をとる方が、この国の開発のあり方から判断すればマトを得ていると言える。

現に教育省の方では、大型プロジェクト構想は、結果的に成功困難とみてミニプロジェクト構想を打ち出した。こうした姿勢が出てきたことは、大いに注目すべきことである。とすればミニプロジェクト構想は協力隊にとり、格好の活動の場となりはしないか。そしてリベリア国にとっても、それはより現実的な問題であり、結果的には大きな成果をあげることになるだろう。いずれにしろ農業開発、教育開発といったものは、長期的展望にたった考え

Bentol での農業土木協力活動

方を抜きにしては考えられないということになる。

③の結論としては当職訓への後続隊員派遣は打ち切るが、間接的な接触を保ち、側面からの協力体制をとっていくということである。

以上、当職訓の現状、活動のあり方、今後の見通しについて述べてきた。

●今後の活動方針。

最後に私の N. Y. T. C における今後の活動方針を述べて、今回の報告書を終えることにする（なお今年2月から開始した N. Y. T. C での気象観測結果は、次回の報告書でまとめる予定です）。

①今年造成したテラス式畑地の乾期における灌漑用水確保のための井戸掘り—国連機関のひとつである A. D. P (Action for Development & Progress Agency) Office の Director と交渉し、手押しポンプ一式（約800ドルに相当）をタダでもらい受けることにした。A. D. P の手押しポンプは、本来飲料水確保のために使用することが条件であったのを、特別に提供してもらうことにしたのである。

②新水田開発—現在ヤシの木等の抜根作業を行なっている。このあと圃場整備に移る予定。

③乾期における水田灌漑用水のための貯水池（小アースダム）作り（予定）。

④夜間の授業と土曜日の実習。

水田灌漑・畑地灌漑の方法と計画

圃場整備計画

流量測定・計算

貯水池の計画・施工

平板測量

（注：以上は中間報告書）

日本に帰って考えること

猪之鼻 謙 志

1982年正月。3年振りに迎える日本での正月であった。年末ぎりぎりまで仕事に出て、この3ヵ日を終えると今年の仕事の続きが待っている、そんな中での3ヵ日間。

上京してきた弟を交えて、兄弟で静かに新年を迎えた。

新年にあたりそれぞれの思いが出会う。

私の思いの原点は何かと言うと、それは言うまでもなく「リベリアでの2年間」であった。

正月2日の明治神宮への初詣。

参道は黒山の行列であった。何百万人という人々の思い、願い、決意が慌しく1ヵ所に集中する。こうして慣習、大衆の力が善きにつけ悪しきにつけ現在の日本の社会を永々と築き上げてきたのだらう。

今年の正月、私は、シエラレオネからリベリアにかけての国境地帯を1人黙々と歩いていた。これまで過してきたリベリアでの活動を顧み、残り少なくなったリベリアでの活動をどの様に消化していくか、そして私自身の今後の生き方は、などと言った事を考えながら、35℃を越す乾期の大地をひたすらに歩き続けた。苦しかった。

木蔭で棒のようになった足を休めていると、見も知らぬ現地のオッサンが私の為に、わざわざ裏山からオレンジをもいで持ってきてくれた。嬉しかった。ありがたかった。

おかげで疲れた体に活力が戻り、目的地へ向って再び歩き続ける事が出来た。あのオッサンの事は、一生忘れないだらう。

そして、あの今年の正月の体験が私のリベリアでの活動を凝縮しているように思われる。結局、何をやるにも、全て自分の足で歩かざるを得なかった。苦しかりょうが、つらかりょうが、自分で歩かざるを得なかった。走ってしまえば独走になり、歩くことを放棄すれば何も生まれはしない。

歩くことが大事だった。しかも、歩くことも疲労を伴った。だから、確実に道端で憩うことが必要であった。そうして初めてオレンジを口にできる

状態が生まれてきた。

オレンジを口にした時に、何か爽やかで熱いものが体中を駆けめぐり、たちまちそのオレンジは感謝の涙になっていた。

リベリアの活動で私が恵まれていた点は、ベントールという首都モンロビアから約30マイル奥地の田舎で生活できたことである。

「衣食足りて礼節を知る」という諺がある。私見だが、田舎では、「衣食足らずして礼節を知る」人が多かった。逆に首都では、「衣食足りて礼節を知らぬ」人間（富者・権力者）「衣食足らずして礼節を知らぬ」人間（貧者）が多かった。こうした都市部における荒廃こそは南北問題がかかえる大きな歪の現われであると思われる。

北側の、所謂「便利な物」を北側の感覚で持ち込んでいないはずがない。

援助とか協力のあり方は一步間違えば逆に恐ろしい結果をもたらすことにもなる。従って現地の実情に則した判断が不可欠なものとなるし、あとは失敗を恐れぬ覚悟で行動していくしかない。

私は、リベリアへの最初の派遣隊員の1人であった。そして私達が帰国した後、新たな隊員の方々が派遣されたばかりである。

私達の時よりは少なくとも受け入れ体制については問題はないはずである。しかし、私達とは違った困難が多いだけに頑強な隊員が要求される。

私は、今、日本、日本社会の中で社会人1年生として農業土木技術職に従事している。多少の怒りは今だにぬぐえないが、仕事上の困難さや多忙であることも「リベリアの2年間」の事を考えると、明日へのハリが出てきて、「なにくそ！」という気持ちになる。

リベリアで活動を始められた隊員の方々とあの国のことをじっくりと語り合える日を楽しみにしたい。私としても今度はさらに成長した形で途上国の人達と汗を流してみたいと考えている。

慌しい正月3ヵ日を終え、今はまだ多忙な毎日を、気が滅入りそうになるとリベリアでの2年間を思い起こしながら過ごしているところである。

猪之鼻隊員の報告書を読んで

安養寺 久 男

灌漑・排水事業の計画とか施工に携わる機会の多い農業土木隊員の中にあって、猪之鼻隊員は訓練・教育機関が活躍の場となっている。当初、同隊員は農業省へ派遣されたものの、受け入れ側の事情により労働省へ配置換えとなり、西ドイツの援助で設立された農業者養成のための職業訓練所の中で、自ら活躍の場を作り出している。その努力の数々を、彼の報告書から読み取ることができる。

とくに、赴任国の事情に疎い赴任直後にあっては、配属先とか任務内容の変更とかの農業土木の技術的な問題以前の苦勞は、同隊員に強い精神的な苦痛を与えたものと思われる。

しかし、この最初の大きな難関を突破した自信が、彼のその後の精力的な協力活動を支えていることと思われる。

当然のことながら、個人で行なえる協力活動は限られた範囲にならざるを得ない。彼は大規模な開発よりも、むしろ、小規模でも地域に密着し、地域農民の生活向上に役立つ開発こそ農業開発の出発点であると認識している。彼はこの堅実な協力活動の規定のもとに、訓練所内において活躍の場を作り出している。

同隊員は訓練生と共に、小規模ではあるが圃場を整備し、農地を造成し、更に、水源を確保するための工夫をこらすなど、農業土木の中でも生産の場に直結する重要な工事を行なっている。それらを実施する過程で、ガリ浸食、過剰水の排除、承水路、テラス造成、法面保護などの多くの問題に遭遇している。ともすれば、目標不達成の理由を機資材の不足等に置く風潮があるが、彼は全ての物資が乏しい中にあるにもかかわらず、柔軟な対応と創意工夫により問題を解決している。色々の状勢の変化に対応して、柔軟に対策を考え、創意工夫により問題を解決していくことが、とくに協力活動に携わる農業土木技術者に要請されるものと思われる。

更に、彼の活躍は農業土木の夜間コースの開設にまで及んでいる。彼はこの活動を通じて、発展途上国においては、技術の移転以前に教育の普及と浸

透の重要性を痛感している。授業科目は灌漑・排水学、水文学、数学などであり、農業土木の重要な科目である。実習では平板測量と水準測量を取り上げている。更に、彼の努力は教材用のスライド作成にまで及んでいる。マレーシアに派遣された女性協力隊員が、家庭科の本をマレー語に翻訳し、それが教科書として採用されたとの新聞記事を読んだが、彼のスライドも長く教材として使用されることを期待する。

彼のその精力的な協力活動の中から、我々は技術協力に対する重要な示唆を読み取ることができる。農業開発の出発点はその地域の伝統的な農法の把握理解であり、地域農民の生活向上に役立つ地道な農業開発の必要性であり、段階的な技術の移転などである。また、何によりも発展途上国における教育の浸透の必要性である。

猪之鼻隊員は農業者養成のための職業訓練所での協力活動を終えるにあたり、同職業訓練所への農業土木の後続隊員の派遣をちゅうちょしている。彼は非常な努力により、訓練所内に活躍の場を作り出したが、やはり、農業土木という専門分野を持つ隊員にとっては、農業土木技術者の養成所とか、灌漑・排水事業への参画とかが、より効果的な協力活動につながるものと思われる。

最後に、猪之鼻隊員のリベリア国ベントール職業訓練所での精力的な協力活動に敬意を表したい。

(協力隊技術専門委員)

将来の職訓モデル校で活動して

総合・第2号報告書

派遣国 リベリア

職種 工作機械

氏名 大場 清 孝

配属先 Monrovia Vocational Training
Center

(Ministry of Labour, Youth and
Sports) (モンロビア職訓)

大場隊員の略歴

氏名 大場 清 孝

生年月日 昭和30年7月1日

出身地 静岡県

職種 工作機械

派遣期間 54年8月～56年8月

<はじめに>

リベリア自体に対し、好き嫌いといった感情はなく、生きていくには、どの国でも同じであると思った。真っすぐな意見を持ち、相手の意見を尊重し、相手国の文化・習慣に対し理解することを怠らなければ、相手は必ず好意を持って接してくれると思う。

生活面において首都モンロビアでは衣・食・住・衛生・交通など、こちらで十分な注意を払えば、さしたる不便は感じないが、一部の警官・兵隊・教育が十分でない人のモラルやマナーの悪さにより、不愉快になることはしばしばある。

仕事の面においては、リベリア政府の財政難により建設が遅れ、特別調達庁(G.S.A)を経て、モンロビア職業訓練所に配属となった。全般を通した反省点をあげれば、配属先上司との Communication が少なすぎたことであった。

また、協力隊事業に参加したことは、日本が技術協力を力を入れ、自分のような未熟な青年の要望に対し、海外に派遣させてもらい、2年間の貴重な体験と、多くの人との出会いおよび話ができただことは、多大なる自分の財産となり今後の肥やしになっていくと確信する。

そして、帰国後は、故郷にて就職をし、まだまだ技術的に未熟である小生は、今後の3年間の目標として、同世代の人達が持つ技術レベルに一步でも近づく努力をしていきたい。

しかし、そのような目標下においても、協力隊活動を後援する一社会人としての気持は忘れず生きていきたい。

以下、順に「リベリア人」「衣」「食」「衛生」「交通」「2年間の協力活動」「所感」について報告する。

I リベリアの生活事情

a. リベリア人

米国ドルを使用し、持ち出しが簡単にできるこの国では、多くの外国人が働いている。リベリア人経営の大きな私企業となると稀である。大きな私企業は米国、西欧人がトップの座を占め、大半の輸出入の商品活動をレバノン人が行っている。ガーナ人は教育面や会社で中堅として働き、漁民も多い。

また、ギニア、シエラレオネなど隣国からの労働者も多い。

元来、英語の Native Speaker でないリベリア人は、一般的に独特の発音・アクセントを持ち、簡素な会話を用いる。リベリア人同士の会話時には、数多くの Slang が飛びかう。Slang の意味を聞きいっしょになって用いると、また、楽しい。同じ部族の出身者同士の会話は、その部族の言葉を用いることが多い。

リベリア人の平均的身長は、日本人と変わりなくいっしょに並んで歩いても気にならない。幼少時代より男女ともくだもの一杯入った籠を頭の上に乗せて歩く。姿勢はよくなるのだが、体の成長を止めるのではと心配するのだが。

リベリア人は東洋系の人に対し、空手man=強い人という印象を持っているが、これは街に氾濫する空手映画より来ている。東洋人に対しては、車、電気製品の進んでいる国と、原爆が落された国という印象を持っている。

外国人に対しては、一般的に親切である。しかし、一部の人達の行動により、リベリア人に対する印象は悪くなっている。彼らは全ての外人 = Big Man = 金持ちと考えている。例えば、普通のリベリア人ドライバーなら注意ですむようなミス——交差点や道の途中で進路変更するとき、方向指示器の出し忘れ——を警官、兵隊が見ていたら、違法を認めさせ、金をねだろうと話しかけてくる。また、自動車を映画館やマーケットの前にとめた時の子ども達のねだり、泥棒に4~5回続けて入られた邦人宅など、生活上、外人であるためにいやな面もある。

リベリア人と、待ち合わせをするときには、30分~1時間待っているべきだ。時計を持っていない人は多いし、交通の便が悪い所に住んでいるかも知れぬ。遅れて来たら理由を聞くのを忘れてはいけない。来なかったら、次に会った時本気になって怒らなければならない。

また、多くのリベリア人は正規の学校のほかに Country School に半年とか、1年間入る。授業料はなし。Bush の中に入り、自分の部族の習慣、ダンス、サバイバルの方法を学ぶ。友人の1人は Country School の中で、どの草がどの病気に対し有効であるかを学んだという。彼は30歳を過ぎたにもかかわらず、病院には行ったことがないそうだ。彼の息子も娘にも Country School には行かせたいと言う。そして、魔力を持った人——Witch Doctor やジュージュウMan——や魔力を信じる人もいる。

b. 衣

少し動いたり、歩いたりすれば汗は出てくるが、半袖、長ズボンでよい。女性は頭にスカーフ、上はTシャツ、下は布を巻いている。男性は半袖、長ズボンである。サファリー風の上下の服を25~30ドルで作れる。布地を3 yard (約12ドル) 買い、服屋にて寸法をとり、襟、ポケットなどの好みを言い、1週間後には仕上がる。どんな場所にも着ていかれ、便利である。シャツ、靴など衣類関係は質はよいといえないが、全部モンロビアにて調達できる。

c. 食

主食は Rice であるが、その他にヤム、キャッサバを細かく切り乾燥させたもの、蒸したものをついてもち状にしたフーフー、ダンペイなどがある。副食においては Green の摂取は少なく、全ての副食には Pepper や Bitter Ball が入っており、Palm Nuts より作られた、Palm Oil を使用している。味は非常に Hot であり、暑い気候を持っているこの国では絶対に合っている食事である。たんぱく源は、魚、牛、豚、鶏および鹿などの Bush Meat である。魚は Open Market で生や、乾燥させたり、塩漬にして売られている。Bush Meat は乾燥させてあり、おかずやスープの中の黒い肉である。しかし、3食ともリベリア食では胃がもたれるので極力夕食は家にて多くの Green を摂取するとともに、味はあっさりとしたものになった。

また、くだもの豊富なことは、リベリアの生活を楽しくさせてくれた。サワサワ、プラム、マンゴ、パパイヤ、グレープフルーツ、アボガド、ココ、パームナッツ、オレンジ、バナナ、パイナップル、アーモンド、コーラの実などである。くだものは安くて、新鮮でおいしいし、買うときも楽しい。

初対面の人の「どのようにリベリアが好きですか」という質問には、「いろいろな種類のくだものがあり、それらを食べることが、楽しみの一つだった」と言っていた。

d. 衛生

注意することは、生水は飲まず、煮沸した水を飲むこと。モンロビアの水道の水をそのまま飲み続け肝炎になった日本の電気メーカーの人がいると聞く。水道の水には有機物や多くの鉄分が含まれている。蛇口に布を付け、1週間もたたぬうちに布は茶色になる。

マラリアには、幸運にも2年間かからなかった。これは、エアコン付の住宅に住み、1日中窓をしめ切ることができたことと、家の近くには海、川、

沼地はあったが、沼地なども満潮、干潮により水が入れかわったため、蚊の発生も少なかったと思う。しかし、このような環境下に住むとはかぎらないため、蚊帳の携行はすすめる。

また、切り傷の治りは悪く、ヨードチンキをつけないとすぐ化膿した。歯を抜いた後も化膿して困った。

よく使った薬品としては目薬がある。理由は、バイクの運転中に空気中の浮遊していたゴミや砂が入って来て疲目のような状態になった（12月中旬よりハマターンも吹く）。

娯楽施設の少ないリベリアでは肉体的、精神的に健康状態を保つには努力がいる。フラストレーションが蓄積してくると、ランニングをし、汗をかき風呂に浸かるのが簡単な解消法だった。週末にはテニス、スカッシュを行なった。テニスはコート探しが大変である。海は荒れて、日光浴程度だが、気分転換にはよい。また、カウンターパートが卓球台を持っていたので、家に行き楽しんだ。

e. 交通事情

モンロビア市内は、タクシーが常に走っており便利である。しかし、自分の住んでいた場所は、バスの終点より5kmぐらい離れた所にあり、バイクが無かったら、どうしようもない状態であった。しかし、運転時の道路事情は悪条件が揃っている。運転者のマナーは悪く、その上方向指示器が壊れている不整備の車が多い。道路状態は、水道工事の埋設作業がよく行なわれ、その後の処理が不十分のため、溝ができたままである。未舗装道路は洗濯板状の道路であり、舗装道路でもアスファルトと土の間に水が入り、すぐ穴ができる。昼間では、くぼみや溝は見つけられる。が、夜は照明も暗く、転倒しやすい。やはり、駐住接近で、タクシー、バスの利用が絶対であろう。

f. 2年間の協力活動

最初の10ヵ月は General Services Agency (G.S.A 特別調達庁) の Motor Pool の Machine Shop へと出向いた。一部門である Machine Shop Section の6名を受け持つ。Machine Shop には、2台の旋盤とボール盤があったが、全く使われておらず、掃除と整理から開始し、Lesson Plan と不足分工具の一覧表を提出した。授業には、半数の3名位の出席であった。エンジンのオーバーホールなど Machine Shop の外で正規の仕事を持っており、忙がしいためであった。

将来の職訓モデル校で活動して

測定工具の読み方、使い方を終え旋盤の修理をした。3相220Vの線を他の建家より埋設して引き、旋盤のヒューズを交換した。その後は、旋盤を用いた実習を行なった。G. S. A. でのこの期間は、自分自身の技術研修を行なっているといった方がよかった。対人関係としては、近所に住む3人がときどき訪問してくれた。

1980年4月のクレーター後、主たる活動はなかったが、6月中旬より本来の配属先であるモンロビア職訓へ参加した。カリキュラム、Training Elementを作り世銀ローンより購入機材の分配、仕様点検、消費材料、教材の一覧表の提出、臨時開校(10週間コース)のための準備が主たる仕事であった。職訓での対人関係はG. S. A.の時代に比べると、働きやすい雰囲気があった。具体的には、自分のカウンターパートである、Senior Instructor や Assistant Instructor, Shop Attendance が、仕事を進めていく上で、意見を尊重してくれたし、自分の至らない英語を理解しようとする努力が彼らの態度に表われうれしかった。彼らは、遅れた時、休んだ時、次の日用事があり休まなければならない時など連絡をしてくれた。また、Shop Attendance は今年の4月より参加したのだが、給料がまるまる3ヵ月間もらえなかった。その間は、みんなで金を出し合い昼食を食べた。Shop Attendance も家から、バナナ、プラム、ココ、サワサワをときどき持ってきた。

私的にも、ブキャナへ2泊3日で行ったりした。また、カウンターパートが卓球台を作ってから毎週家に遊びにいった。

g. 所感

首都モンロビアで生活したことは、断水、停電、泥棒、スリなど問題はあがるが、途上国の中の先進国で生活したようなものであると思う。

また、外国で生活する際の要領も自分なりに数多く知ることができた。笑って誤魔化すことは避けた方がよい。相手が真面目に聞いている時、会話の意味が解からず、笑ってしまうと、相手はひどく怒った。

飯、ビールの Serve の仕方は、Give and Take が基本である。トランプの遊びを教わり、そのコーチ料としてビールをいっしょに飲むとか、料理を作ってもらい、飲み物は出すとか、何かを手伝ってやり、飲み物を出してもらおうとかである。

最後に、リベリアでの生活は微力であったが、リベリア人との交際を深めることができ、文化、習慣を自分なりに少し理解でき、また、黒人に対す

る異和感も取れ、有意義なる2年間であったと願みる。

モンロビア職業訓練所について

要旨

添付の写真が示すように建設は徐々に進んでおり、今年度末には全てが完成するだろう。現在、リベリアの学生が学校を卒業しても職がないという問題は、理想的なシステムをもつ社内研修所代りのこの職訓においては存在しないはずだ。しかし、現状は会社側が従業員を送りたいコースは一部にかたよっているという。その上、職訓において貧弱な訓練を行なえば、同じ会社より第2次の訓練生は望めなくなってしまう。

これを打破するためにも、また、モンロビア職業訓練所がリベリアにおける職業訓練のモデル校として存在するためにも要請のあったコースについては隊員を派遣し、より充実した密度の高い訓練に持っていかなければならないと思う。

では、下記の順にて職訓について報告をする。

1. 職訓の概要
2. 活動について
3. 所感
4. 添付物 (1) 職訓の写真 (1981, 6, 22撮影)
(2) 臨時開放(10週間コース)を報道した新聞(注・省略)。

1. 職訓の概要

モンロビア職業訓練所はリベリア政府への第3回世銀教育プロジェクトローンにより1977年に設置され、現在の管轄省庁はNational Youth and Sports Commission である。

現在も添付写真が示すとおり、建家付帯設備など建設中である。しかし、今年末には建家、付帯設備、機材の据付、試運転などが終わるであろう。

また、今年の6月初旬より手作業を主体とした臨時の10週間コースが始まっている。このコースはあと2回行なわれる。正規の訓練が始まれば、12コースにおいて年間最低120名の Apprentice Ship Training と最低70名の Up-Grading Training への参加が可能である。そして、職訓内での訓練の約80%は実技、約20%は理論である。

将来の職訓モデル校で活動して

この職訓の特徴として次の2点があげられよう。

(i) 訓練方式(標準化されたカリキュラム)

(ii) 生徒募集方式

(i) 訓練方式

国際労働機関(I.L.O)の職業訓練に対する構想が取り入れられているということである。

一つは、各コースにおける知識(技術)を四つぐらいの単位に分けるモジュール化。

他の一つは視聴覚機材の利用。

モジュール化とは、このモジュールの技術と理論を習得すれば、一つの職種として会社などで働くことができる、そのコースにおける小さな単位を示すものである。

具体的に機械コースの例をあげれば、手作業、旋盤、フライス盤、形削り盤と研削盤の四つのモジュールに分かれており、四つのうちの一つでも習得すれば仕上げ職人、旋盤工、フライス盤工、研削盤工のどれかで働くことができる。

このモジュール化によりすでに働いている人のための短期のUp-Grading Training が可能である。すでに旋盤工として働いているがUp-Gradingのため、3ヵ月間旋盤のモジュールを職訓でApprentice Ship Trainingの人達と共に受けるなど。

また、この職訓には独立した視聴覚教室が備えられており、短期間に効果的に理論などを教えることができる。そして、視聴覚の利用の仕方や教育方法について、12コースのシニア・インストラクターはイタリアのトリノにあるI.L.O トレーニングセンターで研修を受け、その後英国で実技の研修を受けている。アシスタント・インストラクターはエジプトで主として教育手法を学んでいる。また、1人のインストラクターはJ.I.C.Aの研修を八王子で受けている。このように海外で研修を受け、実際に機材に接してきた人が多い職訓ならではの特別教室だろう。

そして、モンロビア職業訓練所の一つの建家が計画省に属する、Agriculture and Industrial Training Board (A.I.T.B)のOfficeになっている。A.I.T.BとはNational Council On Vocational and Technical Educationを運営しており、このNational Councilの主目的は職業・技術・

農業教育におけるリベリアの標準化訓練を行なうところである。

モンロビア職訓は、A. I. T. B のカリキュラム標準化構想 (I. L. O の構想を取り入れてある) に従っており、初の標準化された訓練校のモデルとして存在し、これらのカリキュラムや作業指導書が今後、リベリアの職業訓練における標準化のたき台になっていく。

(ii) 生徒募集方式

職訓は生徒の募集を行わず、National Youth and Sports Commission の一部門が会社・官庁を訪問し、理解と了解を得て訓練者を連れてくる。社内教育ができない分を職訓で肩代りしようという意味である。訓練者は所属する会社・官庁より在学中は後援され、その後の職も保証されなくてはならない。

会社、官庁より訓練生の参加方式は次の二つに分けられる。

(i) Apprentice ship Training

(ii) Up-Grading Training

かりに、あるコースが15名の定員とすれば10名を(i)より他の5名を(ii)からという構成になる。

(i) Apprentice ship Training とは

入社して間もない人達の Training で3年をもって終了する。第1年目は職訓においてそのコースにおける実技を完全にカバーし、必要最低限の理論をうける。2～3年目は各自の所属先に戻り、直接監督者のもとで作業をすることにより深い理解を得る。その後、A. I. T. B の作成した試験を受け、試験に合格すればそのコースに対する技術習得の証明書が与えられる。もし正規に職訓が動き出して一つのモジュールにて、与える知識・技術の量が少なすぎると判断した場合は、そのモジュールを二つに分け、増加分のモジュールは2年目もしくは3年目に訓練生が職訓に戻り学ぶことになる。

(ii) Up-Grading とは

この訓練はすでに働いている人達の短期間コースであり、職訓で行なわれている Apprentice ship Training の一つのモジュールに随時参加して能力をみがいていく。

次に職訓の組織は96頁の如くである。

ちなみに、カウンターパートであるシニアインストラクターの給料は税引き前において625ドルである。協力隊員の位置づけはシニアインストラクタ

一の上である。

2. 活動について

カリキュラムと作業指導書の作成が主であり、その他は世銀より到着分の機材の各コースへの分配、自分のコースの機材の仕様チェック、研修会への参加である。そして、今年の3月より下準備を始めた10週間コース（臨時開校）が6月初旬より開始された。

カリキュラム作成時の問題点はどのような課題を訓練生に作らせるか、機械が1台しかなく全員が課題を終わるには何時間かかるかという時間の振り分けと課題選びであった。

その後、作業指導書を作成したのだが、自分自身学校での実習と協力隊参加前の10日間の技術研修という貧弱な経験であったが、カウンターパートの実務経験もどうもあやしい。しかし参考となる本は豊富にあったし、教える前には必ず自分達で課題を作成し、より詳しい説明が必要な箇所や作業手順が抜けている箇所があるかどうかを調べ、あれば修正していくという合意のもとで作業指導書の作成は進めた。

この指導書の完成度は全体の3分の2弱というところである。また、活動を行なうにあたっての環境をみれば対人関係で苦労することは全くなかった。海外で研修を受けた人が多いせいもあり、逆の立場になって考えてくれ、特にカウンターパートはそうだが他のインストラクターもとても親切にしてくれる。

問題といえば、現在住んでいるところが、職場より遠いということである。約20km離れている。これは交通事故にあう可能性を高め、膨大なガソリン代請求にも関連してくるのである。かりに、職・住が接近していれば、特にFree way 沿いであれば職訓のバスが朝・夕とも利用できる。

3. 所感

職訓にとって協力隊員が必要な時期は本訓練が開始されて1～2年間であろう。

実務経験が長い、知識が豊富な人がシニアインストラクターになっていて、作業指導書など間違いなく作成しているはずである。しかし、この経験年数と実際知っている内容は一致しないようだ。例えば4～5年働いたとい

っても一つの機械のみに精通していて、そのコースにとって基本的な機械であるにもかかわらず十分な知識を持っていなかったり、以前他の職訓で教えていた人もこの職訓のように実技主体の長い実習時間を使いこなすにはとまどいがあるはずである。

具体的に自分のカウンターパートをあげれば、旋盤におけるネジ切り、フライス盤における割り出し、研削盤と工具研削盤の操作などはあまりよく知らないようだ。極言すれば、自分のコースのように、元アシスタントインストラクターがシニアインストラクターに昇格したコース——規格、電気（配線）工事、水道配管、大工（この人は J. I. C. A の研修を受けている）などでも同じことが言えるかも知れない。

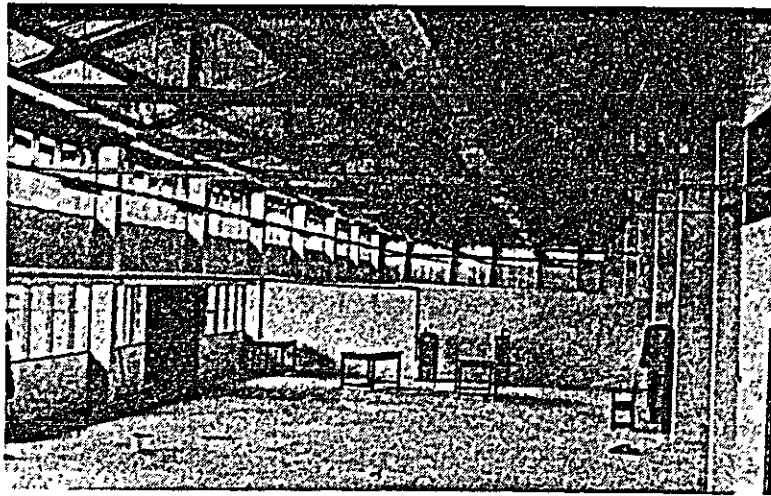
また、協力隊から職訓への特別機材の一覧表をみると、隊員なしでその機材を正しく運用してくれるだろうかという心配もある。

このような疑問を解消するためにも隊員の派遣は必要である。そして、次期隊員到着時には、電気もあるから、既製の課題に対し、実際に作って、作業手順の修正をしたり、もし、必要不可欠の実技が抜けていれば、それを補うことのできる課題を追加してやる。

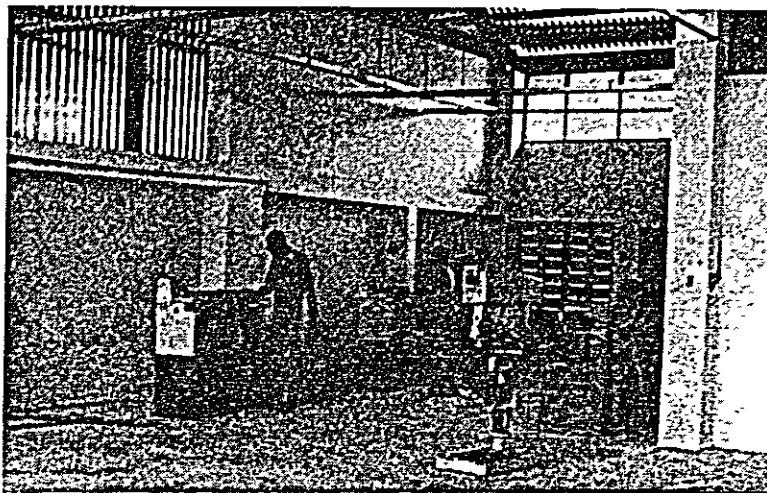
このような授業前の下準備の協力とともに、1年目は実技の時間に教壇に立ち、カウンターパートをオブザーブさせ、理論の時間はオブザーブする。

2年目は、実技の時間は、オブザーブして、理論の時間に教壇に立つようにしたらどうだろう。

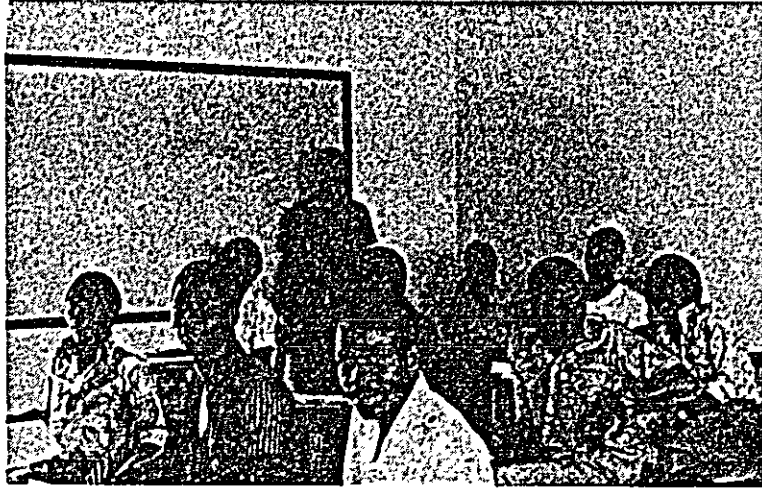
将来の職訓モデル校で活動して



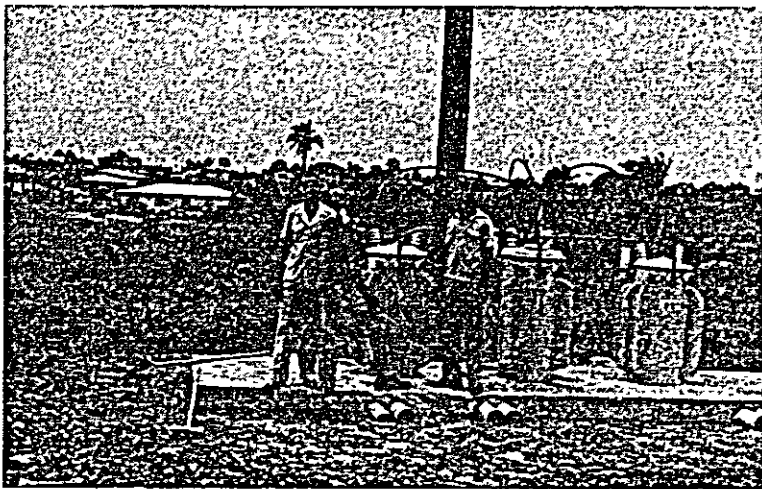
窓にガラスと鉄格子がないため、Store Roomに入る機材は全部その中へ。



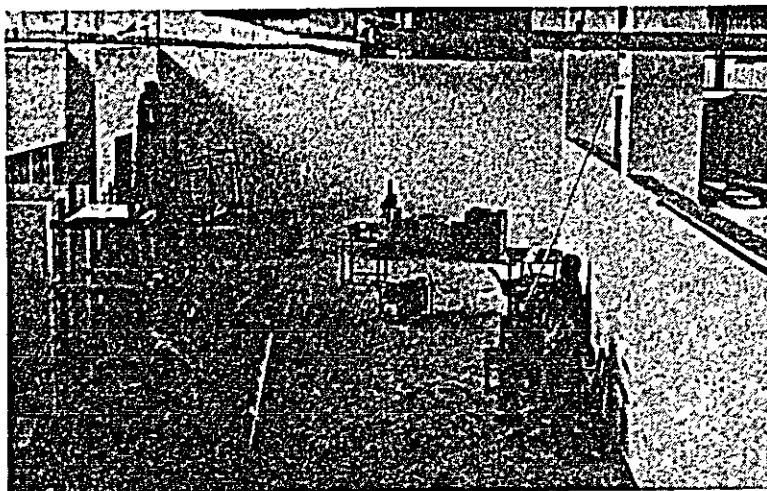
Machine Shop の模様。機械は置いてあるだけ。パイプは空気用。



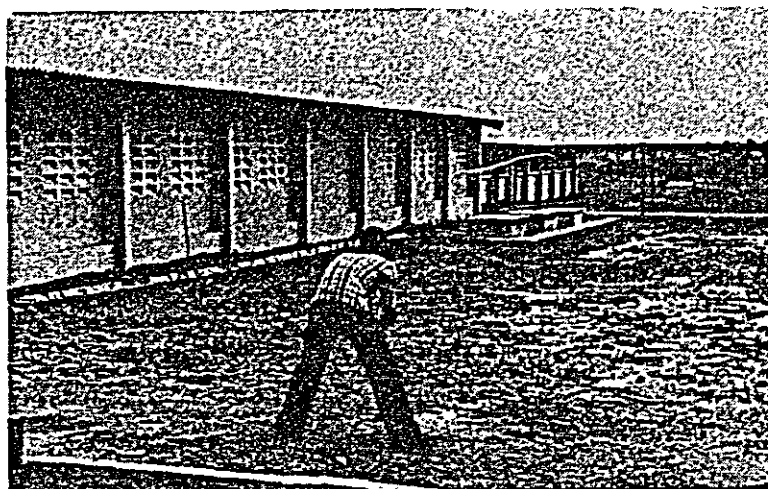
10日間コースの1 クラスルーム。



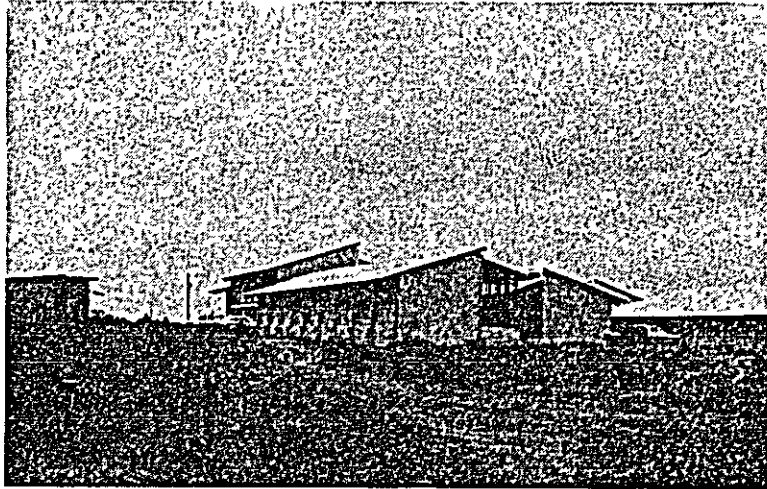
職訓の東側に三つのトランスが設置されている。



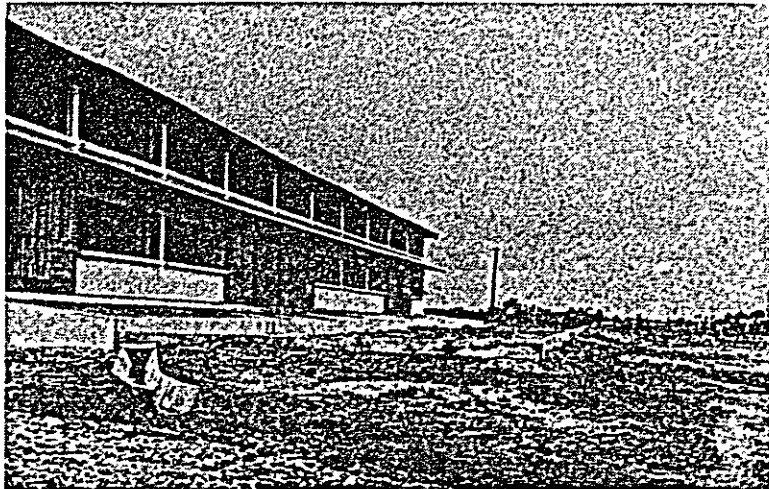
室内配線と蛍光灯の取り付け中。



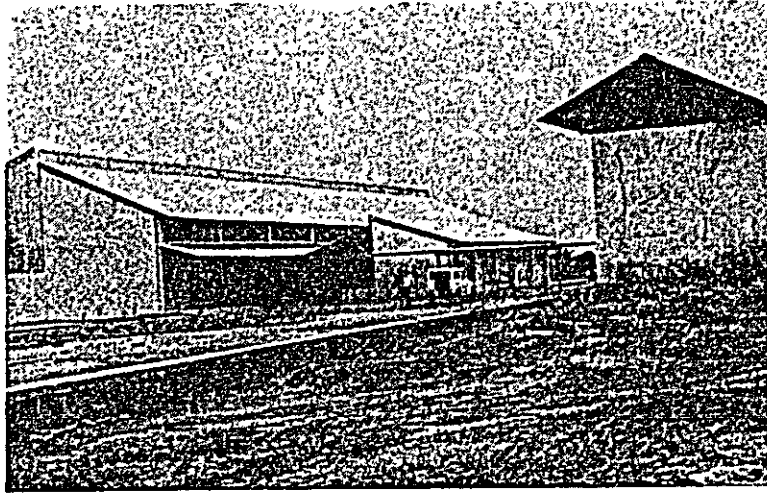
水道は地下を走り，地上には3本でている。室内の配管は，まだ。



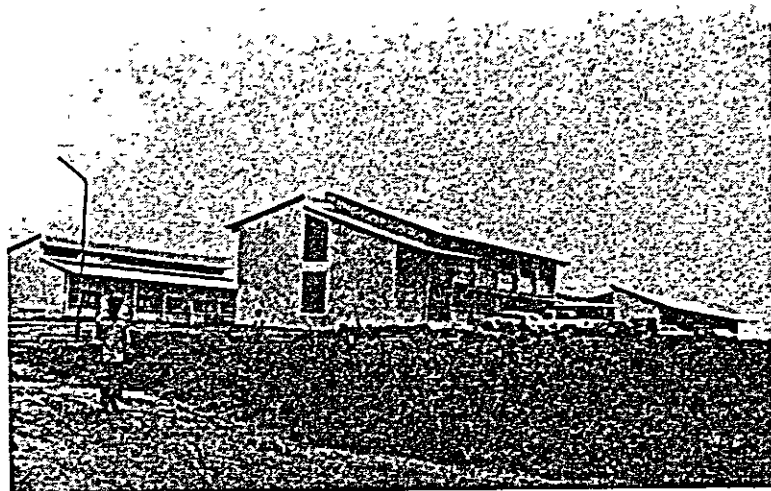
職訓のスタッフ宿舎とクラスルーム。



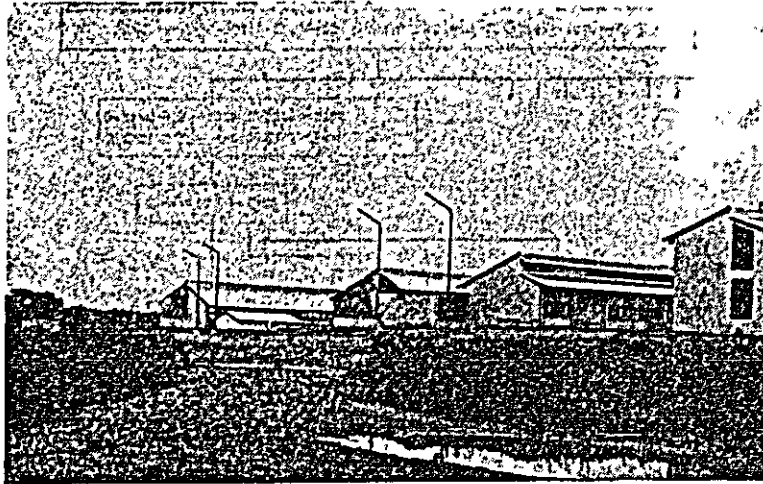
職訓の南側。窓は全く入っていない。昼食は電柱の右側で。



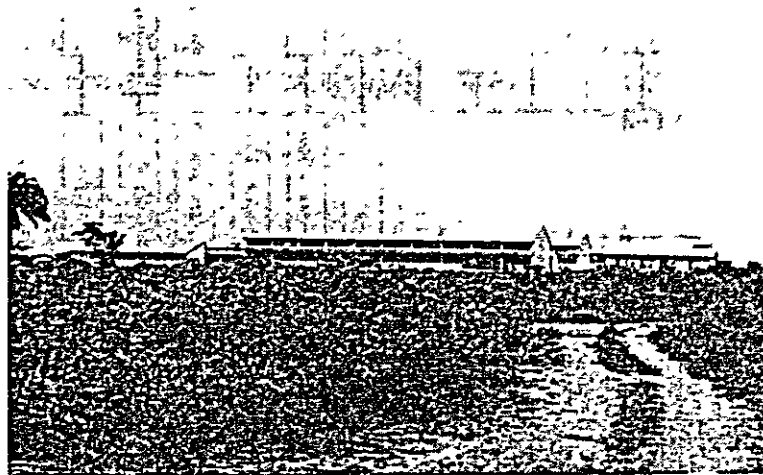
整地はこれから。



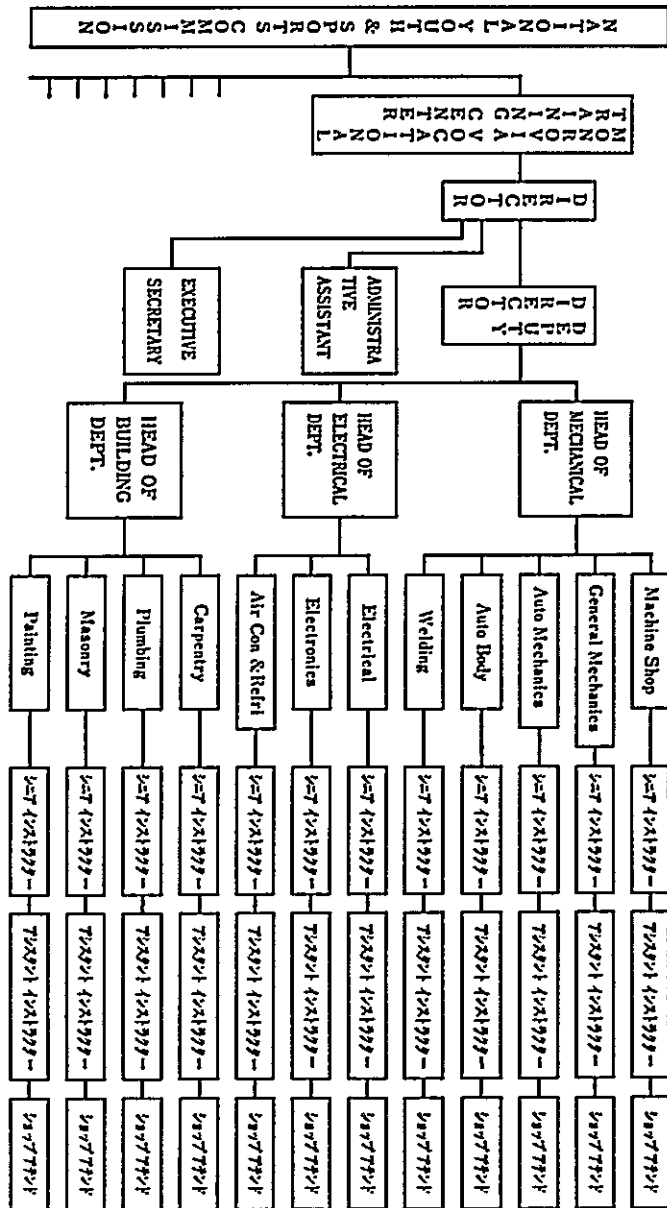
中央が、A. I. T. Bのオフィス。右側が職訓のスタッフのオフィス。左側が食堂。職員の送り迎えのバスがみえる。



左から、実習場、倉庫、実習場、調理場、食堂、オフィス。



職訓の南側。キャッサバの畑が手前に見える。



隊員活動を振り返って

大場 清 孝

月並だが、今、思えば本当に短い2年間であった。あんな事をすれば、あれをこうしていれば、もっと充実した活動が出来たのにと悔やむことが沢山ある。その悔やみは小生のどの様な行動・思考から来ていたのか、協力隊事業とは何かを自分なりに考えながらこの機会を借りて振り返ってみた。

協力隊事業を木に喩えれば、木は根・幹・枝・葉・実などから構成されるが、木が育つには太陽・大地・空気・水・栄養素などが必要である。実際には国民の支援、青年の参加、事務局の存在、受け入れ国の受け入れ状態、協力手法などが太陽であったり、大地であったりする。

実（支援によって成り立つ総合された活動結果）は短期間で実りもしないし、何かが欠けていてもいい実はならない。

また、受け入れ国を大地とすれば大半の国の土壌は栄養が片寄っていたり、不毛の地であったり、木があってもその地に不適であったりする。土地改良や品種改良を試してみたり、新しいさし木をしたりする時間を必要とする活動もあれば、栄養の量が不足しており、活動期間は元気な木になり、帰国後、一時的に栄養が不足ぎみになるが、活動期間に土の上に敷いた糞（カウンターパートの能力アップや意欲ある先生に教えられた生徒の自意識の開発など）が何年か後に堆肥となり木は栄養補給され活力を得ていく様な活動もあると思う。

この様な肥やし、堆肥作りの一見目立たない活動が多いと思うし、良い種やさし木が来て育つ良好な土壌作りになり、大変大切な活動であると思う。

しかし、小生の活動においていい堆肥作りは出来なかった。その原因はなにかを探ると同時に、小生がリベリアで置かれた背景について簡単に語る。

リベリア政府側の財政困難に起因する工事の遅れに伴い、活動は停滞した。職訓開校の為の下準備のカリキュラムや指導書作成にしても、あと1年、あと半年は絶対完成しないという雰囲気、安堵感がインストラクターの間で充満しており、全くのニクリズムであった。

小生もそれに同調し、便乗していた。流れの中に入ってしまい、本来の任務を失っていたようだ。緊張感やいい意味での対立が無い所に創造的なアイデアや意見は生まれてこないと言うのが本当である。「金が無い」「急ぐ必要が無い」「急いで終われば、仕事が無くなる」に対し、「はい、そうですネ」では今、ネックになっている問題をかみ砕くことも的確に把握することも出来ず、それをどの様な手段で解決すべきかの打策も生じてこなかった。

緊張感やいい意味での対立を生む為にも、自分の任務に対し愛着心を持ち、言い換えれば、常に、現時点での活動状態に問題意識を持ち、いかにしたらよりスムーズに、より充実した活動をリベリアのインストラクターと行なうことが出来るかを考えていく姿勢が欲かったと省みる。

この様な真剣な姿勢でのカウンターパートや配属先上司との衝突、意見の交換は絶対マイナスにはならず、その結果、2次的に生まれてくる交流や気持ちのふれあいは貴重なものであり、一生忘れない自分自身の財産になっていくものである。

小生、活動を振り返って悔やむ点はどこにある。現存する問題は自分の手に余るものを勝手に決め、調整員や他の関連する人々と効果的な相談や話し込みをせず、傍聴者的立場に立ったことが、今、一つの活動が曇模様になってしまった。逆に相談することにより、現存する問題点をより明確化することが出来、対策手段を考えることが出来ると痛感した。

最後に、真正面から壁に立ち向かわなかったという後めたさはあるが、協力隊に参加する以前よりのびのびとした自分を見い出すことが出来た。そんな不思議な協力隊事業が何故かしら好きだ。

大場隊員の報告書を読んで

高 島 信 也

大場隊員の報告によれば、カウンターパートを始めとし施設関係者との対人関係には恵まれ、十分なコミュニケーションのうえに日常生活を通じても協力活動が行なえたことが想像でき、するどい事情把握のうえにたった現地事情の紹介は、体験なくしては理解しがたい異国の食生活や国民性などを十分に知ることができる。これらの内容は後続隊員にとって貴重な情報となるでしょう。

また、短い報告の中でもこの体験が彼自身の人生観や国際観の確立に大きく影響していったであろうと伺い知ることができる。

ただ、非常に残念なことは、派遣された時期がリベリアにおける職業訓練システムの創設期であったことの他に、配属先の変更や政変さらには施設建設の遅延が重なり、工作機械の技術・技能面での能力を十二分に発揮した協力活動が展開できなかったことであろう。しかしながら、職業訓練システム創設期の混乱した中での協力活動は、隊員にとって大変荷の重かったことと容易に想像することができるが、それだけにこの時期の活動はある意味で大きな効果を持つものであり、将来の訓練の展開に大きな影響を与え、受け入れ国から相応の評価を受けるものであると思っています。一方、隊員自身においても、工作機械の技術・技能の指導経験のみならずこれを通じて体験した訓練実施上の種々の出来事（例えば教えることの難しさ、指導員や訓練生の心理）やいろいろな制約の中で身につけた問題の解決の仕方や物事への対応の仕方などのリベリアでの二年間の体験は、日本では得ることのできないものであり、これらが帰国後の活躍に十分生かされることと期待しています。

最後に、短い紹介の中から感じたモンロビア職業訓練所の訓練の展開についての感想を述べておきます。

本訓練所はリベリアにおける職業訓練のモデル校として位置付けられ、I.L.Oトリノ職業訓練センター等で研修を受けた指導員が多く配置され、訓練実施上の特徴として、モジュール方式の訓練の導入、視聴覚機器の活用を図っているところであるが、具体的な訓練を展開するうえでいささか次の点が

気にかかります。

多くの開発途上国での訓練についても同じことが言えますが、モジュール訓練や視聴覚機器の活用を大きく期待し、それが先走りすぎていないだろうか。訓練の目標の明確化や訓練対象者の知識の程度や実技面での能力の把握が十分になされていないのではないか。訓練ニーズに基づいた訓練目標の設定がなければ効果的にリベリアの社会開発に役立たないであろうし、訓練対象者の能力が正しく把握されていないとモジュール訓練や視聴覚機器活用による訓練の長所が生かし切れず、訓練そのものが形骸化しかねない。また訓練の効果を評価し訓練の充実に図ることも難しくなる。協力隊員に期待するのはもともと無理だと思うが、このような意味から、本訓練所に派遣される訓練生の所属企業等の生産現場の実態（工作機械の程度や使用状況、必要な技術・技能の程度さらには雇用形態からくる教育・訓練上の問題、処遇上の問題、産業界の要望等）について触れられていないのが残念だ。

訓練で扱う機械やそれに関する技術・技能は、一般的に万国共通・普遍的なものであっても、訓練の実施の段階になると、その国の教育レベル、産業雇用事情等多くの条件に大きく左右され、他国で確立された訓練方式に頼っても地に着いた訓練が実施できない場合がほとんどであろう。

今後とも、大場隊員の活動をベースに本訓練所に対する協力が一層充実され、リベリアにおける職業訓練が拡充強化されていくことを期待しています。
(協力隊技術専門委員)

自動車整備技術指導の2年間

総合報告書 (昭和56年7月29日)
派遣国 リベリア
職 種 自動車整備
氏 名 小 野 芳 裕
配 属 先 General Services Agency. Bureau
of Mobil Equipment & Vehicle

小野隊員の略歴

氏 名 小 野 芳 裕
生年月日 昭和26年11月29日
出身地 静岡県
職 種 自動車整備
派遣期間 54年8月～56年8月

はじめに

米月の5日にて、当リベリア共和国での協力隊活動が終ろうとしている。この2年間「時不待人」という四文字が美しく遶筆で書かれた、古いカレンダーに追いかけられ続けはしたが、そのおかげで自分なりに納得できた日々と考える。

客観的に今までの2年間の協力隊活動を振り返り、一点の終止符を打つ意味でこのレポートを書くことにする。

この国での活動を振り返った時、過ぎ去った日々は普通短かく思えるのが常なのに、自分にとっては一概にそうも思えない。想像の域を越えた様々な困難さと出会い、一喜一憂の日々が大部分であった為であろう。「意志有る所道は通ず」、この言葉に希望を抱き続けたが、思い返せば、相手によっては「意志は有っても石のごとく」といった虚しさを何度味わったことだろう。確かに私は今だに現世に存在する、その点から言えば努力の余地は有ったと推察する。だが万一の能力の範囲外の事と開き直りたい。なぜならば、これでもか!! これでもか!! と繰り返した日々、今自分自身で「よくやった、あれが私の全てだった」と心底思えるからであろう。加えて彼女との別れ別れの時が、私をして中途半端では終らせてくれなかったことも確かである。善かれ悪しかれ自分は当リベリア共和国に派遣されて本当によかったと考える。

では以下に具体的活動内容について書いてみる。

1. 私の立場

1979年8月当国に着任、そして今だアナカンの引き取りも終らぬうちからの General Services Agency(以下G. S. A.) Bureau of Mobile Equipment & Vehicle (略名 Motor Pool) への仮配属ということであった。当初期間は Monrovia Vocational Training Center (M. V. T. C.) が開校するのであろう1980年3月末までということであった。配属先の Director Anthony TOMP からの要請は、ここモータープールでの理論的フォローアップをして欲しい、その為に毎日講習を実施することになる。

まずは教室の設置である。部品が山積みされた部屋の掃除から始める。ここに来始め、まだ1週間と経たぬ時、私は背後から “We don't need you.”

という言葉が浴びせられた。振り返っても誰も私の方を見ていない。

教室が準備され、いよいよ今日からと教室へいってみると、太い角材3本でがっしりと釘づけになっている。雨の中傘をさして待つが、クラスへ来る者も無く手を貸してくれる者として誰一人いない。強引にその角材を剥がした日から私の“*We don't need you.*”との戦いが始まった。この言葉は最後まで、形を変えたにしろ、ごく一部に今だに残っているようにも感じる。私が同期隊員とは別にM. V. T. C.へ戻らなかった理由として、今だ戦訓での仕事は皆無であったことと“*We don't need you.*”その言葉に対し、「今に見ている」といった気概が存在し続けたのは2年間同じである。思いかえてみるに「やってみなくては分らない」「今にみている」この二つの言葉に何程、自分なりの“*なにくそ精神*”を燃やしたことであろうか。

正式にはトレーニングインストラクターと言うことであったが、事実は“*なんでも屋*”に等しかった、私としてはそれの方がずっと口出しがし易いという事もあるが、それでなければ、余りに厚い壁がいつまでも私とメカニック達との間にバリアーのように存在し続けたのであろう。

2. 現場の様子、内情

仕事の内容は政府所有車両（GVナンバー）の維持管理及び配車である。その為、現在取り扱っている車種は以下のごとくである。

- 日本車——日産、トヨタ、ダイハツ、三菱、ホンダ、東洋工業、日野、イスズ、スズキ、etc
- 米国車——シボレー（GM）、フォード、クライスラー、etc
- 欧州車——メルセデス、ベンツ、フォルクスワーゲン、BMW、ルノー、プジョー、フィアット、etc
- ソ連車——ニバ、ラダ、etc
- オーストラリア製、ブラジル製、韓国製、etc

タイプとしては乗用車が主体であるが、小型トラック、大型トラック、ジープ等も多量に入ってくる。その修理内容は板金塗装が5分の1、電装品関係5分の1、残り約6割が一般修理である。修理といっても目視点検と単体交換作業にすぎない。たまにエンジンオーバーホールがあったりすると私の仕事がどっと増すことになる。各部品のチェック、使用可能な物、摩耗限度に達している物。加工内容にしても、リッジリマーか、ポーリングか？

個々の物について説明しながら具体的に指導するが、なにしろノギス、マイクローメーター、シリンダーゲージ等の使用方法は教室で順序だてて教えても、少数点、分数を含む数の概念の無い者に教えるのは不可能なことである。計四回の正式要請、局内レター及び本人の直接面談にも関わらず“Next Time”で2年が経ってしまった。他の特色としては、このワークショップの人数が非常に多く、常に少しずつ入れ変わっているということであろう。今年に入ってから余計ヘルパーの数が急増し、その数のみでも21名を数える。がその内、将来を期待できる優秀な者は数少ない。しかし、その数少ない彼らはそれなりに職業訓練校も卒業し、今に到っている故、その基礎学力は十分と言える。

その為クラス及び現場での説明に関しても、楽しみながら聞いてくれるので説明する方も自ずと熱が入る。別な問題点としては、この国全体がそうなのであるが、G. S. A. もしかりで、その人事異動の頻繁なのに成す術を見失ってしまいそうである。当モータープールに私が配属された79年当時からいる者はメカニックを除くとカウンターパートのチャールズ・サマービルのみで、他の部署は全て入れかわり、今現在、サマービル氏自身もアシスタントダイレクターの Mr. Abu SHELIEF になった。もっと残念でならないのは Mr. Tanvy, Mr. Chales HARRIS といった優秀な者達が、優秀な故、中央局に配置換えとなり、本来の彼らの学んできた部門と関わりのない机上の仕事を行っているのを見るとがっかりしてしまう。従って今、この Motor Pool での技術指導可能な人はインストラクターの Mr. SHELIEF と私のみになってしまった。今年は彼一人で指導していかなければならないのだが、彼の場合、現場での技術指導など不可能に等しい。だからこそ、余計に中央局へ移ってしまった。Mr. TANNY, Mr. HARRIS がいてくれたら、安心なのにと考えてしまう。元来このモータープールはUNDPの協力の一つとして開かれたTEMOでのトレーニング終了者を集め、開かれた工場であるが、今に到ってはその面影を残す物は、こわれた機械に印を見出すか、セントラルへ移った、又は他のガレージへ移っていった人々の脳裏にのみ残っていることと考える。

3. サジェッション・レポートに関して

私がG. S. A. を去るにあたり、現状からの一步でもの前進を願い具体的

試案を含めた二回目のサジェッション・レポートを提出した。前回のサジェッション・レポートは現状に近いままの状態での改善策であったのに対し、今回は今後の G. S. A. が取り得るかもしれない援助をある程度考慮して書かれたものであることも確かであるが、根本的改善が実施されるべき現状である事も確かである。その為の一つの具体的案と、今後のその活用の仕方へのアドバイスとして書いたものである。

今年6月 G. S. A. Central の Deputy Director General Bramoh NELSON 及び Motor Pool Assitant Director Chales SUMMERVILLE が渡米し技術援助を UNDP, USAID に願い出ると同時に部品供給メーカーとのコンタクトを取ったという事実に対してのことであるが、その結果は今だ明確になってはいず、G. S. A. の一方的願望の域を脱していないようだ。がしかし、技術教育を含めた改善を実施しようとする方針には大いに賛成であり、是非うまくいって欲しいと願っている。だが私の今までに経験したうちより推察すれば、技術的フォローアップが本当に欲しいと彼らが考えるとは余り思えない。それより彼らが望んでいるのは付属の部分、金であり、機械である。昨年末以来、Assist and Director SUMMERVILLE が新規機材のリストアップを行っていたので想像を遥しく期待していたのであるが、それはあくまでも今回渡米した際の機材援助とその資金援助の為のものであった。だがそれ以前に我々が眼にした予算計画書の中には、資金援助の資金に作業員の給与が見積られているといった状況に関し、先の道程はまだはるかかなたなように感じてしまった。

中央とモータープールの実際の距離は10マイル程度であるが、この2年間その理解度には常に無限に感じられる隔りを味わい続けたように思う。推察する以外にその真意は得られないが、今このリベリアは先のクーデター以来、優秀な人材は非常に乏しいこともあり、多少の教育とコネクションの有る者は、ある程度の地位に容易に就ける。一つの例が G. S. A. Motor Pool の工場長である。彼は現ダイレクターの親族であり、ダイレクターの着任後、時を多少遅らせて今の工場長になった次第である。その技術的レベルはメカニック達の方が高いことも私は十分に知っている。このような現状故その地位確保に彼らの多大な熱意が傾注されていることも確かである。自分のプラスか他人のプラスかは以後大きな差となって現われてくる。もう1人の Deputy Director General Timetch THOMAS がよい例である。自らの米国研修は

決定したのに対し、私のカウンターパートの海外研修に一向に動かない。ちなみにその担当者が彼 Deputy D. G. THOMAS である。ともあれ今モータープールの現状からの少しでも効果が上がる改善方法が実施されたとしたならばスタンダードイゼーションが最前提であろうと考え、その旨今後の一参考案として考えてもらいたく、このレポートの作成を行った。

かって前 Motor Pool Director Anthony TOMP と経営顧問として改善に努力した Mr. Langer LAW そして私の三名で行なったスタンダードイゼーションを Director General Charles TAYLER とホンダの社長とが旧友であるということから、我々3名の案は全て水泡と埒し、Mr. LAW は G. S. A. を去っていった。でも私は今でも思い続けている。やはりスタンダードイゼーション以下の改善がベストだと。理解してくれる日が一日でも早く訪れ、モータープールが一政府官庁のワークショップに相応した作業場になってくれることを強く願ひ、講習の様子をも含めた報告書として提出した。

4. G. S. A. Motor Pool でのクラス

a. Group I. II.

このクラスでの内容は最後まで二桁の加減の計算で終わってしまった。というのは大分できるようになったので先へ進もうとすると、最初の頃教えた単純な計算をすっかり忘れてしまっている。それでも G-II クラスの内2名は少数点の計算が多少理解出来てきたようだ。だが G-I については 1, 2, 3, ……のとき同様に、0.1 とは……0.2 とは……といった具合の進み方であり例として《長さ》m, cm, mm, を教えてみるがもう歯がたたないに等しい。その点 G-II では $1\text{ m}=100\text{ cm}$, $1\text{ cm}=10\text{ mm}$, 又は $1\text{ cm}=0.01\text{ m}$ で、 $1\text{ mm}=0.1\text{ cm}$ とも表わされる。といった調子で進むが、この辺が限度でトルク、外径、内径の測定方法まで正確には到達できなかった。

b. Group III

このクラスでは小数点、分数割り算、掛け算と数えるが、分数の計算がどうやら一番苦手のようである。が応用として直定規、巻き尺を用いての長さ測定で、単位変換が時間は要するがなんとかやっていくといった調子であった。一度目、cm で読んだら、次は m でその次は mm でといった具合の繰り返しで多少長さや単位の概念を理解してくれた。

c. Group IV

このクラスでは約3ヵ月半を要したが計3名の者が少数点以下20分の1mmの位まで読めるようになった。HelperのMr. COOPERは特別参加のような形でクラスにでていたが、その彼も5月に入り少数点第1位まではなんとか読めるようになった。

彼ら自身ノギスを読めるということが、よほどうれしかったのか、クラスが始まると、ピストンやらコンロッドを自ら持参し、私に読んだ値で正しいか、誤まっているかをチェックしてくれと言ってくるまでに進歩した。全体を通じて言えることではあるが、進歩の有るところ、彼ら自らの努力がそこに大きく払われていることを私は知った。いかに興味を持たせ、理解させるかの努力、それが全てと言っても過言ではないように思う。

昼休み教室の前を通るとG-II, III, IVの者がお互いを教えているのを見るのはやはりうれしい限りである。中には、夜自分で問題をつくり、翌日私にチェックしてくれと持ってくる者もある。その調子で今後とも自分で努力していってくれるといいのだが、ただはっきり言って今の大部分の者達の実力では実作業への応用は日時が相当必要であることも確かである。なおクラスで使用するノギスは日本からの大型教室用ノギスと機械加工室のMr. Boackai ARRAHの個人所有物を借りていった。

5. 私への待遇

日が経過するにつれ待遇はよくなり、今現在は車、ガソリン(4ガロン/日、土、日曜は無し)必要ならドライバーも使用できる。部屋も1部屋与えられMr. KABLEEが細かな雑事はやってくれるので助かる。ただし車といっても廃車にする予定でいたのを1つのデモストレーションのつもりで修理し、乗っていたのだが、多くのメカニック達は、いつまでも、しっかり走っているので興味をいだいたようだ。その時必ず「少しのメンテナンスで車は十分に走り続けるものさ」と言ってやると、彼らは「そうなんだよネ」という言葉を返す。

ここMotor Poolは米国車が多いため、中央局では私をシボレーのエキスパートと勘違いしている者もいて自分の車を個人的に無料で修理してくれなんて頼む虫のいい者もある。それも止むを得ない事も確かなのだ。ここG.S.A.は政府所有物の全ての維持管理を行っておりMotor Poolはその中の一部門にすぎないからである。従って顔も知らない者も多い。全体的に言っ

て初めての頃と比べると雲泥の差である。特に現場の者達の私へ寄せてくれる親近感は深く、ここに居続けてよかったと考える。その中でもクラスでそして現場で一緒だった者達の気持ちは痛いほど伝わってくる。

「なぜ帰ってしまうのか?」と、「又、戻って来てくれるのか?」と。

6. J. O. C. V. セミナー

2月初めの入学試験以来週1回ずつ続けられていたセミナーも彼らの強い要望から週2回、6月からは週3回ずつ計6時限に変更した。なお、当初1時限1時間の予定であったがこれも生徒の熱意から1時間半に即変更させられてしまった。G. S. A. Motor Poolでのクラスでは、1つの事項を理解させるのについて、ここをこう指導すれば、きっと理解してくれるのではと考えても、その手前でいつも逆戻りしてしまい、大部分は算数の内容で終わってしまった。それに対する自分なりの考えや方法がこのセミナーを通して試されたのは自分にとっても本当によかったと今、考えている。具体的な興味ある点としては、本来のG. S. A. Motor Poolメカニック達のレベルが全てではなく、確かに彼らMotor Poolのメカニック達のレベルが一般的レベルではあるが、やはりそれなりの基礎学力を持った者も多くはないがいる。その彼らが経験により腕を磨き、かつ私のクラスに参加してくれたことによって元来、Motor Poolで目標としていた

- a. 精密な測定に基づく分解修理
- b. 定期点検による車両管理の重要性
- c. トラブルシューティングとその対応策

といった内容について学ばせることができたのは、大きな成果であったと考える。又、教える方法にしても教材用フィルム等をセミナーで使用したが、Motor Poolでの場合と、その反応の違いは大きく、セミナーでの彼らは単なる興味本位ではなく、フィルムの中のでてくる内容をみごとにほど理解している点である。彼らの大部分が現在それぞれの民間公共機関のガレージで働いている為、その仕事の中からセミナーでのクラスに持ち込まれてくる授業終了後の質問は非常にクラス全員の実践的問題解決の勉強につながり、彼ら自身が参加するといった授業になりよかった。この場合、万一、全体での結論が出なく、又、私の質問に対し、即答できない時には必ず次回までにその内容を整理し、解決しておき、授業終了後に明確に答えてやること

が彼らの信頼を裏切らない唯一の方法であると考え。

機械製図コースから Mr. Peter CURRAN が西独へ、自動車整備コースからは Mr. Thomas DAVIS が米国へそれぞれ私のクラスで学んだことをきっかけとしてスカラシップで出発することは非常にうれしい。なかでも Thomas DAVIS が言ってくれた言葉「私は今ほどの好運に恵まれたことはない。私の先生は一生涯を通じて Mr. ONO オノあなただ」と言ってくれました。Peter CURRAN はクラスが始まった2月頃には、途中でギブアップするのではないかと考えていたが、月日が経つとその線のきれいさ、円の書き方、数字の正確さと見違える程の進歩である。思いかえしてみるに彼に対して同じような指導を繰り返した記憶がない、さぞ家で努力したことであろうと推察する。

機械製図は実際に図を書かせながらの個人的指導による1時間半のクラスという形をとったので個々の問題を具体的に細かくアドバイスできる点でよかったと考える。どのクラスでもそうではあるが個人的フォローアップなくしては、その成果は限られ理解の度合を私自身知らなかったであろう。従ってクラスでは特別に質問の時間を設けたりするようではなければならないし、又その時間が今になって思えば個々の意識の中での参加意欲を強くさせ、かつクラスとの参加を興味深いものに彼ら自身でしていった。その為両コースの修了者は9名ずつであるが、その平均出席率は自動車整備 95.2%、製図 76.2%と高い。特にこの国での通例的時間感覚から思うに驚異的なことである。

途中何名もの人が入学を希望して来たことだろうか、この事を考えてみるに、いかにこのようなクラスが皆に望まれていたかを知らされた。生徒の一人、リベリア大学の学生は「学校では教えてもらえない内容だった」と言っていた。ただし彼は付け加えた「カリキュラムには入っている」残念なことだ。

加えて当リベリア内からのみでなくガーナそして遠くモーリシャスからも、「自分達の国でも、ぜひこのような活動を行なって欲しい」といった内容の手紙を受けとった。多くの人がまだまだ私達を必要としてくれていることを知った時、新たなるファイトが湧いてくる。

なお、両コース共に合格し、修了した2名、D. Karfalan JOHNSON, Lssac B. DAVIS については職もなくこのまま終えてしまうのはそのまじめさ、基礎学力そして将来の有望性から G. S. A. へ推薦した。その場で担当の

自動車整備技術指導の2年間

私のカウンターパートでもあった Assistant Director SUMMEVILLE は Mr. ONO が紹介する者ならそれで十分とまで言ってくれて快諾してくれた。その上私が当国を離れた後も彼ら2人の若者の面倒は引き受けてくれた。彼らは感謝のしるしとして、今後 J. O. C. V. 及び大使館の車両のメンテナンスをやらせて欲しいと頼まれるが、それは一応辞退させてもらおう。彼らにしてみれば、よほどうれしかったのと思う。それより私にとって喜ばしかったのは、Mr. JOHNSON が「私は貴方が最後の授業で言った、これが本当の勉強だという言葉をお忘れず、今後も努力していくことを感謝のしるしとしてここに約束する」と言ったことである。

7月9日の修了式の日、両コースの若者が私への感謝の言葉を Mr. DAGADU が代表で読みあげてくれた時、つらかった時も頑張ってたよかったですとつくづく感じた。又、同時に皆が少しずつ金を出しあって作った正装（上衣と帽子）は私にピッタリであった。さっそくその後の小パーティーでは、それを着て出るが、皆一人ひとりの喜ぶ顔は今後いつまでも忘れないだろう。

7. テキスト作成

G. S. A. Motor Pool 及び J. O. C. V. セミナーの時痛感したのは、いかにいいテキストがこの国にないかという事であった。その為、今までのクラスでの経験と日常生活の中より得たものを基礎として、①初心者用、②中級技術者用の二種類の自動車整備士用テキストを作成した。中級者用は J. O. C. V. セミナーでの授業内容から得た経験が非常に役立ったし、初心者用はヘルパー（G. S. A. Motor Pool 内）との日常から、彼らの理解の度合を知ったことが大きく役にたった。

今後とも Training Instructor Abu SELIEF にこれらのテキストを活用し、G. S. A. Motor Pool での技術指導を継続してってもらいたいと望む。このテキスト作成は私がリベリアに残す目に見える足跡となってくればと強く希望している。

あとがき

私は今まで知らなすぎた。南北問題に一技術者の卵として疑問と夢をいただき参加した協力隊での生活を通して思うのは、発展途上国が抱える難しさは表面上に現われた貧しさ、生活レベル、教育レベル、の問題ではないように

考える。それはどの国もが持っている、政治の歪みであろう。ただ歪みが、資源が、技術力が、そして機会がなかった為に、そこに住む多くの人々の上に蔽寄せになって現われているにすぎない。先進諸国が外に手足を伸ばすことにより、本来内存するはずの蔽が表面に出てこないのとは逆に、発展途上国へはその蔽が押し寄せる為に現地の人々の生活に、かつては存在しなかった蔽が幾重にも重なり合っているように自分には思える。

自分のこの2年間の生活を振り返った時、楽しかった、苦しかった、悔しかった、痛かった時の一刻一瞬間が浮かび、同時にその時の多くの人々の顔が思い出される。

今はもう現世にいない仲間、でも私は、その彼をガーナ人の心の中に見い出せたのは、只の偶然とは思えない。私が任国外旅行で、アイボリーコーストからガーナにラグーンを小舟で越え入国したが、その時、そこには乗り物と呼べるものはみあたらない。とその時1人の少年が近づいてきて「日本人ですか?」「そうだけど」「私も日本人の先生に教わったんです」「何という名の人ですか」とたずねると「Kazu, Kazuy IDO, Master IDO です、でも事故で死んでしまったんです」と悲しそうに下を向いてしまった。私は嬉しかった、気がつくと彼を腕に抱きかかえ頭をなでてしまっていた。

南北問題、技術協力呼び方はいろいろある。だが自分達が今まで、そしてこれからも関わっていくのは、私一人の人間と現地の一人ひとりとの出会いであり、その人達の中にどれだけの情熱を注ぎこんだかによって、二次的、三次的、波紋がそこに生じていくのだと考える。

日本に戻ったら私も別な人生が待っていることだろう。だが今私は自分がこれからの人生の目標といったものが具体的に見えてきているのを感じる。必要としてくれている人達の為に働いたら、私は自分を見失なうことはないだろう。

リベリアでの2年間、先輩OBの人達、同期隊員、駿場での友達、そして調整員、奥さん、この人達の目に見えない援助、心遣いがあったればこそ、今無事ここに一区切りをつけることができた。ありがとう、私の周りの人達。ありがとう、リベリア共和国。私は今、幸せです。

日本に帰って考えること

小野 芳裕

派遣前の私にとって、発展途上国での技術協力は長い期間迷ったが、忘れ去ることができぬ夢のようなものだった。帰国した今、思い返して、別世界に暮した日々と痛感している。出来事は過去のうちに埋没してしまい、その尖鋭な^{ツノ}角も甘い思い出に姿を変えていくものだが、隊員として過した月日が別な時代の世界に思えてくるのは、私只一人ではないと思う。

クーデター以前、米不足から一日一食が通常のことだった。日本から持ってきた金も日を追って減っていく。職場の食堂の現地食ですら安くとも2ドルはしていた。街まで戻るには1時間の休みでは不可能だ。そんな生活も慣れてくると余り苦痛とは思わなかった。こんな生活状況の中、肉体的苦痛よりも精神的に厳しかった。時・分・秒。自分が派遣されてきた目的など着任早々考える余裕などなかった。派遣されて来てみれば基盤などどこにもない。期間が定まらない一時的受け入れ先に結局2年間配属してもらったのは、ほぼ任期を3分の2過ぎた時であった。生活に仕事に余裕を与えてくれる程、リベリアの現実には私にやさしくはなかった。それも無理はない。彼らにしても突然のよそ者が出現して何やらやろうとしている。“上からの命令だからしかたがない付き合うか”“ひょっとすると何か旨いものにありつけるかもしれないぞ”少しずつ彼らは近よってきた。さてよ、たいして得にならないみたいだ。好きにさせておけ。といった状況が恥かしげもなく目の前に付きつけられる。この状況下に於いて活動の目的、そこから生まれてくる結果は、自分にはおおよそかけ離れたものだった。そんな時も自分を支えてきたのは、自己の原点に振り返り、夢に描いた途上国での活動を、他人から万一自己満足と批判されたとしても、努力し続ける以外に方法はなかったと考える。

とにかく、活動してみる。たとえそれが失敗に終わったとしても“やってみなくてはわからない”これが、事実があるがままに受け入れながら現地で試行錯誤をした時、やっと本来の協力活動が見えてきた。価値観にしてもわかり。ただ、そのように特に期待もなく、自分に忠実にと思い、今までの人生で、この2年間は最も自分自身への内面的対話を得られたことは、帰国時別

れを惜んでくれた人達よりも、私には貴重なものであった。喜怒哀楽の日日、目頭が熱くなった瞬間、思い返すことは多いが、やはりその事実はその以上の物で決してない。只、そんな事実がかつてあった、それだけでよし、又、十分である。私はリベリアに派遣されてよかったと痛感する。リベリアを通して、私は途上国の持つ多くの難しさ、問題点を学ばせてもらうことができたから。

小野隊員の報告書を読んで

上 川 修 二

リベリアに限らず他の発展途上国にも共通していえることがらであるが、受け入れ国政府の方針と技術指導を受ける要員との間に大きなギャップが感じられる。

このために、隊員は本来の協力活動である技術的な事項以外の面での苦勞がみられる。特に小野隊員の場合の「We don't need you.」との戦いは、これらを端的に表わしているといえる。

しかし、この中にあって最後まであきらめず、「意思あるところ道は通ず」の信念をもって、全力を尽くした努力に深く敬意を表したい。

小野隊員のいった活動には、小学校教育ともいえる数の加減、小数、分数に始まり、自動車整備の分野では最も基礎的な内容であるノギス、マイクロメータの取り扱い等、整備技術には程遠いものであるが、これらの訓練を踏み台として、G.S.A.モーター・プールの目標である①精密測定に基づく分解修理、②定期点検による車両管理、③トラブルシューティングとその対応策等への一助となり、指導の基本は愛情、熱意、熟練（繰り返し）の三つだといわれている通り、有効な処置であったといえる。

また、二度に亘るG.S.A.へのセッション・レポートの提出は現段階では採用されていないとはいえ、将来のモーター・プールのあり方に大きく影響を及ぼすと共に後続隊員の指針になるものと信ずる次第である。

(協力隊技術専門委員)

タブマン高校での活動

総合報告書

派遣国 リベリア

職種 理数科教師

氏名 竹内俊博

配属先 W.V.S. Tubman High School

College of West Africa

竹内隊員の略歴

氏名 竹内俊博

生年月日 昭和29年7月8日

出身県 兵庫県

職種 理数科教師

派遣期間 54年8月～56年8月

CWAの非公式配属と公立高校夜間部 (Tubman High School) の仮配属に至る経緯

日本で公式に配属された、モンロビア職業訓練学校(以下職訓とする)の、建設遅延に伴い、私は、労働省が職訓に戻れという通告を出すまで、一時的にリベリア電電公社に配属される。電信電話、TELEX等の動力源、エンジンの保守管理の部門、エンジン (Diesel) 部門に勤めることになる。

配属後、8ヵ月後の1980年3月31日の日付で、曖昧でかつ不屈き、不謹慎な通知を受け、7月開校を目指して、カリキュラム、実習の小冊子作りに取りかかることになり、リベリア電電公社で簡単な挨拶をすまし、実質的に電電公社を去ることになる(実は労働省と公社間に何の連絡もなしに私の労働省への再配属が起り、電々公社側があわてふためき、1ヵ月の猶予、すなわち4月の下旬、公社を去り、労働省に移る)。その時「貴重な2年間を無益に過ごしたくない」という強い意志でもって、比較的有名で、最大の規模を誇る、タブマン高校 (Tubman High School) へ自ら訪れ、一時配属の許可を労働省からとり、5月の下旬から数学、電気、化学を昼間、夜間(昼部は数学、化学、電気1クラスずつ、夜間部は数学1クラス)教えることになる。

6月の末あたりに再度、労働省から「戻れ」の通知を受け、朝8時から午後2時まで、労働省の別館②で教科書、カリキュラム作りに従事することになり、Tubman High School の Morning Section で、3科目、すべての教授を止め、私の教え子、私を親しみ、私から教えるを受けることを楽しみにしていた生徒たちと、別れを告げ、いやおうなしに7月上旬、職訓に移ることになる。しかし夜間は引き続いて教えられることになる。1980年12月まで教え、2ヵ月以上の長い休暇に入る。12月の下旬あたりに協力隊の任期、2年間の間に職訓が完成し、よい運営の下で2年間有意義に過ごすことができないのを目のあたりにして、職訓で残りの任期を教えることの意志がないことを公けに宣言して、私の将来の方向性を考える。

すなわち①7月以前確かに建物(校舎等)は完成したが、電気も水道もない所で生徒は6月から授業に入っている。理論20%、実習80%という実習偏重形のこの職訓で目的にかなった授業が出来るとは理解できない。②日本の援助として送られて来た機械が、その保管料(1,800ドル、その当時5ヵ月、それくらい)も労働省が支払えないという財政ピンチにおちいる。③にもかかわ

らず、掃除婦の月給が月 375 ドルというメチャクチャな給料配分、その仕事は朝仕事が始まる前に床掃除、生徒らが帰宅してから床掃除等の簡単な雑用(計 1 時間近く)、一方道具類の管理の仕事をする助手が 1 日中働いて 250 ドル、ちなみに 1 年勤めたタイピストが 400 ドル以上、普通の会社、省庁の給料は月に 100 ドル以下(掃除婦)、同じ勤続一年で、200~250 ドルである。④職訓のまわりはフェンスも何もなく、たとえ機材が入っても盗まれるおそれは多分にある。

ところで疑問に思うのだけれど、日本のすばらしい自動の機材が来ても、オームの法則も簡単な数学、電気の理論・実習も知らない、満足に持っていない彼らが、それらをうまく使いこなせるかどうかである。

さて、その後自分自身の野望と大志のゆえに、少し協力隊員として恥ずべき行為、すなわち、リベリア政府が公式に要請していない、私立高校で数学と化学を教えることを承諾する。その目的は、公立、私立高校の格差を学問的、又は社会問題的側面から、ながめてみたいと思ったのである。そして夜は昨年に引き続いて、タブマン高校の夜間部で教鞭を取ることになる。

夜間学校

前年度に引き続いて、私は数学教師として、タブマン高校の夜間部に仮に配属された(“仮に”という意味と非公式という意味も含む)。当初 2 月 16 日に新学期が始まる予定が、休暇中の教師への給料払いが政府の財政が貧しいため、3 月にずれ込み、結局公式に公立学校は 3 月 3 日から始まった。

仮配属という不安定な状況に置かれた私は、学校当局としても文字どおり仮の教師、ボランティアとして扱い、積極的な発言もなおざりにされ、夜間学校に重点を置いてないという理由もあるが、会議とか通告などの情報も少なかったようだ。そのたびに失望を受けたが、そのたびに自分に言いかけし、自分自身のために、自分の将来のためにしているんだという目的意識をはっきり持ち、自分に鞭(ムチ)をして無知(ムチ)な生徒の学問的發展のために、私に従っている生徒たちを思いつつ、視点を明るい方向へと移してみた。

この一学期を 11 学年と 12 学年を各一クラスずつ教えたのだが、学校当局の怠慢さ、教師の曖昧さ、生徒のまわりに横たわっている諸問題のために、悪戦苦闘の日々だった。そして時々、何らかの不合理な理由をつけて、校長、教頭を始め、私を除く教師が帰宅し雨がざあざあ降る中、4 th pd. の授業が終って、静けさの中をひとりで帰るとき、やるせない空しい何かを漂ったもの

だった。しかし限られたよい、真面目な生徒たちが「いまだかつて、誠実で信頼のおける先生に教えてもらったことがない」と真面目な顔をしていうとき、「リベリアに来てよかった」と思いつつ「少なくとも、これらの生徒達のために努力を惜まない」という信念を抱いてきた。

(1) 私の教育方針——問題点一般

フリー・エジュケーション（この意味は今のところ、曖昧でハッキリしていない）の提唱により、誰れもかれもが、タブマン高校にも、あふれる程の生徒、しかも教育背景の貧弱な生徒たちが、タブマン高校の夜間部にも入学してきた。無理やり押し込んだようなものである。その中には学年又は学校修了証書を金で買ったものもいるだろうし、地方からの学校からリベリアの首都、モンロビアに来て、タブマン高校に来た生徒もいるだろう。ここで教育省発行の小冊子からリベリア教育の問題点について見ることにしよう。

開発途上国における教育制度は、程度と多様性において相異はあるものの、どの開発途上国にも数多くの社会的、経済的問題にひどく苦しめられている。開発途上国の一つ、リベリアにおける問題点を以下に掲げる。

- (1) 各学年における生徒数の漸増ぶりと、それを満たすだけの物理的、人材的要素の極端な不足。
- (2) 不適切なカリキュラム、指導要項と値段のはる教科書と備品の高価。
- (3) 有資格教師の不足（教師の教育水準が低い）。
- (4) 落伍生徒数の高比率（特に低学年）。
- (5) 高等教育を受けた人材を引きつけ獲得する対策の乏しさ。
- (6) 中等教育の採用人員の低さ。
- (7) 地域的な教育普及の不均衡さ。

7項目が掲げられているが、この Tubman High School も当てはまる。具体的説明をすると、昼間と夜間で2,400名の生徒が登録されているが、(1)すべての教室に椅子があるわけではない。あっても使いものにならないものばかり。紙（用紙）も政府からの供給が少ないため、マーキング・ピリオド試験の期間だけ。練習問題や小テキスト、宿題などのものに使用する紙は供給されない（一時チョークが与えられない時があった）。

(2)カリキュラム、指導要項があるわけでない。あってもそのとおりに進んではいけない。アメリカ輸入の教科書を使い、表面的な教え方でスキップしたり、章を飛ばして次章を勉強したりである。教科書は1冊10ドルから20ドル

するため、特に夜間学校に通っている生徒は教科書が買える程豊かでない(5～10%ぐらいの生徒が教科書を持っている)。

(3)この点に関しての調査はせずに“Long Range Education plan, 1978—1990”を参照することにする。

Table-2 リベリアの高校教師の有資格教師比率

教 師	内 容	比 率
有資格教師	大学卒, 教師研修修了者	32%
未資格教師	大学卒, 教師研修未修了者	39%
無資格教師	高校卒, 以下	29%

(4)1学期終了時の成績は、しかたなく、合格点(70%以上)をあげたケースが多い。私の教えた11学年9組(生徒登録数57名)は学期末テストのとき、全生徒数の4分の3が合格点に達しなかったが、チャンスを与えるために20点ずつ付け加えた。しかし4分の2も合格しなかった(最後の図表参照table-1)。

ところで、ある学校では成績は100点満点は付けられ、50点以下の成績はなく、たとえば、38点とっても50点になる(もちろん通信簿につけられる成績がそうであるが、実際のテストでは0点から100点までである)。また、1981年5～6月にかけて Tubman High school の教え子(11学年9組と12学年7組)に中学校卒業試験(9th grade certificate Examination)をある金曜日に知らせ、その次週の月曜日に行った。(45分という限られた時間内なので、3分の1の問題<17問>を与えた)11—9組は計43名が受け、3名が合格、12—7組は計22名が受け、4名が合格しただけである。そのデータを Table-1 に示す。Table-1 はそれぞれの問題をそれぞれの組がどれだけの正解率を出したかを示す。生徒いわく「Sigruficant Figures を習わなかった」とか、「文字の置き換えとか因数分解を習わなかった」とか「教師がジャンプしたり、スキップしたりして、少ししか習わなかった」とか「教師が生徒がわかっているかどうか、気にすることなく進んだ」とか、いろいろと理由をつけてきた。

(5)教師の地位はあまり高くなく、給料も他の職業に比べると低い。だから大学出だったら、会社か省庁で働こうということになる。あるいは二つか、三つの学校や昼間部、夜間部も教えようということになる。そうすると問題

タブマン高校での活動

が出てくる（以降参考）。

(6)省略

(7)そしてもう一つの問題は教育普及の地域的不均衡である。

それでは表からこの問題について観察することにしよう。

Table-3 人口と学齢人口の関係

郡名	人口	学 齢 人 口	郡人口に対する学齢人口の百分率
モセラド	152,934	60,683	43.3
ダランドバッサ	123,400	53,706	43.6
ポ ン	194,191	88,998	45.8
ケイブマウントン	56,604	23,773	42.0
ニ ソ バ	249,702	107,371	44.1
ル フ ァ	180,737	72,294	39.4
メリーランド	64,485	28,018	45.2
サ イ ノ	57,647	25,041	45.2
グランジデ	71,825	30,884	43.0
モンロビア	204,210	109,296	50.1

人口と住宅国勢調査（経済企画庁1974）

Table-3 は各郡の人口と学齢人口の関係を示し、首都モンロビアは人口50%以上が学齢人口である（5歳から24歳までをいう）。ルファが少し少ないだけで40%を上回っている。

Table-4 から分かるようにメリーランド郡が子供が教育を受ける機会が61%と他の郡を抜いてトップを占め、モンロビア市内では学校数が多くあるにしても、それ以上の人口をかかえ、都市集中型の悩みがある。

Table-5 は各郡ごとの教師数、学校数とその関係を示す。モンロビア市ニバ郡を除く、8郡において外から見て学校とは思われないような壁、屋根があつて、すわる場所があるというような場所も学校として数えられており、悪い環境で勉強している生徒も少なくない。

(ロ) 問題点（学校当局）

教師との連絡のなさ——昼間は知らないが夜間で教職員が集まって討議し

Table-4 学齢人口と生徒登録数人口の関係

郡名	学 齢 人 口 (A)	生徒登録数人口(B)	B/A百分率
メリーランド	29,018	17,925	61.0
サイノ	25,941	11,004	42.0
グランジデ	30,884	11,857	37.0
グランドバッサ	53,706	19,214	35.0
モセラド	60,683	20,526	33.0
ニンバ	107,371	31,130	29.0
ルファ	72,294	18,902	26.0
モンロビア	109,296	24,256	22.0
ボン	87,385	18,099	21.0
ケイプマウンソン	23,773	4,444	19.0

人口、住宅国勢調査 (経済企画庁1974)

Table-5 各郡における教師と学校の分布

郡名	教師数 (A) × 100	ΣA	学校数 (B) × 100	ΣB	教師数 / 小学校	一学校につ き学齢人口	一学校につ き生徒数
モンロビア市	797	13.1	144	13.1	5	1163	256
モセラド	715	13.04	167	13.9	4	363	120
ニンバ	695	13.02	127	11.7	5	632	183
グランドバッサ	557	10.1	125	11.1	4	351	123
メリーランド	555	10.03	121	10.7	5	218	133
ボン	527	10.01	95	8.3	5	937	197
ルファ	458	8.7	104	9.1	4	565	147
サイノ	411	7.8	125	11.1	3	195	81
グランジデ	311	5.8	92	8.1	3	336	124
グランドケイプマ ウンソン	175	3.4	38	3.4	4	626	119

(教育省)

タブマン高校での活動

たり、話しあったりしたことはなかった。もちろん多くの教師が昼、夜間を兼ねて働いているが、夜間部の教師たちはなおざりにされている。

(ⅳ) 問題点 (教師側)

これから述べることは、タブマン高校の夜間部で私が見知った範囲であって、昼間部の高校や他の夜間部内のことではない。しかしこれと似た、いやこれよりも悪い高校があるようだ。

(1) 教師の無威厳性

(a) 生徒からの信望のなさ——生徒からの反応も少なく、ただ科目の授業があるから、一応合格点を取らなければならないから、という理由で、出席し先生との接触も少ない。

(b) 怠慢さ——多くの教師は彼らが教える時限前に学校に来る。そして自分の名前を教師用出欠簿にサインする。何人かは、それから近くの食堂でビール、酒を飲んだり、飯を食べたりしている。そして少し酔ってきて、眠たくなってくると教える時間になる。正常な状態で Best Condition で教えられるかどうかはなはだ疑問である。ある数学教師はサイン後 (サインは重要で、サインしていなかったら給料から休んだ日の給料を引かれる)、いつものように食堂にいき、飲み同僚と話しそのまま時の過ぎるままにしゃべる。教頭、教師数名の前で、「教える時間だけど、どうして教室へいかないの」といっても、一言、二言、しゃべって笑いだした。だれも彼の行ないを責めたりアドバイスする者もない。又生徒は、「あの先生を今夜見たけど、サインしていたけど、たぶん前の食堂にいるだろう」という。丁度そのとおりだった。

(c) 無断欠席——ここで教師たちが直接 (私に答えた) 言葉をきいてみよう。

「なぜ、毎日出席しないで、ときどき出席するの」

「昼部の生徒がいろいろとやかましく私にせまり、疲れてしまった」 (昼間夜間部両方教えている教師)

「今日は頭がいたい。今夜失礼させて下さい」 (教頭に理由を言っている。欠席の理由を前もって告げる教師は少なく無断欠勤が多く、学校当局も生徒にその理由を伝えないようである)

「私の父が昨日死んだ、葬式にいかせて下さい」

「私が教えているもう一つの学校、大学でテストの添削をして、夜遅くまで起きていたので、昨夜は寝ず、そのまま大学に行き、それから寝た」

(休んで2日後にその理由をつげた)

ところである生徒たちが、タブマン高校はいい先生がいるから転校してきた、といっているように、まだましなのである。ところが金曜日という日は「Friday has no good School」ということばがよく流行している。この意味は翌日が土曜であるから、多分先生も生徒もダルイという気分になるのだろうか、これはアフリカならではのことである。ある先生が言った「Tomorrow, it is a Weekend, I want to rest for tomorrow」

(二) 問題点 (生徒)

(a)無目的、無熱心さ——彼らは熱心に勉強し将来よい給料を得る職業につきたいとは思わない。いつも学校へ遊びに来て、友だちとだべって、夕方の時間を過ごすという無目的型の生徒もある。

(b)貧乏——日本のように夜間学生が昼間働いて、夜勉強するというような恵まれた環境に彼らは置かれていない。授業料(今、無料)制服などのお金がないから夜間に通うという状況に置かれ、都市集中型のモノロビアへ遠い奥地から一人で出てきて家賃や、とにかく衣、食、住を自分でまかなっていかねばならなく、昼間、たばこ、ガム、おかし、などこまごまとしたものを売って、日々、2～3ドル稼いでいる生徒が多い。もちろん働いている生徒は、私の調査によると、12-7組(29名)で15人のうち5人が働いている(月に100ドル～150ドル貰っている。こういう人は家族の誰かを養わなければいけない生徒もいる)。11-9組では38人のうち6人が働き、月に100ドル～150ドル貰っている。

(c)高年齢——調査によると、平均年齢は12-7組では22.1歳で、17歳の生徒から28歳の生徒までいる。12-7組では3名、11-9組では6名の女子生徒がいて、結婚(正式かどうかは知らないが)している女子生徒も多い。

(d)No Supporter nor helper——多くの生徒が一人で住み、一人で生活をいとなんでいるということを前に記したが、お金を少しでも多く得るために日夜、奮闘している。青空市場等へいき、野菜や、くだもの等を買ったり、Hotel からながれてくる比較的きれいな水を利用して、洗車したりして少額のお金を得ている。奥地に住んでいる両親は老い、働いていないとか、働いていても息子、娘が仕送りする能力がないなど問題は複雑である。また両親から「おまえは勉強する必要ない、ここの田舎で、キャッサバとか、米を作っていたらいいんだ」と言われ、反対を振り切ってモノロビアに出て来た生

徒もいる。

④教育方針——貧弱な設備、おそまつな学校運営、貧弱な生徒の学問的背景と三拍子の愚が存在する状況で、私の教育方針を立ててみた。この1学期が始まる前に生徒にアナウンスした。

(a)出席は原則として取らない。

勉強に専念する生徒は毎日、出席するだろうし、休んだら友達、先生に休んだ日の授業について尋ねるべきである。また勉強する意志のない生徒を落第させるため。

(b)新しくことを学ぶ時、解説付練習問題用紙を生徒に配布する。

生徒の大部分が貧しい環境に生まれ、育っているので教科書を購入する経済的余裕がないし、教科書価格も10~20ドルである。

(c)欠席する者は事前に他の生徒、あるいは自分から欠席理由を手紙あるいは口頭で知らせる。さもないと小テスト、宿題、試験等の追試は受けられない。

(d)勉強したい生徒のため、また補習目的に Saturday High School (土曜学校) を開校する。

(e)宿題も成績評価の対象とする。

(f)11学年はCWAで使っている教科書で教え、12学年には昨年 Tubman High School で使われていた教科書の、終えた章から教え、それぞれ四則演算、グラフ関数から教える。

⑤ 結果

(a)始めてから2週間もすれば、やる気のある生徒とやる気のない生徒に分かれてくる。時々、授業に出ず小テストのみを受ける。そういう生徒は授業中に質問することなく、だまって黑板からコピーするだけである。そして小テストが返されて「先生、頼みます。ちょっと点を上げて下さい」と私のところに来るのが特徴である。

(b)彼らの多くは学校に入学して以来、先生の書いた黑板の授業内容をノートにコピーするだけで、普通、練習問題用紙等を毎度毎度受ける恵みを受けたことがなかったので、彼らはロ々「今年は貧しくても、美しく、勇気づけられた」と私に告げた。

(c)この知らせは欠席する生徒に対して、一つの義務、必要事項としてとられ、ずる休みする生徒は少なくなった。時に教師出欠簿に自分たちの先生の名前があるか確認するとき、私だけで他の教師が居ないときは、多く(半

分)の生徒が帰宅してしまう傾向があるので、そのような日には(特に金曜日)15~20人の生徒を相手に教えている。

	1時限目	2時限目	3時限目	4時限目	5時限目
時間(P.M)	6:00 ~6:45	6:50 ~7:35	7:40 ~8:25	8:45 ~9:30	9:35 ~10:20

12学年9組, 11学年9組

(d) Saturday High School は、生徒が組織運営するようにした。

(毎土曜日4~6時P.M)

Secretary.....Printing & Typing

Assistant Secretary.....help Secretary

Teacher——私(数学を教える)

Treasurer——Collecting Dues(紙代, 原紙等に使い月1人25セント)

当初, 組分けして教えるということにしていたが, 彼らの苦手な文章問題を10学年の数学の教科書から教えていたが, 10学年は難しいらしく, 2人しか毎週来なかった。それで混合してしまい, 約23名の出席があり, 文章問題に取り組んだ。違う組からも大勢来ていたが, 彼らの多くは数学が好きであり高校卒業後大学に進むか, よい会社に就職したいと熱望する生徒であった。

(e)宿題はかなりの生徒が提出した。又, 欠席した生徒も「今日出してもいいか」と尋ねてきた。

(f)11学年に使った教科書の解説とか練習問題に彼らは慣れていなく, 説明に要する時間が長かかった。

▶ CWA

CWAは歴史もあり, 私立学校であり, 財政的には大した困難もなく, リベリアでは1~3位を争う優秀校である。それだけにガッシリとした学校運営の下に教師がおり, 生徒が勉強している。授業料も425ドル(年間, 1学期は122.5ドル)と高く, 子供の数が比較的多い家庭では, この額はすごく高いようである。リベリア政府の要人や会社で高い地位についている人達は, 全体の30%程である。CWAの生徒200人余りのうち3分の1にリベリア政府の奨学金を支払われている。そういうわけで政府の援助も多く差しのべられており, また少しでもよい学校へと子供を送って, よく勉強してもらいたいという父兄の期待も大きく, 毎日学校と家との距離を車で送り迎えするというところにも教育にかける熱意が見られる。また学校当局, 教師との父兄の

タブマン高校での活動

接触、連絡もいき届いており、生徒との三者会談などをして、さまざまな問題の解決へと積極的に動いている。

▶西アフリカ（CWA）

リベリアで最古の教育組織、西アフリカ大学はかつて単にユナイテッド・メソジスト中等学校でしかなかった。が今では数百名のリベリアや他の諸国からの青年の教育的ニーズに応じて積極的に奉仕している。

CWAの歴史

CWAの前身は“モンロビア神学校”と呼ばれ、牧師養成校として、コックス師が初代のリベリアへの宣教師として創設に着手した。現在ある校舎は1833年3月8日に、コックス師がリベリア到着後まもなく買収した土地に建設され、1839年にやっと完成した。

宗教教育機関としてCWAは、人生のすべての問題へのアプローチに基本的な関心を抱き、たとえば若人の将来のよりよい方向づけに強い関心を持っている。CWAは学問を通しての楽しみを経験させ、精力的で洞察力のある市民を育成するためにリベリアの若人に一番適した学問を目指している。

▶教育上の目的

西アフリカ大学はメソジスト協会の教育組織として全人格づくり教育、すなわち人類の1人として、国民の1人として、また一個人として、彼/彼女にはだかる社会的、宗教的、政治的問題解決に取り組むことのできる人間のための教育に専念している。

▶運営

(a)理事会——憲章にうたわれているように、ユナイテッド・メソジスト教会の委員長が理事長の役職につく。また理事会はCWAの西アフリカ大学の教職員と学校の運営に密接して動き、理事会はCWAの義務に、法的に責任を持つ母体である。

理事会の主な職務は理事の賢頼者—校長の選出と任命である。それに加えて以下がある。

(1)制度上の目的の定義。

(2)CWAによる地域社会、教育的奉仕や寄付等の承認。

(3)入学する生徒の必要条項、新入生募集、職員の労働条件、維持管理、職員数の再考。

(4)必要な施設設備品の購入と保守管理。

(5)公共機関による資金の獲得と管理。

(6)制定の執行と教育奉仕計画によって成就された成果の反省・評価。

(7)CWAの学校当局の推薦に基づく職員の任命・解雇。

(b)教職員——CWAの憲章には、すべての学問的・訓育的問題に於いてはCWAの校長および教職員に委ねられるとしている。また教育省によると、理事会や団体の経営に従事する者については、職業的技能と学位をもつ有資格者のみが教職員として採用されるとしている。さらに全ての教職員は1年間の契約に署名しなければならない。CWAの職員は次項の職務上の規約・道義を遵守しなければならない。

▶教師の遵守事項

(1)教師は5分間の休憩の終わりを知らせるベルが鳴るとき、教室にいないこと。遅刻者は学校運営部で書き示す。

(2)学校当局の許可なしに学校を退職しないこと。

(3)授業の途中で教室を去るとき、生徒に適切な練習問題等を与えること。

(4)6日間の許可欠勤が許され(1年間)、追加分については減給される。

(5)教師は学校当局によって課せられた、全ての職務を遂行しなければならない。毎時限の授業、クラス、あるいは同好会の担任として、同僚教師の欠勤による応援授業などである。

(6)クラスの担当は毎年交代する。もし教師が担当する気がなければ、学校当局が割り当てる。教師は毎日、出欠簿にサインすること。許可なしにこれらの職務を怠る教師は契約破棄を意味する。

(7)教師は毎日、生徒の出欠をとること。

(8)教職員の代表なしに生徒会活動をしてはいけない。

(9)授業計画はそれぞれの学科の主任に毎金曜日に提出し、主任は授業計画を再考し、教務担当の教頭に各教師の1週間の授業内容を報告すること。

(10)テスト問題配布後、その時限ベルが鳴るまで生徒を教室内に引き留めておくこと。テスト期間中、不正行為をする生徒を取り扱いかねる場合、校長が処理する。

(11)規則的なピリオド・テスト期間中での授業はなく、その日のテスト終了後、ただちに生徒を帰宅させること。

(12)登録事務官は他の教師との相談により、成績表の提出期日を決定する責任をもつ。

タブマン高校での活動

④登録事務室でタイプされるべき全てのピリオド・テストと学期末テスト期間は1週間前に提出されることが望ましい。

④毎月第二の月曜日は職員会議の日に当てられ、全ての教師は時間どおりに出席すること。

④生徒が教師の手に負えないような不正行為をした場合、その生徒は校長室に送り、すぐに追跡調査が行われなければならない。

④教師は職員室内で喫煙することができる。教師は生徒を職員室に入室させてはならない。

④月給の前払いは毎月10日～25日に利用でき、前払いは毎月1回可能、ただし12月と1月は除かれる。

④教師はCWA主催の研究会議に出席することが義務づけられ、事前の許可なしに欠席する者は契約が破棄される。

④教師の給料は毎月28日に支払われる。

④全ての教師は卒業式に出席することが義務づけられる。

④電話は非常時にのみ使用可。教師は非常時を除いて、電話口にクラスから呼び出されず、伝言される。

④教室内の運営は各教師の責任分担であり、授業がうまくない教師は破棄(契約破棄)される。

④事前の通告なしに、授業内容観察のため、教師の仕事の評価のため、学校から派遣される場合がある。

④全ての教師は適切な服装を着て、授業に出ることが望ましい。

④要約すれば、上記の規約・規則に違反することを行いつけるならば、その教師の仕事は解除される。その決定はCWAの学校当局あるいは理事会によって無条件になされる。

▶入学制度

(1) 入学試験

CWAへ入学出願する者は全て、カリフォルニア学力テストで要求された以上の成績を得なければならない。他のユナイテッド・メソジスト教会付属学校からの出身者もこの必要条件から除外されない。必要な成績に達しない者は、以前通学したにもかかわらず、CWAへの入学は認められない。全ての出願者は次のうちの1つを満たさなければならない。

(1)10学年への入学出願者は9.0以上の成績

(2)11学年への入学出願者は11.0以上の成績

(3)12学年への入学出願者は12.0以上の成績

他にCWAが作成した入学試験も、ある学問分野での出願者の実力を試すために実施される。この後者のテストは、社会に出る前における職業斡旋の証書として役立つ。

(ウ) 入学への必要事項

(1)入学試験に合格した者は、有効な成績証明書を入試管理委員会に提出すること。もし証明書が無効と判断された場合、その者はただちにCWAから退去を求められる。公式の証明書は次の住所宛へ、成績証明書が以前の学校から直接送付される。

Admissions Committee, College of West Africa

P. O. Box 1010, Monrovia, Liberia

(2)CWAへの受入れに先立ち、生徒は前の学年の全ての科目に合格していなければならない。

(3)二枚の推薦状（つまり1枚は前の学校の校長から、もう1枚は前学年のクラスの担任あるいは教師から）を提出しなければならない。

(4)生徒は有効な健康診断書（胸部のX線写真を含む）を提出しなければならない。両親は、子供が医師から適切な診察を受けたかを確認する義務がある。

(5)生徒が11学年入学を希望する場合、CWAの校長と、以前生徒が通学していた学校の校長と話し合い、転校に関する承諾を得る。

(6)地方からの12学年への入学は許可されない。

(7)生徒と両親または保護者はCWAに登録する前に、校則に同意しなければならない。教職員が必要と判断する場合、契約書に署名することが求められる。

(ク) 授業料

1979年度の授業料は300ドルで、他に活動費25ドルである。この活動費には実験室費、生徒会活動費、身分証明書、診療費や登録費が含まれる。

▶カリキュラム

1. 成績のつけ方—CWAは評価を文字で表わす。

- | | |
|---------------------|--------|
| A. 優秀 (Excellent) | 90—100 |
| B. 大変良い (Very good) | 80—89 |

タブマン高校での活動

- C. 普通 (Average) 70—79
 D. 普通下 (Below average) 60—69
 F. 欠点 (Failing) 0—59

○優秀学生の表彰

- (1)校長賞 (2)佳作 (3)選外佳作
 それぞれ次の必要項目を満たさなければならない。

教科課程時間割

		10学年 (時限)	11学年 (時限)	12学年 (時限)	単位(計)
語学部門	英語	5	5	5	3
	フランス語	5	5	5	3
数学部門	数学 (代数・幾何・三角法)	5	5	5	3
宗教部門	宗教 (出エジプト・予言書・倫理学)	3	3	3	2
科学部門	科学 (生物・化学・物理)	5	5	5	3
社会科部門	社会科 (地理・歴史・経済社会)	5	5	5	3
職業教育	(下 記)	5	5	5	3
時限数/週		33	33	33	20

生物学(10学年), 化学(11学年), 物理学(12学年)
 地理(10学年), 歴史(11学年), 経済政治(12学年)

職業教育は5科目あるが, 現在図学と家庭科しか行われていない。男子生徒は図学を, 女子生徒は家庭科を修めなければならない。

○校長賞

マーキング・ピリオド内に無欠席, 無遅刻, 規則上の問題なし。総科目の平均がA以上で, 各科目がB以上の成績。

○佳作

マーキング・ピリオド内に無欠席, 無遅刻, 規則上の問題なし。総科目の平均がB+以上で各科目がB以上の成績。

○選外佳作

マーキング・ピリオド内に無欠席, 無遅刻, 規則上の問題なし。総科目の平均がB以上で各科目がC以上の成績。

2. 休暇学校

理事会、CWAの運営部と教職員が毎年休暇学校を持つことが可能かを検討し、学年度の終わりに1つの科目のみ"D"評価を持つ生徒のみを対象に、25ドルの授業で、5週間の休暇授業を行う。この休暇学校でCまたはそれ以上の成績を修めた者は、次の学年に登録進級することができる。

3. 未完成の成績表

学校当局により認められた場合にのみ、欠席した生徒は小テスト、宿題、試験等の追試験を受けることができる。

4. 退学

学期の終わりに平均C以下の生徒は、次年度に進級することができない。10学年又は11学年で3科目以上に欠点を持つ生徒、あるいは2年続けて同学年を繰り返す者は、CWAから退学させられる。また続けて2年間留年した後、12学年を卒業できない者も退学処分される。学問上の不都合で停学処分された生徒は1年後応募することができるが、CWAの入学必要項目を満たさなければならない。

5. 平均点の計算

教師は得点方法が教師自身に委ねられているが、論理的かつ公平正大で、その方法は前もって生徒に説明しなければならない。教師は次の方法を使用することができる。

$$(a) \text{ Period 平均 } \frac{(\text{小テスト} \cdot \text{試験} \cdot \text{宿題の平均点}) \times 2 + (\text{Period Test})}{3}$$

$$(b) \text{ 学期平均 } \frac{(3 \text{ 回の Period 平均の平均点}) \times 2 + (\text{学期テスト})}{3}$$

$$(c) \text{ 学年成績 } \quad 2 \text{ つの学期平均の平均点}$$

▶ 国家試験

第6マーキング・ピリオドに先立って国家試験が行われる時、受験を希望する生徒は、CWAの12学年終了予定者でなければならない。なお第6マーキング・ピリオドに学校に定期的に登校しなかったり、クラスに出席しなかった生徒には罰則が与えられ、半永久的に保存される記録カードにCWAの教科課程を終了しなかったとして記録される。全ての推薦上も記録カードに付される。CWAは上記の規則、規範に違反した場合、その生徒に対する学問的責任を負わない。

タブマン高校での活動

▶一般公開日

父兄は学年度内に子供の学問的、訓育的（娯）問題について、教師と懇談する機会を設けなければならない。父兄は一般公開日、すなわち第1、第2学期末に招待され、その時生徒の成績、作品等が観覧される。

▶出欠席

午前8：01～8：10に登校する生徒は、放課後簡単な仕事が課せられる。許可なしに手仕事を拒否する者は、翌日家に送られ、その日テストが行われてもその者は追試験を受けることができない。授業に遅れてくる生徒は許可証が必要であり、授業開始15分後、事務局から発行される。その生徒は、その日の放課後、手仕事が与えられる。教師は各時限ごとに出欠をつけ、名簿に記録する。一般祝日にもCWAの参加（行事等）が求められた場合、生徒及び教師は登校する。卒業式も学校行事の一部であり、生徒は必ず出席しなければならない。

▶制服

全人格教育の目的遂行のために制服規則が大切であるとみなされる。

▶授業中の態度

教室内の統制を容易にし、教室内の相互作用を促進するために、1教室内の生徒数は30人を上回らない。次に掲げる行為は授業中慎まなければならない。

- (1) 2人が同時に話すこと。
- (2) 許可なしに教壇の後方に来ること。
- (3) 試験中でのカンニングや不正行為。発覚後ただちに試験の継続中止・追試験なしとなる。
- (4) 教師の許可なしに授業に関係ない本を読むこと。
- (5) 耳ざわりなことばを教師または同級生に話すこと。
- (6) 他人の答を盗むことは学問的犯罪であり、これを行うものは罰せられる。

授業態度に問題がある生徒で、校長室に送られた生徒は、叱責を受けた後簡単な仕事を課せられたり、停学、退学処分されることがある。これは違反の性質による。違反は正確に記録され、保存される。もし生徒が4回以上の違反をしたらCWAから退学処分される。

▶生徒の不満訴えの手続き

(1)生徒は教師を囲んで、訓育的問題について話し合いをもつことが許される。

(2)まず生徒が不当に扱われたら、その担当に知らせる。

▶父兄の訴え手続き

教師によって不当に子供が取り扱われたと感じる場合、父兄は処分撤回を求めて校長に訴えることができる。校長は父兄と教師本人との間を取りもち、聞き手として参加する。直接教師に反抗する父兄は校則に違反し、結局CWAから子供は退学する旨が通知される。

▶停学と除名

(1)学校で喧嘩しているのが発見された場合、当事者双方とも1週間の停学を命じられる。学年末に職員一同でそれらの生徒に、CWAに戻ることをないように告げる権利をもつ。

(2)喧嘩を2度した場合、除名される。

(3)無礼、不敬な言葉を使った場合、少なくとも2日間の停学処分。これらの言葉を継続して使用した場合、退学処分。

(4)盗みを働いた生徒は退学処分。

(5)臭いと身ぶりによりアルコールとか麻薬の影響を受けたと判断された場合、その生徒は1回で退学処分。

(6)マリファナ、アヘン等の喫煙が発覚した場合、1回目で父兄が呼び出され、2回目に警察に引き渡される。

(7)たばこの喫煙が発見された場合、1回で停学、2回目で退学処分がその生徒に課せられる。

(8)教師の要求を無視したり、不従順な行動をとる場合、即刻停学処分。

(9)許可なしに校内から出る生徒は停学。

▶懲戒委員会

懲戒委員会は毎年、CWAの校長により任命され、4人の教職員と少なくとも1人の学生代表から構成される。この委員会の主な役割は、CWAにある訓育問題に関して校長に勧告することである。委員会がその件について十分に討議し、委員長が決議事項を学校当局に報告し、校長が訓育問題に関して最終的決定を下す。

▶図書館

学校図書館は最大限生徒の奉仕のためによりいいものを提供することが望

タブマン高校での活動

まれるが、現在の設備をよく保ち、適切に利用されるために、次の規則を遵守されることが必要とされる。

(1)図書館では静かにし、口笛を吹いたりゲームあそびをしたりすることは厳禁される。

(2)ドアはきちんと閉め、ドアのところに立ってはならない。

(3)図書館内にある全ての資料は使用后、テーブルの上に置いておく。許可なしに本を持ち出す者は盗みで告発される。

(4)指定参考書は図書閉館15分前に借りて、一夜持ち出すことができる。その翌日、授業の始まる前に返却すること。指定参考書の返却遅れについては1時間25セントの罰金。

(5)その他の書籍は2週間、借りられる。

(6)もし本を期日までに返却しなかった場合、催促状が教室に送られ、1日につき10セントの罰金が課される。

(7)本が損傷したり紛失した場合、その本を借りた者は本の代金を支払う。

(8)アフリカ、リベリアに関する貴重な書籍は、図書館員あるいは教職員が館内にいなければ使用できない。

(9)授業時間で宿題が与えられているなら、教師は生徒を伴って図書館に入ることができる(開館8 AM—4 PM, 5 PM—7 PM)。

▶保健衛生

看護婦が1人いるが、診療室は午前8時から午後2時まで利用できる。

▶生徒会活動

知的成長を継続させるために教育組織は生徒の責任を持つ習慣とか、各生徒の適した方向性、品性を高めるために努力する義務を負う。

{1}生徒会…生徒会は生徒と学校当局あるいは教職員との間を仲介するパイプ役として、生徒会活動を調整する。生徒会は各クラスや学内の種々な委員会から選出された生徒の代表から成る。

{2}部・同好会等…すべての生徒は何らかの課外活動に参加することが奨励され、CWA生徒は次のクラブや同好会に参加できる。ラワナキリスト者同好会、新聞クラブ、Hi-Y、Y-Teens、スポーツクラブ(バスケットとサッカー)、Meet the challenge クラブ、コーラスグループなど。

{3}生徒会活動の規則・規律

(1)生徒はゲスト・スピーカーの招待の時、入場、退場の時、講堂または教

室で起立しなければならない。入退場の時しゃべったり、騒しくしていたら罰せられる。

(2)全ての活動は実施する前に、担当の教師に知らせ、校長から承諾を得なければならない。

(3)全ての生徒会活動は生徒活動担当の教頭と生徒会により、うまく調整される。

(4)学校の代表として学校当局を批判したり、不適当な言葉を投げかけたり喫煙、飲酒等の行為は罰せられる。

(5)公共物の保存と管理を行わない生徒は、行為に応じて支払いを必要とされる。

(6)訓育的(嫉)問題を持つ生徒はCWAを代表する特権を失うことがあり、生徒会活動の参加や学校施設の利用ができない。

(7)CWA名で集められた資金は生徒会口座に入金される。

(8)担任と少なくとも1人の教職員は全ての生徒会活動に出席する。

一週間の時間割(私の時間割)

時 間	月	火	水	木	金
1. 8:15-9:00	数 学 (11-B)	数 学 (11-B)	数 学 (11-B)	数 学 (11-B)	数 学 (11-B)
2. 9:05-9:50		化 学 (11-A)		化 学 (11-A)	
3. 9:55-10:40	化 学 (11-A)	化 学 (11-A)		化 学 (11-A)	
10:40-11:00	Lower Division (10学年) Recess 昼休み				
4. 10:45-11:30 (11, 12学年)					
4. 11:05-11:50 (10学年)					
11:30-11:50	Upper Division (11, 12学年) Recess 昼休み				
5. 11:55-12:40				化 学 (11-B)	
6. 12:45-1:30		化 学 (11-B)		化 学 (11-B)	
7. 1:35-2:10	化 学 (11-B)	化 学 (11-B)		復 習 時 限	Assembly 集 会

第一ベル 7:30AM 第二ベル 7:50-7:55AM 静思の時 8:00-8:10

※木曜日の7時限目は科目の復習に当てられ、11-Bで数学を普通教え、時たま化学を11-A&Bに教えた。

タブマン高校での活動

(9)全ての通知、公表、広告は学校当局の承認なしに、告知板に貼ることができない。

(10)社交会は真夜中の12時には終了しなければならない。

▶新隊員へのアドバイス

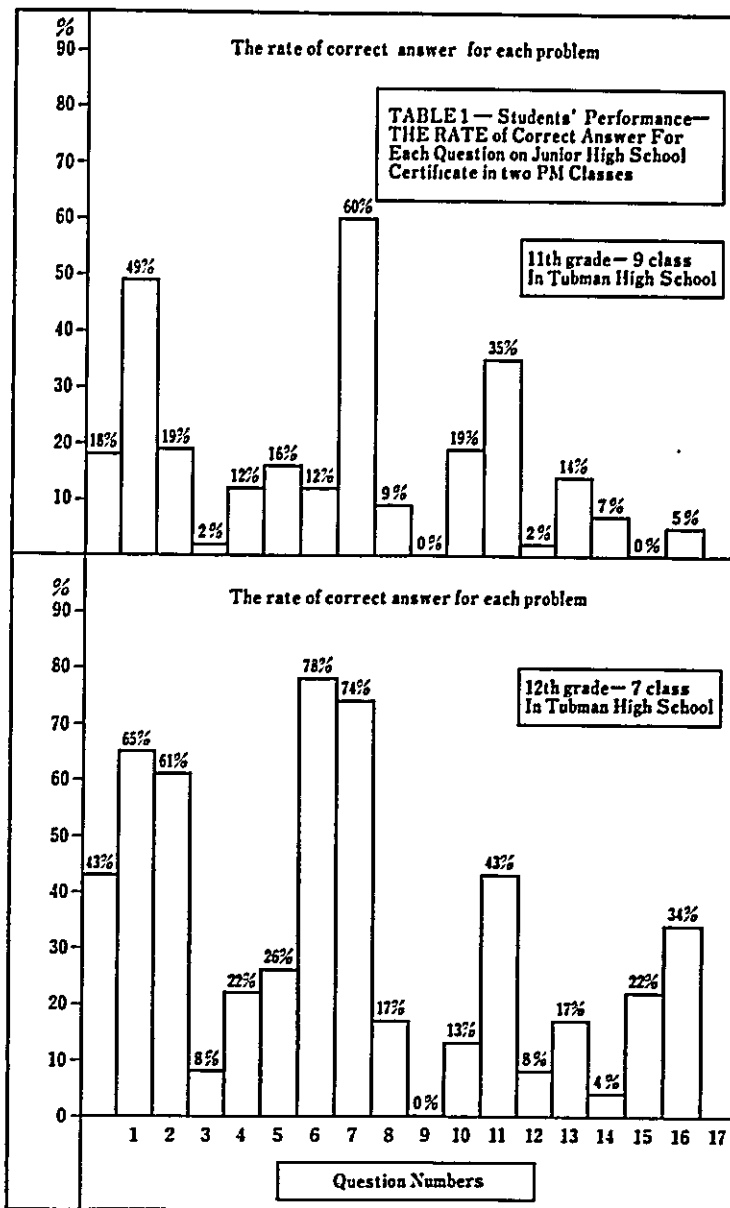
私は計1年3ヵ月程教育に携わってきたのだが、教師経験が日本で全くない者として、新たに来る隊員にアドバイスをする資格がない。それゆえこれから述べることを単なる参考として受け取ってほしい。

(1)生徒との間に線を引いて、慣れ慣れしくしない。

(2)悪いこと、つまり校則に違反することや、自分の教育方針に反することは、生徒が納得するまで注意、説明する。

(3)同僚教師との交際を深くし、学校内における問題と取り組み、解決するようにする。

以上である。もう一つ私のように自分のやったことをまとめあげることができないような状態をつくることなく、任期終了3ヵ月前には取りかかった方がよい。では健闘を祈ります。



日本に帰って考えること

竹内俊博

協力隊員として2年間の活動を振り返る機会が度々あった。「何してたん」と近所のおばさん、「アフリカでは大変だったでしょ。何食べたんよ」と友だち。「一寸やせたなあ。病気しなかった？」と親戚。「兄ちゃん、アフリカは黒ん坊ばかりやろう。恐ろしなかった？」と弟。「2年間ごころう。まあゆっくり休んでから聞かして、俊博」と両親。

私の青春を賭けた2年間の闘いは、「暗」の中に輝かしい「明」が存在していたことを発見した旅であると言える。

「暗」は、本当にリベリアの教育に貢献したかどうか甚だ疑問であることである。確かに電電公社で働き、昼夜高校で数学、化学、電気を教えたし、日本語も余暇を利用して教えた。しかし、じっくり腰をすえて、一つのことを一つの配属先で観察、考え、対話、分析、批判、修正、応用する機会がなかったし、配属先をコロコロ変えられたのでは落ち着くすべがなかった。それに教職課程は修得しておらず、教師としての資格はなかった。

一方、「暗」を切り裂き希望を与えたのは、人々との邂逅であった。異文化との出会いは人々との出会いを抜きにして語る事が出来ない。リベリアという、風俗・習慣・考え方・価値感の異なる文化の中に、黒人、白人、黄色人種の中に私がいる。何と恵まれたことか、彼がどう考え、何を生活信条とし、何に希望を置き、以前私の持つ国民性と実際観察した場合との相違等私の心を惹いた。そういうわけで私は種々な国の人々と友達になり、語り合い、生活面での、異文化から生じる対立・反目を少しでも和らげ、国際理解、協力を促進し私の将来の職業への足がかりとなれば、と考えたのである。

文部省に属する公立高校への配属転換は、労働省との公式契約のため、幾度か曲折があり、思うようには進まなかったが、生徒との気楽な対話は、ある意味では教師と生徒との主従関係を壊すこともあったが、思春期にある彼らの悩み——経済的、社会的、道徳的——を打ち明けてくれる場面も度々あった。アジアから来ていた青年たちと出会う機会もあり、経済大国ニッポンということ盾に取らず、目と目が合ったら、スマイルして挨拶する習慣も

異文化をもつ人々との交流をはかどらせたことは言うまでもない。

昔、読書した本の中に、ユダヤ人にはユダヤ人のようになり、弱い人々には弱者になった、と主張していたのを思い出し、リベリア文化をもつ人々にはリベリア人のようにまた、貧しい人々には、偉い人のようではなく、友人のように話すこと。これは、人々を獲得する、つまり、友達になり、何らかをシェアするように心がけた。この精神は大いに「水戸黄門」「あばれん坊将軍吉宗評判記」から影響を受けていて、テレビの見過ぎによる。たとえば、「あばれん坊将軍」の場合、クライマックスのとき、自分は将軍であるのに、助けた人々に、「おいおい、おれは“しん公”だよ」と親しく語りかける場面があるが、弱者へのセンチメンタリズムにより人々を立ち直らせること、いや教済とまでいかなくても友達になっていくことが尊いように思えたのである。

少し変わったことに、リベリア滞在中、将来リベリア人女性と結婚しても後悔しないだろうと考えた頃があった。これは、「アラスカ物語」（新田次郎著）の読み過ぎである。それは、主人公のフランク安田が失恋のゆえに日本を飛び出し、エスキモー女性と結婚し、エスキモー村建設のために闘う、という内容だ。しかし、時の経過とともに今まで発見し得なかった日本人女性に潜在する素朴さ、謙虚、勤勉、誠実さ、とにかく世界有数の女性らしさに気づき国際結婚のことは断念した。

また、私が、このようにして現地で溶け込み適応していった、私自身の知識や努力は数々たるものだが、今思えば派遣前の協力隊講座の講師の方々の賜物である。たとえば、協力隊員間では、「竹内君の怒ったのを見たことがない」と話に上る程、私はリベリアで怒ったことは少ない。少し頭が変になったのかなあと自覚症状をもなきにしもあらずだが、教育水準の低さ、貧困、不幸な出来事に同情し、怒れないのであり、また、価値観、習慣も違うし、彼らの行動の裏には様々な要因があるだろうから、まず観察してみようという、判断のために怒らないのである。

リベリアを去った日以来、4ヶ月が経とうとしている。帰国した今、リベリアは遠く離れた、昔の国のように思いがちである。この4ヶ月の間に同僚、友だち、生徒から手紙を沢山受け取った。その中に、短いつきあいだったが、友情は堅いものになった、とか、お互いの間は随分離れているが、これからも手紙で近況を報告しあったり、プレゼント交換したり、末長く付きあ

いをしたいと書かれている。私は、私に新しい角度から新鮮な息吹きを吹き込んでくれたリベリアへの再着陸と親友との再会を是非実現したいと思う。

竹内隊員の報告書を読んで

沢田和佐

竹内隊員は、モンロビア職業訓練学校（職訓）の建設遅延により、一時的にリベリア電電公社に配属されたのに、7月の職訓開校を目指して、カリキュラム、実習の冊子作りのため、労働省へ再配属されたようである。

本人の2年間を無駄に過したくないとの意志から Tubman High School へ訪れ、数学、電気、化学を昼間、夜間を教えることになり、7月上旬いやおうなしに、また職訓に移り（夜間は引き続いて教える）、職訓での残りの任期を教えることの意志のないことを宣言して、自分の将来の方向性を考えざるを得ない事情が、受け入れ準備の不備と、給料配分のでたらめさなどからよく分る。

本人も述べているように、リベリア政府が公式に要請していない私立高校で数学と化学を教えることにしたのは、恥ずべき行為かもしれないが、ここまで追い込んだことに誰が責任を負えばいいのか、2度とこういう事がないようにしたいものである。

仮配属という形で Tubman. H. S. 夜間部に配属されたので、仮教師、ボランティアとして扱われ、会議、通告などの情報も少ないなかで目的意識をはっきりと持ち、生徒の学問的発展のため、学校の怠慢さと闘いながら、すべての教師が帰宅した中で、ただ一人、雨の降る中で、4th pd. の授業を終わって帰る様子、真面目な生徒達から「いまだかつて誠実で信頼のおける先生に教えてもらったことがない」との話に、おそらく教師冥利につきたであろう竹内隊員のほこらしげな姿が想像される。

リベリア教育の問題点について、教育省発行の小冊子からくわしく挙げているのは、大いに参考になる。

中でも、生徒が、自分の出来の悪いのを棚にあけて、習わなかったとか、教師がジャンプした、スキップしたりして少ししか習わなかったとか言うのは、日本の中・高の生徒と同じで、微笑ましい。

教師の地位はあまり高くなく、給料も低いのは、我が国とは些か事情が異なるようだ。

夜間部での高校の見聞として、①教師の無威厳性、②怠慢さ、③無断欠席、をあげているが、他山の石として、今後の自己鍛錬のための自戒とされたい。

生徒の側の問題点としては、①無目的（不熱心）、②貧乏、③高年齢、④ No Supporter nor Helper 等をあげ、それに対応するため、教育方針を立てて実行し、結果を考察しているのは、途中での理数科教師という業種変更のハンディキャップを見事に克服して、他の理数科教師の範となるものと言えよう。

その内容から、教育というものは、教師が常に学ぶ姿勢を忘れることなく真剣に取り組みさえすれば、必ず生徒には理解され、生徒のもつ可能性を伸ばすことが出来るものだと言うことがよく分った。

CWA (Collge of West Africa) は歴史もあるリベリアでは 1～3 位を争う優秀な私立学校のようなのである。

これに関する報告から、リベリアの私立学校の組織、運営、教師の仕事、入学制度、必要事項、カリキュラム、進学、国家試験などの様子がよく分り我が国の制度等を考える場合の参考にもなる貴重な資料と言えよう。

教師の経験が日本で全くなかったと言う竹内隊員の最後のアドバイスは、実践し、自ら実感として肌で感じたもので、迫力を持って後に続く者へ訴えるであろう。
(協力隊技術専門委員)

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を昭和54年に発刊して以来、今年で4年目を迎えました。これまで16カ国の報告書集を発刊し、多くの帰国隊員の皆様方から現地の体験に基づく貴重な生の声を寄せていただきました。

報告書集も数をおうごとに内容も充実さを増してきており、各界の多くの皆様方の協力隊を知る上での貴重な参考資料となってきました。

今後共ご活用下さる皆様方の忌憚のないご意見ご提言をいただき一層の充実をはかりたいと思っています。

末筆ながら、この報告書集のためにご多忙中にもかかわらず積極的にご協力をいただき、報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の先生方ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられました帰国隊員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

なお本報告書集のご活用にあたり他への転載等企画される場合は、青年海外協力隊事務局（啓発課）に必ずご相談下さるようお願い申し上げます。

昭和57年3月

啓発課長 小野 睦 一

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録<リベリア編>

昭和57年3月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03) 400-7261 (代)

印刷所 邦美印刷株式会社

〔非売品〕

